山口大学大学院東アジア研究科
博士論文

『源氏物語』の人生儀礼に関する研究

平成 27 年 9 月

趙　暁燕

目　次

序章　　『源氏物語』の人生儀礼に関する研究の可能性……1
1. 本研究の目的…… 2
2. 先行研究とその展開…… 5
3. 本研究の方法…… 8
4. 本研究の構成……11

第一章　『源氏物語』における夕霧の成人儀礼…… 13
―籠りの時空としての二条東院―
1. 問題提起……14
2. 夕霧の大学寮入学の実態……15
3.「籠り」における特別教育…… 19
4. 夕霧の「籠り」における個性の形成……24
結論…… 29

第二章　『源氏物語』における明石姫君の生誕・生育・成人儀礼…… 31
―裳着による転身と越境―
1. 問題提起……32
2.「口惜し」と出自の関連性…… 33
3. 五十日の祝いによる出自の変更……37
4. 袴着による出自の変更……40
5. 裳着における腰結役の意味……44
6.「裳」の持つ象徴的意味…… 49
結論…… 52

第三章　『源氏物語』における女三の宮の結婚儀礼…… 54
―媒介者としての乳母―
1. 問題提起……55
2. 親による結婚の正当性……58
3. 媒介者による結婚の正当性……67
4. 乳母による神婚の成立……71
結論…… 77

第四章　『源氏物語』における光源氏の祝賀儀礼…… 79
—儀礼の場による権力の移譲—
1. 問題提起……80
2.「うけばる」と身分の関連性…… 82
3. 鬚黒大将における「うけばる」の素質……86
4. 儀式による「転倒儀礼」の上演……90
5. 光源氏の四十賀における鬚黒の登場……93
6. 物語に見られる算賀と政界の動き……98
結論……105

第五章　『源氏物語』における葵の上の葬送儀礼……107
—呪術による境界の設定—
1. 問題提起…… 108
2. 歴史に見られる招魂儀礼と死体の洗浄…… 110
3. 紫の上の葬送儀礼と「極楽往生」…… 114
4. 光源氏の女性に対する「一蓮託生」の願望…… 119
5. 葵の上の葬送儀礼に見られる原型…… 122
結論……130

終章……132
1. 人生儀礼の構造に着目する意義…… 133
2. 表現によって構造を見出す可能性…… 134
3.『源氏物語』の人物造形における人生儀礼の方法……135

付録資料……138
参考文献……153

序章

『源氏物語』の人生儀礼に関する研究の可能性

１．本研究の目的

絢爛たる文化的遺産と言われている平安文学の中でも、最も魅力的な作品は『源氏物語』であると言っても過言ではない。『源氏物語』は虚構の物語小説であるにもかかわらず、そこには文化的遺産としての価値があるとも言えよう。それゆえ、読者ばかりでなく、研究者たちも『源氏物語』に魅了され、その研究成果は文学研究に限定されることなく、広く文化研究としても発信されている。本研究が着目するのも、そういった『源氏物語』の持つ、文化的記録媒体（アーカイブス）としての側面である。『源氏物語』の中には、様々な平安王朝の貴族文化が文字という媒体で残されている。もちろん、当時の記録書や歴史書にも、そういった文化的記録媒体としての機能は認められる。但しそれらは、現実に忠実な記録であるがゆえに、現実に規定され、束縛されてしまうという側面が否めない。物語が描くのは、現実ではなく、理想である。そこには、理想的な在り方が求められ、展開する。現実という枠組みに、物語は束縛されない。それゆえ、物語の描く文化もまた、理想的な在り方が追求されていると予測される。

以上のような文学観を踏まえつつ、ここで本研究の目的がどのようなものであるかについて、述べておくことにしよう。本研究は、日本の平安期に成立した『源氏物語』という文学作品を対象として、そこに描出された様々な人生儀礼を考察するものである。本研究では、まず、物語に描かれた儀礼の象徴的な意味について検討を加える。その際、日本の平安時代という時代背景に縛られるのではなく、広く東アジアの諸文化全般に目を配り、民俗学や文化人類学などの成果を参照しつつ、儀礼の持つ本来的な意味や構造を究明することになる。次に、そのような儀礼の持つ本来的な意味や構造を踏まえたうえで、物語の文脈の中にそれがどのように組み込まれているかを明らかにし、儀礼を契機として作中人物たちがいかなる変革を遂げるのかについて考察を展開することになる。

『源氏物語』には、様々な人生儀礼が描出されている。小嶋菜温子氏は、物語における人生儀礼の場が、一人ひとりの「社会的な役割を示す記号」であると同時に、人々の「喜怒哀楽を引き出す重要な契機」でもあると説く[1]。これは、人生儀礼が行われているその現場に視点を据え、そこに集う人々の役割や心情を見定めていこうとする立場

[1] 小嶋菜温子編『王朝文学と通過儀礼』（竹林舎、二〇〇七年）の編集後記による。

と言える。物語の局面を理解する上では、非常に有効な示唆を与えてくれてもいる。しかし、本研究の立場は、局面に限定して儀礼を見つめるのではなく、人生という時間的流れの中で儀礼を見つめるものとなる。果たして、儀礼を経験する人物たちは、それ以前（過去）とそれ以後（未来）において、いかなる変革を遂げるのか。本研究の関心は、その変革のプロセスにある。

『源氏物語』は長編小説であるため、人物は物語の進行とともに、成長してゆく。但し、物語の描くのは、単なる身体的な成長ではない。人格的に成長したり、社会的に成長したりする人物の姿を物語は描いてゆく。物語は人物のそういった成長過程を語る上で、人生儀礼を有効に活用しているのである。『源氏物語』には、生誕・生育・成人・結婚・算賀・葬送といった人生の重要な節目に行われる儀礼が描かれている。そして、それらの儀礼を経験する人物たちは、そこで何らかの成長を経験していると予測される。本研究では、生誕・生育・成人・結婚・算賀・葬送といった諸儀礼を考察することによって、物語の登場人物における成長を明らかにすることになる。

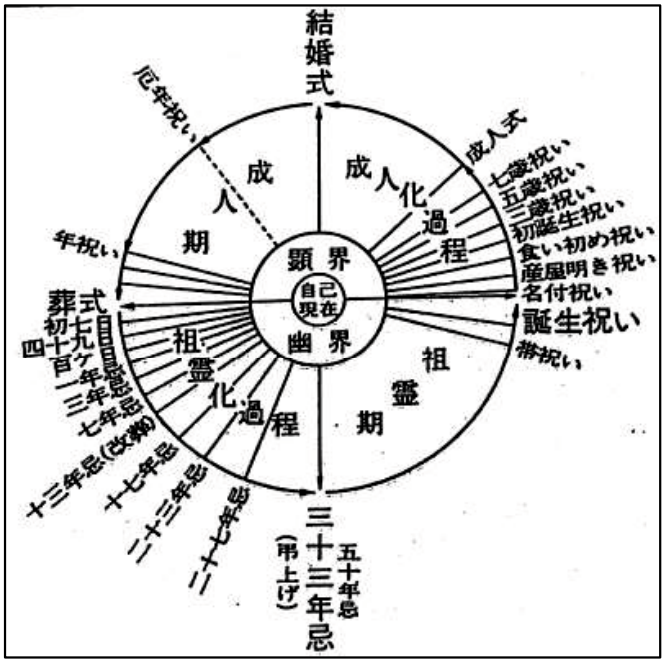
なお、これらの人生儀礼は、平安期には固有の名称で呼ばれていた。本稿で扱う儀礼を確認しておくと、第一章で取り上げる「元服」。これは、男子の成人儀礼に相当する。第二章では、「五十（いか）の祝い」・「袴着」・「裳着」を取り上げる。これらは、「五十の祝い」が誕生後五十日目に行う生誕儀礼、「袴着」が三歳になった年に行う生育儀礼、「裳着」が女子の成人儀礼となる。第三章では、結婚儀礼を扱うが、平安期に固有の名称があるわけではない。但し、『源氏物語』研究において論点となっている「降嫁（皇女の結婚）」という語を、本研究ではキーワードとして用いている。第四章では、「四十賀」を取り上げる。これは四十歳を迎えた年に行う算賀儀礼で、現代の「年祝い」に相当する。第五章では、葬送儀礼を扱うが、第三章の結婚儀礼と同じく平安期に固有の名称があるわけではない。但し、招魂儀礼に相当する「魂呼ばひ」など、葬送に関連する固有の名称はあり、それらは論文中で触れているので、ここでは詳述を避ける。

ここで参考までに、人生儀礼について概観しておこう。人生儀礼とは、人が誕生してから死ぬまでに経験する各種の通過儀礼を総称したものである。民俗学者の坪井洋文氏は日本人が一生のうちで経験する通過儀礼の各段階を【図 1】のように示している[2]。

---

[2] 坪井洋文「ムラ社会と通過儀礼」日本民俗文化大系 8『村と村人＝共同体の生活と儀礼＝』小学館、一九八四年）

この図によれば、人間はそれぞれの現在において、顕界（この世）のいずれかの段階に属することになる。顕界における生の過程は、誕生から結婚に至るまでの成人化過程と、結婚から葬式に至るまでの成人期によって構成されている。また、この成人化過程と成人期には、誕生祝い、成人式、結婚式、厄年祝い、年祝い、葬式といった儀礼が営まれる。そのうち、誕生祝いは幽界から顕界への移行を意味し、葬送儀礼は顕界から幽界への移行を意味すると捉えられている。すなわち、人の一生とは、この誕生⇒成人化⇒結婚式⇒成人期⇒葬式といった不可逆なプロセスを踏みながら成長してゆくものであると考えられるのである。



【図１：日本人の通過儀礼（坪井論文より転載）】

さて、人生儀礼の主要なカテゴリーとして、誕生・成人・結婚・年祝い・葬式といったものが想定されてくることを確認してきたわけであるが、これらの人生儀礼は、いずれも通過儀礼と捉えてよいことが分かった。では、その通過儀礼というものは、いかなる意味を持つものであろうか。この問題に関して、井之口章次氏の見解を顧みておこう。井之口氏はこの問題を、霊魂信仰の立場から解釈している。すなわち、人生儀礼の各段階において「霊を更新」する必要があったというのである。そして、その際に、

「前の段階の存在が否定され（殺され）、新しく次の段階に生まれかわる儀式を伴う」と、死と再生のプロセスをそこに見出すのである[3]。つまり、誕生から死ぬまでの人生における節目は、個人にとっては「霊を更新」するための契機としてあるということになる。

２．先行研究とその展開

ここで、従来の『源氏物語』研究において、人生儀礼がどのような問題として考察されてきたのかについて、確認しておくことにしたい。先行研究の概況としては、故実考証的な観点や、歴史学的な観点からアプローチする傾向にあったと言える。本節では、それらの研究状況を概観していくことにする。まずは故実考証的研究について見ておきたい。

①故実考証的研究

人生儀礼を研究にあたって、その基盤を構築するうえでまず必要となるのは有職故実であろう。すなわち故実考証的な研究である。具体的に言えば、それは平安時代における諸儀礼の実態を詳細に調べ、それに基づいて平安文学に描かれた儀礼の様相を検証していくというスタイルの研究で、その成果は、平安時代の文化史の概観に寄与したり、あるいは風俗を知るための事典的な役割を果たしたりすることになる。私たちはこういった研究の成果を手掛かりとして、平安時代の文化や風俗を実態的に理解することが可能となる。こういった研究としては、中村義雄著『王朝の風俗と文学』[4]や、山中裕・鈴木一雄編『平安時代の儀礼と歳事』[5]などが挙げられる。ここでは簡単に、それらの研究の内容と特徴を紹介しておきたい。

『王朝の風俗と文学』は、前篇と後編に分けられている。前篇は「王朝貴族と通過儀礼」で、後編は「王朝の習俗と俗信」である。このうち前篇では、王朝貴族が人生の各段階において経験する諸儀礼について、概説的に紹介されている。例えば、第一章の「生誕前後と幼年期」では、①出生の予言、②新生児への予言、③懐妊中のイベント、

---

[3] 井之口章次編『講座　日本の民俗３　人生儀礼』（有精堂、一九七八年）
[4] 中村義雄『王朝の風俗と文学』（塙書房、一九六二年）
[5] 山中裕・鈴木一雄編『平安時代の儀礼と歳事』（至文堂、一九九一年）

④出産の種々相や出産後の行事、といった分類のもとに、その典型的な在り方が提示されている。第二章の「成年期」、第三章の「老年期」、第四章の「葬送」もまた同様である。いわば『王朝の風俗と文学』という書物は、王朝貴族の人生儀礼の知識を得ようとする研究者にとって欠かせない指南書であると言ってもよい。

『平安時代の儀礼と歳事』もまた、『王朝の風俗と文学』と同様に、王朝貴族の文化的実態を知るうえで欠かせない研究書である。論の構成は、「皇室の継承儀礼」、「後宮制度」、「貴族の通過儀礼」、「平安時代の年中行事」といった各章から成る。なかでも、本研究と直接関わりのあるものとして注目しておきたいのは「貴族の通過儀礼」について論じられた章である。この章においては、王朝貴族が誕生から死ぬまでに経験する様々な人生儀礼が取り上げられている。すなわち、「誕生・産養」、「袴着・元服・裳着」、「結婚」、「算賀」、「葬送・服喪」という項目が立てられ、その項目毎に事例を交えながら典型的な在り方が模索されている。

以上、これらが人生儀礼に関する故実考証的研究の典型例である。その他にも、各論を扱うかたちの同種の研究があるが、それらについては本研究の各章において参照してあるので、ここでは省略する。

②歴史学的研究

日本では、貴族社会における行事の記録が十世紀初頭から盛んになった。これは、先例を重んずる風潮と共にあり、特に延喜式の制定以後、貴族の生活を記録する公家日記が数多く生まれることになった[6]。『源氏物語』に描かれた行事は、その多くが延喜天暦から寛弘にいたる時代の見聞に準拠しているという[7]。それゆえ、『源氏物語』に登場してくる人物の人生儀礼を考える際にも、研究者たちは、常に歴史上の人物の中からモデルを見出すことによって、その登場人物の経験する人生儀礼の意味を読み解く傾向にある。例えば、本研究でも研究対象とした明石姫君の「五十日」という生誕儀礼について、小林正明氏は、寛弘五年の五月五日、懐妊中の娘彰子の皇子出産を祈念して藤原道長の挙行した法華三十講を準拠として想定し、物語の「五月五日」という日付設定に、光源氏の権力への欲望の意志が透かし見えると説いている[8]。また、明石姫君の成

6 武者小路辰子「若菜の賀宴」(『国文学解釈と鑑賞』至文堂、二〇〇〇年)
7 山中裕『歴史物語成立序説』(東京大学出版会、一九六二年)
8 小林正明「五月五日の源氏物語」(『中古文学』五三、一九九四年五月)

人儀礼である裳着については、服藤早苗氏が、平安時代の史料に見える裳着の諸事例を列挙しつつ、それらを踏まえて物語に描かれた裳着の様相を考察している[9]。

近年では、歴史学的研究の集大成として、小嶋菜温子編『王朝文学と通過儀礼』[10]や、小嶋菜温子・長谷川範彰編『源氏物語と儀礼』[11]が刊行されている。前者の『王朝文学と通過儀礼』は、「平安文学の意義を今日的に問い直すために、隣接諸学の知見との交流を試みる」[12]という趣旨のもとに編集された論文集である。この書物の構成は、「Ⅰ結婚の文化史」、「Ⅱ文学史に見る通過儀礼」、「Ⅲ物語史にみる通過儀礼」、「Ⅳ源氏物語の通過儀礼」となっている。一見してわかるように、ⅠからⅢまでは「史」という視点から論じたものであり、また、Ⅳは『源氏物語』の通過儀礼に関する考察である。Ⅳでは、『源氏物語』に描かれている産養、裳着、結婚、算賀、出家、葬送といった人生儀礼を網羅しつつ、それらについての各論を収めている。これらの諸論は、歴史学や宗教学といった隣接諸学を援用することで、従来の研究の打破を試みている。

『王朝文学と通過儀礼』の発展型として刊行されたのが『源氏物語と儀礼』である。これは、「第一章　源氏物語における人生儀礼」、「第二章　源氏物語の人々と儀礼」、「第三章　源氏物語と儀礼の歌」という構成である。第一章は、生誕・袴着・元服・裳着・結婚・算賀・葬送といった人生儀礼の諸相を項目ごとに考察したものである。第二章では、『源氏物語』の主要人物に即して人生儀礼が考察されている。そこに収められた諸論は、歴史学的な観点から考察を展開する傾向にあると言える。第三章は、『源氏物語』の中の儀礼歌を考察したものである。これは儀礼自体に関する研究ではなく、儀礼の場の一部分である和歌の研究となる。

ここに取り上げた二冊の論文集に象徴されるように、近年では、『源氏物語』に描かれた人生儀礼を歴史学的な観点から考察することが隆盛となっている。勿論、物語の人生儀礼に関する研究のすべてが、この二冊の本に収められているわけではない。その他、本研究が参考とした論については、各章の問題提起において先行研究の状況を整理する際に触れることにする。

---

9 服藤早苗「平安王朝社会の着袴」（『平安王朝の子どもたち―王権と家・童―』吉川弘文館、二〇〇四年）
10 小嶋菜温子編『王朝文学と通過儀礼』（竹林舎、二〇〇七年）
11 小嶋菜温子・長谷川範彰編『源氏物語と儀礼』（武蔵野書院、二〇一二年）
12 小嶋菜温子編『王朝文学と通過儀礼』（竹林舎、二〇〇七年）の編集後記による。

３．本研究の方法

本研究は、ここまでに見てきたような故実考証的な研究や、歴史学的な研究を踏襲するものではない。本研究の立場は、民俗学や文化人類学の方法を導入し、新たな観点から『源氏物語』に描かれた人生儀礼の考察を試みようとするものである。かつて、民俗学の成果を古典文学研究の補助学として積極的に取り入れたのは折口信夫であった[13]。その後、折口の方法を踏襲しつつ、民俗学の成果を援用して物語の人生儀礼について論を展開した者として林田孝和氏が挙げられる。本研究でも、林田氏の研究成果をたびたび参照し、その問題意識に多くの示唆を得ており、詳しくは各章の考察で触れている。但し、林田氏が民俗学の成果を援用する際の立場と、本研究が民俗学や文化人類学の援用する際の立場との間には、異なる点もあることをここで確認しておきたい。林田氏の基本的な立場は、以下のような論述に端的に表れている。

> ただ注意したいのは、大正・昭和期の民俗資料を、『万葉集』や『源氏物語』などの論証資料として使用するのは、危険であり、当然避けなければならない。伝承性を豊かにもつ作品であっても、作品が時代の産物である以上、その作品の成立した時代の、あるいはそれに近い文献資料での博証の努力も怠ってはなるまい。…（中略）…民俗資料と民俗学の論理のみによって立論することは、極力慎みたい[14]。

また、林田氏は、民俗学の資料と作者の創作の関係について、以下のようにも説く。

> 民俗学的研究の方位として、作品の成立した時代の〈伝承性〉の究明が要求される。しかもその伝承性がどのように旺盛な作者の創意のなかに吸いあげられ、不朽の作品として再生・仮構されていくのか、そのプロセスが跡付けられなければならない[15]。

---

[13] 折口信夫全集第三巻（中央公論社、一九六六年）・四九七頁
[14] 林田孝和「源氏物語の民俗学的研究」（『源氏物語の精神史研究』桜楓社、一九九三年）
[15] 林田孝和、前掲注 14 論文。

こういった論述を見ると、林田氏が民俗学の資料を利用する際に留意しているのは、その資料の時代的限定性であることがわかる。しかし、そのような民俗学の資料に対する扱い方は、同時代のものに限定されているという点で歴史資料を根拠とする歴史学的な研究と同様の立場に立っていると言えるのではないか。歴史学的研究が、時代的限定性を前提としているのは当然であろう。例えば、光源氏には同時代の歴史人物である藤原道長の影が投影されていると言えば説得力があるが、もし、源義経の影が投影していると言ったとしたら、誰も納得しないであろう。しかし、民俗学はそういった論理とは違う。民俗学の視点は、出来事の先後関係に拘束されるものではない。なぜなら、それは民間で伝承されてきた生活や風俗の構造に注目するからである。例えば、源義経が兄頼朝との確執を経て辿ることとなる流離の人生と、光源氏が兄朱雀帝との確執を経て辿ることになる流離の人生とは、同じ構造にあるという点で等価と言えるのである。構造に注目する視点から採集された資料には時代的限定性が存在せず、それゆえそこには、文化の始原的な姿や本来的な構造が残されていると予測されるのである。

本研究で取り扱う人生儀礼もまた例外ではない。人生儀礼というものが、文化的様式へと洗練されていく過程で由来を忘れられ、あるいは時代とともに変化して、本来的な意味を見失ったまま、形骸化した儀式として行なわれている可能性が無いとは言えまい。もしかしたら、平安時代という状況において既に、人々はその儀礼の本来的な意味を見失い、形骸化したかたちでそれを行っていた可能性があるのではないか。それゆえ、歴史資料といえども、そこに儀礼の本来的な意味が反映されているという保証はないのである。そう考えてきたとき、時代的限定性に拘束されていないという点で、民俗学の資料は可能性を持つことになる。その資料を通して、私たちは、人生儀礼の本来的な構造や意味を見出すことが可能となるのである。

民俗学と同様に、文化人類学の成果からも、各民族で行われている人生儀礼の本質を見出すことができる。そこで報告された世界各地の儀礼に関する事例や神話には、たとえ空間的に遠く隔てられていたとしても、共通する儀礼の構造や意味が含まれている[16]。民俗学が時代や時間を超越したところで儀礼の持つ本来的な構造や意味を探究

---

16 クロード・レヴィ＝ストロース著、早水洋太郎訳『神話論理』（みすず書房、二〇〇六年）

する方法として有効であるのに対し、文化人類学は、その有効性が地理や空間を超越したところにあると言えるのである[17]。

このような観点のもとに、本研究は、民俗学や文化人類学の方法を導入することで、『源氏物語』に描かれた儀礼を分析し、その本来的な構造や意味を明らかにしていく。そして、人生儀礼を契機として登場人物たちがどのような変革を遂げるのかについて考察を展開することになる。但し、そういった考察を展開する上で、留意しなければならない点もある。それは、果して物語の描く儀礼が、形骸化したものではなく、本来的な構造や意味を含んだものであるという保証をどこに求めるのかということである。本研究ではその保証を、物語の表現に求めることになる。具体的には、「籠る」（第１章）、「口惜し」、「裳」（第２章）、「さるべき人」（第３章）、「うけばる」（第４章）、「損はれたまふ」（第５章）、といった表現である。こういった表現を手がかりに、そこに組み込まれている儀礼の本来的な構造を読み取っていくというのが本研究の立場であり、その特徴ともなるところである。ここで、このような本研究の表現に対する立場について少し説明を加えておきたい。

本研究の立場を再確認すれば、儀礼の持つ本来的な構造や意味を探究するにあたって、日本の平安時代というコンテクストに縛られるのではなく、広く東アジア・西欧・その他諸地域の文化全般に目を配り、民俗学や文化人類学などの成果を参照することになる。そして、民俗学や文化人類学によって報告された個々の事例から帰納されてくる構造が、実際に物語の文脈にどのようにして組み込まれているのかを考える。その際、本研究が注目するのは人生儀礼の場面を描く物語の表現であり、また、そういった表現を通して、そこに浮かび上がってくる構造である。そして、その構造が、果して民俗学や文化人類学の報告から帰納されてくるものと同様の構造であるか否かについて検討を加えることになる。つまり、本研究は表現と構造を両輪として進められてゆくのである。

---

[17] エドマンド・リーチによれば、文化人類の方法には三つのタイプがある。一つ目は、「先行事象を歴史的な過程をたどって」説明するタイプであり、二つ目は、「現時点で存在するシステムそのものを対象とし、それを構成する各部分の相互依存関係」を説明するタイプであり、三つ目は、「実際に観察される特定の文化制度」を［構造要素の］組み合わせという観点から説明するタイプである。（エドマンド・リーチ著、青木保・宮坂敬造訳『文化とコミュニケーション』紀伊國屋書店、一九八一年）。本研究で導入するのは、この三つ目の方法となる。因みにこれは、レヴィ＝ストロースの「構造主義」と同様の立場である。

ここで、本研究の考察対象の一つでもある夕霧の成人儀礼（平安期では「元服」と言う）を例に、表現と構造の関係について素描してみたい。例えば、この「元服」という成人儀礼について、それが平安期ではどのような実態であったかを考察するのが故実考証的研究である。また、物語の登場人物である夕霧の「元服」が、平安期に実在したどのような人物の「元服」を準拠として描かれているのかを考察するのが歴史学的研究である。こういった従来の研究方法に対して、本研究では、夕霧の「元服」を描く物語の文脈の中に「籠る」という表現が頻出する点に着目し、この「籠る」という表現を手がかりとして、成人儀礼の本来的な構造の中に「籠る」というプロセスがあることを、民俗学や文化人類学の報告事例によって検証する。それは、同時代の歴史資料に遺された貴族の「元服」記事からは見えてこないプロセスであろう。世襲制が常態化した平安期の貴族社会では、何よりも父と子の血縁関係の再確認こそが「元服」では重視されており、「籠る」という、子どもを血縁集団から引き離すためのプロセスは不要だからである。しかし、物語は夕霧の「元服」記事に連なる文脈の中で、「籠る」という表現を組み込んでいる。この「籠る」というプロセスの持つ意味を考えるためには、形骸化した「元服」を記す歴史資料ではなく、広く民俗学や文化人類学によって報告された事例を参照し、そこに組み込まれているアルカイックな構造に目を向ける必要があるのである。そのようにしてはじめて我々は、元服した直後の夕霧が「籠る」というプロセスを経験していることの意味を了解することが可能となるのである。

４．本研究の構成

以上に見てきたような問題意識と研究方法に基づき、本研究を以下のように構成した。

第一章は、光源氏の息子である夕霧の成人儀礼（元服）を考察するものである。夕霧は、少女巻で元服を迎える。当時、上流貴族の子弟は元服後、すぐに政治の世界へ参入するのが慣例であった。しかし、光源氏は夕霧に大学寮入学という進路を歩ませてゆく。従来、研究史の上では別々の問題として扱われてきた夕霧の元服と大学寮入学という出来事について、本稿では、それらを一連の物語展開として捉え、その展開の中に、諸文化に観察される成人儀礼の本来的な構造が組み込まれていることを明らかに

したいと考えている。

第二章は、光源氏の娘である明石姫君の人生儀礼を考察するものである。明石姫君という人物は、光源氏が流謫生活を送っていた頃に、明石の浦で受領の娘である明石の君との間で儲けた女君である。帰京して、政界復帰を果たした光源氏は、辺境での出生、及び地方官の娘腹という明石姫君の出自を「口惜し」と思っている。本稿で注目するのは、その姫君の出産から袴着までに至る人生儀礼の諸相を語る物語の文脈において、光源氏の姫君に対する「口惜し」という表現が頻出する点である。また、本稿では姫君の裳着という儀礼についても考察を展開する。特に、裳着において重要な役割を果たす腰結役に着目し、その「腰結役」に込められた象徴的な意味を検討してゆく。

第三章は、女三の宮の結婚儀礼を考察するものである。女三の宮は朱雀院の第三皇女で、母は先帝の姫君の藤壺女御である。朱雀院は出家を前にして、女三の宮の前途を案じ、婿選びを行い、光源氏への降嫁を決める。本稿では、女三の宮の結婚に関わる一連の叙述を結婚儀礼の構造という観点から論じる。なかでも、その儀礼的構造上の重要なプロセスとなる婿選びに注目し、そのプロセスに関与してくる女三の宮の乳母という媒介者に焦点を絞って考察を展開する。

第四章は、光源氏の祝賀儀礼を考察するものである。光源氏の四十賀は若菜上巻で、息子・妻・養女たちにより、それぞれ盛大に挙行された。四回にわたって催される賀宴のうち、養女である玉鬘が主催する賀宴が最初のものとなる。本稿では、その玉鬘が主催する光源氏の四十賀において、鬚黒大将の「うけばる」姿が描かれていることに注目する。鬚黒大将という人物に視点を据えることで、光源氏の祝賀儀礼を新たな角度から読み解いてみる。

第五章は、光源氏の正妻である葵の上の葬送儀礼を考察するものである。葵の上は、左大臣を父に持ち、母は桐壺帝と同腹の妹にあたる大宮であるため、貴族社会では上流の貴婦人となる。しかし、彼女は出産に際して物の怪に襲われ、急逝してしまう。物語はその葵の上の死について、招魂儀礼、遺体損壊、葬送儀礼、追悼儀礼といったプロセスを描出してゆく。本稿では、そのうちの遺体損壊というプロセスに注目し、そこには含まれている醜い死の意味を検討することになる。

本研究は以上のような5章立ての構成となる。

第一章

『源氏物語』における夕霧の成人儀礼

―籠りの時空としての二条東院―

１.問題提起

平安時代に成立した物語文学の中に描かれている人物たちは、政治や文化などの平安時代の諸制度に規制されるかたちで造型されている。『源氏物語』もまた、例外ではない。それゆえ、物語の登場人物を考察するうえでは、人物単体を視野に収めて分析するのではなく、その人物を取り巻く諸制度への目配りが欠かせないと言えよう。近年では、このような観点のもとに人物の人生儀礼が取り上げられる傾向にある[1]。なかでも、光源氏の子息である夕霧は、誕生・成人・結婚といった各プロセスが物語内に描かれているため、人生儀礼という観点の有効性が予測される。最近では、青木慎一が、夕霧の経験する各儀礼を検討し、その前後で語られ方に変化が見られることを指摘している[2]。また、夕霧の人生儀礼については、特に元服をめぐって考察が重ねられてきている。物語史の中で夕霧の元服を位置づける論[3]、歴史を参照しつつ、夕霧の叙位を検証する論[4]などが展開されている。なお、これらの諸論は概ね、平安時代の史料をもとに元服や叙位の実態を探り、それを物語の読みに還元していくという方法をとっていると言える。そして、そこに見出されてくるのは歴史的な慣習と物語との差異となる。但し、物語における夕霧の元服と、それに続く大学寮入学は、共に当時の慣習とは異なる措置であることを、物語自体が言及しているのであり、平安時代という歴史状況との摺り合わせに終始していては見えてこないところもあるのではないか。このような問題意識のもとに、本稿では夕霧の元服を、歴史に照らして検証するのではなく、より本来的な成人儀礼の構造において把握してみたいと考えている。

ちなみに、夕霧の元服は、物語の文脈では大学寮入学の契機ともなっている。当初、光源氏は元服後の夕霧を四位から出発させようと思っており、世間も当然そうなるだ

---

[1] 小嶋菜温子編『平安時代と隣接諸学３　王朝文学と通過儀礼』（竹林舎、二〇〇七年）、小嶋菜温子・長谷川範彰編『源氏物語と儀礼』（武蔵野書院、二〇一二年）等。
[2] 青木慎一「夕霧の通過儀礼―雲居雁との結婚を中心に―」（注１の『源氏物語と儀礼』）。
[3] 島田とよ子「夕霧の官位について―四位と六位―」（『園田語文』一九九一年十一月）、菊地真「『源氏物語』「少女巻」における夕霧の初任叙位」（『国文学研究』一九九六年十月）、高田信敬「夕霧元服―少女巻箋注―」（『むらさき』一九九八年十二月）、秋澤亙「源氏物語の世人」（『源氏物語の准拠と諸相』おうふう、二〇〇七年）等。
[4] 島田とよ子「夕霧の官位について―四位と六位―」（『園田語文』一九九一年十一月）、菊地真「『源氏物語』「少女巻」における夕霧の初任叙位」（『国文学研究』一九九六年十月）、高田信敬「夕霧元服―少女巻箋注―」（『むらさき』一九九八年十二月）、秋澤亙「源氏物語の世人」（『源氏物語の准拠と諸相』おうふう、二〇〇七年）等。

ろうと思っていた。しかし、光源氏はあえて夕霧を「浅葱」（＝六位）にとどめ、大学寮へ入学させることとしたのであった。

（光源氏）「ただいま、かうあながちにしも、まだきにおひつかすまじうはべれど、思ふやうはべりて、大学の道にしばし習はさむの本意はべるにより、いま二三年をいたづらの年に思ひなして、おのづから朝廷にも仕うまつりぬべきほどにならば、いま人となりはべりなむ。…」

（新編古典日本文学全集・少女③二一頁）[5]

この夕霧の大学寮入学という措置について、先行研究では専ら光源氏の政策という観点から論じられてきた。即ち、衰退していた大学寮を復活させ、世襲制によらない人材を登用し、学問という実力によって出世ができる社会の実現を図ったという読み取りがなされてきたのである[6]。しかし、大学寮入学というプロセスは、夕霧の足跡として描かれてゆくのであり、そうであるならば、その意味も夕霧の造型に関わって論じられるべきであろう。しかも、この大学寮入学が、元服と軌を一にするものである以上、この二つの出来事の関連にも目を配るべきである。従来、研究史の上では別々の問題として扱われてきた観のある夕霧の元服と大学寮入学という二つの出来事について、本稿では、それらを一連の物語展開として捉え、その展開の様相のうちに、諸文化に観察される成人儀礼の本来的な構造が組み込まれていることを明らかにしたいと考えている。

２.夕霧の大学寮入学の実態

夕霧の大学寮入学という進路が、いかに特殊なものであるか。これを確認するため

---

[5] 『源氏物語』の本文の引用は新編日本古典文学全集（小学館）により、巻名・冊数・頁数を記した。傍線等は引用者による。

[6] 山岸徳平「源氏物語の教育観」（『源氏物語講座』五、有精堂、一九七五年）、野口元大「夕霧元服と光源氏の教育観」（『講座源氏物語の世界』五、有斐閣、一九八一年）、鈴木一雄「『源氏物語』に描かれた大学寮」（『平安貴族の環境』至文堂、一九九一年）、塚原明弘「冷泉政権論―光源氏の摂政辞退と夕霧の大学入学―」（『源氏物語ことばの連環』おうふう、二〇〇四年）、松岡智之「冷泉朝の光源氏―秋好立后と夕霧大学寮入学―」（『むらさき』一九九七年十二月）等。

に、『源氏物語』に描かれている元服の諸例を顧みておきたい。

【表：『源氏物語』における「元服」の全用例】

番号	巻名　　・頁数	対象	年齢	備考（進路）
1	桐壺　　・044	光源氏	12	結婚
2	桐壺　　・045	朱雀	／	
3	桐壺　　・047	朱雀	／	
4	賢木　　・148	光源氏	／	
5	澪標　　・281	冷泉	11	即位、結婚
6	少女　　・020	夕霧	12	大学進学
7	少女　　・035	今上帝	13	結婚
8	梅枝　　・414	今上帝	／	
9	匂兵部卿・018	匂宮	／	官職に就く（兵部卿宮）
10	匂兵部卿・021	薫	14	官職に就く（侍従）
11	匂兵部卿・024	薫	／	
12	竹河　　・061	玉鬘の息子たち	／	

「元服」という語彙は、物語において全部で十二例あり[7]、そのうち、実際に元服の場面が描かれているのは、光源氏・冷泉帝・夕霧・今上帝・匂宮・薫の六名である。ここで注目したいのは、元服した人物たちの、その後の動向である。一つには、元服の後に結婚しているという例で、光源氏（桐壺①四七頁）・冷泉帝（澪標②三〇一頁）・今上帝（梅枝③四一四頁）の三者がそれに該当する。もう一つとしては、官職に就くという例で、匂宮と薫の場合がそれに該当し、匂宮は兵部卿に（匂兵部卿⑤一八頁）、薫は侍従に（匂兵部卿⑤二二頁）、それぞれ就任している。なお、冷泉帝は元服と同時

[7] 新日本古典文学大系『源氏物語索引』（岩波書店、一九九九年）による。なお、植田恭代「元服・裳着―源氏物語にみる成人儀礼―」（『源氏物語研究集成・第十一巻・源氏物語の行事と風俗』風間書房、二〇〇二年）にも、元服の用例調査が報告されている。そこでは、「かうぶり」等の表現も含めた調査が行われているが、本稿では除外した。

に即位しており（澪標②二八二頁）、これも官職に就いている例として考えてもよいであろう。このように元服は、結婚したり、官職に就いたりなど、何らかのかたちで社会に一定の位置を得る契機として描かれていることがわかる。一方、夕霧の動向に目を向けてみると、彼は元服後に結婚もせず、官職にも就かず、大学寮へ入学し、社会化の契機を逸していくわけである。しかも、夕霧は王氏の血統にあたるので、歴史に照らせば、大学寮へは奨学院に寄宿しながら通うはずであるが[8]、物語はそのようには描いていない。夕霧は、二条東院という、社会から隔絶された限定的な空間に閉じ込められていくのである。

・字つくることは、東の院にてしたまふ。東の対をしつらはれたり。上達部、殿上人、めづらしくいぶかしきことにして、我も我もと集ひ参りたまへり。

（少女③二三～四頁）

・うちつづき、入学といふことせさせたまひて、やがてこの院の内に御曹司つくりて、まめやかに、才深き師に預けきこえたまひてぞ、学問せさせたてまつりたまひける。

（少女③二七頁）

これらはいずれも夕霧の大学寮入学の儀式に関する叙述である。前者は、字をつける儀式。後者は、入学の礼である。両者共に二条東院という場所で行われている。夕霧はこの後、二条東院の邸内に部屋を用意され、そこで「師」とともに勉学に励む生活を送ることになる。果たして夕霧にとって、二条東院とはいかなる場所であるのか。ここでその実態を、物語の中から確認してみることにしよう。

a　うちつづき、入学といふことせさせたまひて、やがてこの院の内に御曹司つくりて、まめやかに、才深き師に預けきこえたまひてぞ、学問せさせたてまつりたまひける。大宮の御もとにも、をさをさ参でたまはず。夜昼うつくしみて、なほ児

[8] 増田繁夫によれば、「夕霧は源氏であるから、普通ならば在原行平の創設した奨学院に他の王氏の子弟とともに寄宿するはず」という（「大学寮」『講座源氏物語の世界』第五集、有斐閣、一九七五年）。

のやうにのみもてなしきこえたまへれば、かしこにてはえもの習ひたまはじとて、静かなる所に籠めたてまつりたまへるなりけり。　（少女③二七頁）

b　つと籠りゐたまひて、いぶせきままに、殿を、つらくもおはしますかな、かく苦しからでも、高き位に昇り、世に用ゐらるる人はなくやはある、と思ひきこえたまへど、おほかたの人柄まめやかに、あだめきたるところなくおはすれば、いとよく念じて、いかでさるべき書どもとく読み果てて、まじらひもし、世にも出でたらんと思ひて、ただ四五月のうちに、史記などいふ書は読み果てたまひてけり。

（少女③二七～二八頁）

c　（内大臣）「をさをさ対面もえたまはらぬかな。などかく、この御学問のあながちならん。才のほどよりあまりぬるもあぢきなきわざと、大臣も思し知れることなるを、かくおきてきこえたまふ、やうあらんとは思ひたまへながら、かう籠りおはすることなむ心苦しうはべる」と聞こえたまひて、（内大臣）「時々は異わざしたまへ。笛の音にも古ごとは伝はるものなり」とて、御笛奉りたまふ。

（少女③三七頁）

d　（夕霧）「何ごとにかはべらん。静かなる所に籠りはべりにし後、ともかくも人にまじるをりなければ、恨みたまふべきことはべらじとなん思ひたまふる」

（少女③四七頁）

e　宮の御もとへも、あいなく心憂くて参りたまはず。おはせし方、年ごろ遊び馴れし所のみ、思ひ出でらるることまされば、里さへうくおぼえたまひつつ、また籠りゐたまへり。　（少女③六七頁）

aは、夕霧が二条東院に入居することになったいきさつを語る条である。祖母の大宮のもとでは、いつまでも子ども扱いされ、勉強に専念できないから、二条東院に閉じ込められることになったとある。bは、二条東院に閉じ籠って学問に専念する生活が、夕霧にとって、辛く、苦しいものとして経験されていくという条である。夕霧は、一日でも早く学問を修得し、この状態から抜け出したいという願望を抱いていく。c

は、夕霧に対する内大臣の発言である。二条東院に閉じ籠って勉強ばかりしていることを気の毒だと述べ、時々は音楽をして気分転換してはどうかと勧めている。ｄは、夕霧の発言で、大宮から雲居雁との関係を注意されたことに対し、自分は「籠り」の状態にあるので女性と接触する機会はないと反論している。ｅは、雲居雁と引き離された夕霧が、大宮の家に行っても雲居雁を思い出すことになるため、自分の部屋である二条東院に「籠る」という条である。

このように、ａからｅまでを見てみると、いずれも二条東院が「籠る」場所として表現されていることに気づかされる。なお、少女巻には六例の「籠る」があり、そのうちの五例（ａ～ｅ）が夕霧の二条東院生活に関する用例ということになる[9]。物語は積極的に、夕霧の二条東院での生活を「籠る」という表現と結びつけてきていると言えよう[10]。

３.「籠り」における特別教育

果たして「籠る」という表現には、いかなる意味が内包されているのか。ちなみにこの語には、隔離された時空に一定期間滞留し、聖なる力を獲得するという発想が認められるという[11]。この発想を考えるうえで参考になるのが、文化人類学や民俗学で報告される成人儀礼の事例である。

まずは、Ａ・ファン・ヘネップによる報告を見てみたい。

> この儀礼（オーストラリア諸族におけるトーテム結社への加入礼）は一〇歳から三〇まで続く。儀礼の第一幕は以前の環境すなわち女と子供の世界からの分離儀礼で、新米は繁みや特別の場所や別小屋に閉じこもり、種々のタブー、特に食物のタブーに服する。時とすると、新米とその母親とのつながりはしばらくの間続

---

[9] なお、残りの一例は、大堰の山荘で暮らす明石の君に関しての用例（③三四頁）となる。

[10] 従来、夕霧をめぐる「籠る」については、夕霧巻で落葉の宮が「塗籠」に籠ることに関わって論じられてきた（小嶋菜温子「ぬりごめの落葉宮」『源氏物語の性と生誕―王朝文化史論』有斐閣、二〇〇四年）。本稿ではそれが、少女巻より問題化してくる点を重視している。

[11] 秋山虔編『王朝語辞典』（東京大学出版、二〇〇〇年、小林正明執筆「こもる（籠る）」の項）によれば、「『籠る』は日常から隔離された時空に一定期間滞留することがその根本義であり、そうした籠りによって主体に非日常的な聖なる力を憑かせうる」という。

くが、かなり無理な（ように見える）過程を経て、しばしば泣いて別れを拒む母親から決定的にはなれる時が必ずやって来るのである。…（略）…次に来るのは儀礼の積極的な面―慣習法の伝授―トーテム儀礼を新米の前でやってみせて徐々に教育していくこと、および神話の吟誦など―である。[12]

ヘネップは、オーストラリアの諸族に見られる成人儀礼の構造の第一幕として、「女と子どもの世界からの分離儀礼」があるとし、特別の場所や別小屋に閉じ籠りながら、様々なタブーに服する禁忌の生活が送られるとする。続いて、第二幕は慣習法の伝授であるとし、トーテム儀礼の教育が行われるとする。

次に、東アジア諸地域の民俗文化に見られる成人儀礼の事例についても見てみよう。(1)は日本の鹿児島県や奈良県で採集される事例であり、(2)は中国の少数民族である瑶族の事例、（3）は台湾の卑南族の事例である。

(1)鹿児島県では十六才になってニセ組みに入った者は祭礼の七日前から神社に籠って、最後の夜は正坐して一夜を明かすが、年長者が監視して少しも姿勢をくずすことを許さなかった。（中略）奈良県大峰山周辺の村々では十五才になった男子を先達が連れて大峰山に登り、西ののぞき・東ののぞきなどという断崖の上で、先達が足を押えて半身をのり出させ、人としての道義を誓わせる習慣があるが、石槌山・立山・白山など各地の霊山といわれるところには同様の例がみられる。これは村の若者を山籠りさせて男にするという古い信仰に基づくと説明されている。[13]

(2)瑶族の男子は十六歳から二十二歳の間に〝度戒〟（過法とも言う）という儀式が行われる。（中略）度戒の期間中、受戒する人は戒師の家で生活を送り、外出することや、戒師以外の人との交際を禁止される。夜間には、戒師によって瑶族の宗教儀礼などの知識が伝授される。[14]

---

[12] ファン･ヘネップ『通過儀礼』一〇一～二頁（岩波文庫、二〇一二年）
[13] 民俗学研究所編『民俗学辞典』三一二頁（東京堂出版、一九五一年）
[14] 戴庞海『先秦冠礼研究』四七頁（中州古籍出版社、二〇〇六年。但し、私に日本語訳した。）

(3)台湾卑南族の少年は十二歳か十三歳の時に「少年会所」に入り、「少年会所」にいる間に女性との談話、飲水、肉食を禁止され、一日一食の生活を送る。夜間は、人跡の無い所で歌舞などの修練に励み、仕種を間違えたり、精神状態を崩したりした場合は、鞭で打たれる。「少年会所」の滞在期間は七日間である。また、その期間中、老人から訓示を受けることになる。[15]

これらの事例では、「神社」「山（大峰山など）」「戒師の家」「少年会所」などが籠りの時空に該当する。また、傍線を施した箇所に見られる通り、成人儀礼を経験する若者はいずれも、共同体の年長者から何かしらの秘儀を伝授されることになっている。つまり若者は、自然に成長して大人になるわけではなく、しかるべきタイミングで教育を受けることにより、大人になるための条件を後天的に獲得し、大人の世界（共同体・社会）に組み込まれる資格者になるというわけである。なお、こういった諸文化に散見する成人儀礼の中に共通する要素を見出しているのが、M・エリアーデである。

成人式にはつぎの要素が含まれる。第一に、「聖所」を用意すること、ここで男たちは祭儀の間隔離されてすごす。第二に、修練者たちはその母親から引き離すこと、もっと一般的には全女性から引き離すこと、第三に、修業者たちを藩村または一定の隔離されたキャンプにおしこめること。そこで修練者たちは部族の宗教的伝承を教え込まれる。第四に、ある種の手術が施行されること。ふつうは割礼、抜歯、下部切開だが、ときとしては皮膚に傷跡をつけたり、毛髪を引き抜いたりする。[16]

エリアーデによれば、成人儀礼に含まれる要素として、①「聖所」の用意、②母親からの分離、③隔離と宗教的伝習、④試練といったものが観察されるという。これを踏まえつつ、ヘネップや民俗学の報告事例なども含めて成人儀礼の本来的な構造をまとめてみると、次のようなプロセスを抽出することができよう。

---

[15] 注 13 書、四九頁
[16] M・エリアーデ著・堀一郎訳『生と再生――イニシェーションの実証的意義』二〇～一頁（東京大学出版会ＵＰ選書、一九七一年）

〔Ⅰ〕母系集団からの分離

〔Ⅱ〕一時的な隔離生活（＝「籠り」）

〔Ⅲ〕特別な教育

この〔Ⅰ〕から〔Ⅲ〕のプロセスを踏まえつつ、再び『源氏物語』の文脈に戻ってみると、夕霧は、元服を契機として祖母の大宮から分離され（＝〔Ⅰ〕）、二条東院という空間に隔離されるかたちで（＝〔Ⅱ〕）、大学生活を送ることになっている（＝〔Ⅲ〕）。構造的な観点から見ると、夕霧の二条東院での隔離生活とは、年長者から特別教育を受け、聖なる力を付与されるための期間としてあることが予測される。

さて、ここで参照されてくるのが、夕霧の父光源氏に関して用いられた「籠り」の用例である。これは、帚木巻の「雨夜の品定め」と通称される条での表出であり、そこには、特別教育を受けるという機会が典型的なかたちで組み込まれていると考えられるからである。

長雨晴れ間なきころ、内裏の御物忌さしつづきて、いとど長居さぶらひたまふを、大殿にはおぼつかなく恨めしく思したれど、よろづの御よそひ何くれとめづらしきさまに調じ出でたまひつつ、御むすこの君たち、ただこの御宿直所の宮仕をつとめたまふ。宮腹の中将は、中に親しく馴れきこえたまひて、遊び戯れをも人よりは心やすく馴れ馴れしくふるまひたり。右大臣のいたはりかしづきたまふ住み処は、この君もいとものうくして、すきがましきあだ人なり。　（帚木①五四頁）

光源氏は、宮中の物忌により宿直所に留まっていた。そこへ好色めいた「あだ人」である頭中将がやってきて、光源氏を相手に女性談議を始める。後続する文脈には、「からうじて、今日は日のけしきもなほれり。かくのみ籠りさぶらひたまふも、大殿の御心いとほしければ、まかでたまへり」（九一頁）という一節があり、この「雨夜の品定め」は光源氏にとって「籠り」の経験として捉えられていることが分かる。また、「雨夜の品定め」が開始される条にも、「左馬頭、藤式部丞御物忌みに籠らむとて参れり」（五八頁）とあって、物語が「雨夜の品定め」を「籠り」の時空としてかたどっていることを保証する。なお、後から参入してくる左馬頭と藤式部丞は、共に世間に聞こえた恋愛の達人で、女性や風流事に熱をあげる好色者として造型されてい

る。この夜、頭中将、左馬頭、藤式部丞がそれぞれに自分の恋愛体験を語り合うことになるのだが、それを聞かされた光源氏は、中流の女性こそが恋愛対象として興味深い存在であることを知るようになった。

このような光源氏の「籠り」の経験について、先行研究では、成人儀礼と関連させる観点も提示されてきた。例えば小林茂美は、「雨夜の品定め」の趣向に、「五月雨のころの“雨慎み”の民俗」を背景とする成年戒の儀礼が反映していることを説いている[17]。また、池田節子は、帚木巻冒頭における『伊勢物語』初段の引用を根拠に、「帚木三帖は、元服直後の男主人公の奔放な恋愛譚として語られている」という視座を提供している[18]。物語世界の年立としては、桐壺巻の元服が光源氏十二歳の時で、帚木巻の「雨夜の品定め」が十七歳の時点となるので、そこには五年間の時間が流れていることになるが、前者は桐壺巻の巻末、後者は帚木巻の冒頭にあって場面としては近接しており、「雨夜の品定め」を元服に連なるものとして捉える先行研究の観点には顧みるべきところが多い。本稿でも、これら諸論に導かれつつ、光源氏の「籠り」を成人儀礼の構造という観点から捉え直しておきたい。すなわち、宮中における物忌の場は、いわば一時的な隔離生活として機能しており、その隔離生活において、光源氏は年長者たち（頭中将・左馬頭・藤式部丞）から特別教育を施され、中の品の女性との恋愛という未知の世界へと導かれてゆくという把握である。ここで、その具体的な様相を表現のレベルで確認しておくことにしよう。

> 光る源氏、名のみことごとしう、言ひ消たれたまふ咎多かなるに、いとど、かかるすき事どもを末の世にも聞きつたへて、軽びたる名をや流さむと、忍びたまひける隠ろへごとをさへ語りつたへけん人のもの言ひさがなさよ。さるは、いといたく世を憚り$\boxed{\text{まめだち}}$たまひけるほど、なよびかにをかしきことはなくて、交野の少将には、笑はれたまひけむかし。　（帚木①五三頁）

これは、「雨夜の品定め」の前段に置かれた叙述である。ここに評されてくる光源氏は、「まめだつ」青年で、好色のような放蕩行為とは縁遠い存在として語られてい

---

[17] 小林茂美「玉鬘物語論―物語展開の原動質から―」（『源氏物語論序説―王朝の文学と伝承構造―』桜楓社、一九七八年）
[18] 池田節子「物語史における元服と裳着／『源氏物語』『狭衣物語』を中心に」（『生育儀礼の歴史と文化―子供とジェンダー―』森話社、二〇〇三年）

る。但しこの光源氏評は、「社会人」「生活している人」としての側面を言い当てているに過ぎず、そういった「まめ人」として画定される光源氏の「本性」を相対化するべく、以下、帚木巻には、光源氏の「癖」と評される恋愛人としての側面が語られていくことになっていたのであった[19]。本稿では、光源氏のそのような恋愛人としての側面が引き出されてゆく契機として働いたのが、この「雨夜の品定め」における年長者たちの女性談義であったことを強調しておきたい。実際に物語では、「雨夜の品定め」の翌晩、方違えの名目で紀伊守の家を訪れた光源氏が、偶然この家に来合わせていた空蝉という女性と契りを結ぶ。この空蝉は中の品の女性に該当する存在であり、あたかも光源氏は、年長者の教えに従うかたちで女性経験を積むことになるのである。

何の心ばせありげもなくさうどき誇りたりしよと思し出づるに憎からず、なほ懲りずまに、またも[あだ名]立ちぬべき御心のすさびなめり。　（夕顔①一九一頁）

これは、帚木三帖の最終巻となる夕顔巻に語られてくる光源氏の様子である。空蝉や夕顔との恋愛を経験した光源氏が、今度は軒端荻に関心を寄せ始めており、そのような光源氏のあり方を語り手は、「あだ名」が立ちそうな好色心であると批判していく。「雨夜の品定め」の発端となる場面を顧みれば、物語は頭中将を「すきがましき[あだ人]なり」と語っていた。いわば光源氏は、そのような「あだ人」である頭中将に感化されたかのごとく、「あだ人」としての側面を前景化させてゆくのである。そして、このような表現の転換を促す契機となったのが、「雨夜の品定め」という「籠り」の時空での、頭中将をはじめとする「あだ人」たちの特別教育であったと解しておきたい。

４.夕霧の「籠り」における個性の形成

光源氏の「籠り」と同様に、夕霧の「籠り」にもまた、特別教育を受ける機会としての構造が組み込まれていることを、以下に検証してみたい。ここで注目されてくる

[19] 秋山虔「好色人と生活者―光源氏の『癖』」（『王朝の文学空間』東京大学出版会、一九八四年）

のが、夕霧と共に二条東院に籠る「師」の存在である[20]。この「師」は「才深き師」と語られており、この「才」こそが、「籠り」の時空における特別教育の具体的な内容であると考えられる。物語において「才」は二つの意味で使われており、一つは芸能、もう一つは学問となる[21]。概ね、芸能の「才」は皇族・王氏の人物に使われ、学問の「才」は藤原氏の人物に使われるという傾向が見られる。まずは、皇族・王氏と学問の「才」との関係がいかなるものであるかについて確認しておくことにしよう。

① みづからは、九重の中に生ひ出ではべりて、世の中のありさまも知りはべらず、夜昼御前にさぶらひて、わづかになむ、はかなき書なども習ひはべりし。ただ、かしこき御手より伝へはべりしだに、何ごとも広き心を知らぬほどは、文の才をまねぶにも、琴笛の調べにも、音たへず及ばぬところの多くなむはべりける。

（少女③二一頁）

② 院の帝は、男々しくすくよかなる方の御才などこそ、心もとなくおはしますと世人思ひためれ、をかしき筋、なまめきゆゑゆゑしき方は人にまさりたまへるを、…

（若菜上④七三頁）

③ 父帝にも女御にも、とく後れきこえたまひて、はかばかしき御後見のとりたてたるおはせざりければ、才など深くもえ習ひたまはず、（中略）雅楽寮の物の師どもなどやうのすぐれたるを召し寄せつつ、はかなき遊びに心を入れて生ひ出でたまへれば、その方はいとをかしうすぐれたまへり。　（橋姫⑤一二四～五頁）

①は光源氏、②は朱雀院、③は八の宮と「才」の関係についての叙述である。①は謙遜の文脈なので判断が保留されるが、②や③に語られているのは、音楽などの芸能に比べて学問としての「才」が欠落しているという内容である。この、皇族・王氏が学問の「才」を欠くということについて参考になるのが絵合巻に見られる次の条である。

---

[20] この「師」は、後に「大内記」（少女③二八頁）と判明する。
[21] 秋山虔・室伏信助編『源氏物語大辞典』「才」の項（角川学芸出版、二〇一一年）

（光源氏）「いはけなきほどより、学問に心を入れてはべりしに、すこしも才などつきぬべくや御覧じけむ、院ののたまはせしやう、才学といふもの、世にいと重くするものなればにやあらむ、いたう進みぬる人の、命、幸ひと並びぬるはいと難きものになん。品高く生まれ、さらでも人に劣るまじきほどにて、あながちにこの道な深く習ひそと諫めさせたまひて、本才のかたがたのもの教へさせたまひしに、拙きこともなく、またとりたててこのことと心得ることもはべらざりき」

（絵合②三八八～九頁）

これは、光源氏が父桐壺院の思い出を語る条である。桐壺院は生前、皇子たちに常々、学問に深入りすると短命で不幸になると説いていたとある。光源氏、朱雀院、八の宮はいずれも桐壺院の皇子であり、院の教育方針のもとで育ったため、三人とも学問が欠落し、そのかわりに、芸能の面では卓越した才能を持つことになったと解される。こういった皇族・王氏のあり方に対し、藤原氏の学問の「才」は肯定的に語られる傾向にある。

④（内大臣は）心の隈多く、いと賢き人の、末の世にあまるまで才たぐひなく、うるさながら、人としてかく難なきことは難かりける　（野分③二七二頁）

⑤手はいときよげなり。才賢くなどぞものしたまひける。　（真木柱③三六七頁）

④は内大臣の「才」について、⑤は鬚黒大将の「才」について語られたものである。いずれも学問の「才」に対する言及であり、それぞれ高く評価されている。内大臣も鬚黒大将も、共に藤原氏の血統にある人物として物語では設定されている。両者はいずれも、学問の「才」を身に付けており、その素養を基盤にしながら政治の世界で出世し、最終的に太政大臣という位にまで昇り詰めることになる。学問の「才」は、政治的資質の根拠としてあり、「官人栄達の資格のひとつとして」現れているのである[22]。このような藤原氏と学問の「才」の関係は、物語内に限定されるものではなく、史実

[22] 笹川勲「『源氏物語』の「才」と〈漢才〉」（『国学院大学大学院紀要―文学研究科―』四〇、二〇〇九年三月）

を反映したものであることが説かれてもいる[23]。ここで、夕霧における「才」を見てみることにしよう。

f（内大臣）「これは才の際もまさり、心用ゐ男々しく、すくよかに、足らひたりと世におぼえためり」（藤裏葉③四三七頁）

g（朱雀院）「これはいとこよなく進みにためるは。次々の子のおぼえのまさるなめりかし。まことにかしこき方の才、心用ゐなどは、これもをさをさ劣るまじく、あやまりても、およすけまさりたるおぼえ、いとことなめり」など、めでさせたまふ。（若菜上④二六頁）

f は、内大臣の発言で、夕霧のことを学才のほども優れていて、しっかりした男であると賞賛している。g は、朱雀院の発言である。娘女三の宮の婿候補として夕霧を考え、批評している。それによれば、夕霧は順調に昇進していて、前途有望な青年であり、朝廷に仕える学識も確かなものであるとして、肯定的に評価されている。このように夕霧は、内大臣や鬚黒大将と同様に学問の「才」が評価されているのであるが、留意すべきは、夕霧の血統が藤原氏ではなく、王氏であるという点である。果たして夕霧は、藤原氏の血統に固有のものとしてあるはずの学才を、どのようにして身に付けていったのか。ここで再度、夕霧が二条東院に「籠る」例として掲げた a の本文（少女③二七頁）を顧みておきたい。この a の本文は、夕霧の「籠り」の最初の例となる。その最初の場面において、「師」が、「才深き」人物であると語られているのである。f と g にある夕霧の「才」とは、この二条東院で夕霧に学問を授与した「師」の「才」に他あるまい。「才深き師」が教授者として夕霧と同じ空間に「籠り」、その「籠り」の時空において「才」の教授という特別教育が施されていたと解しておきたい。本来、王氏という血統にある夕霧は、二条東院に「籠る」という経験を持たなければ、藤原氏の血統に固有の学問の「才」を修得することは無かったであろう。しかし、二条東院に「師」と共に「籠る」ことで、後天的な才能としての学問の「才」が彼に授与さ

[23] 松岡智之によれば、「史上の人物をみても、公任や伊周など漢才にすぐれた藤原権門はいた。また、藤原氏は漢学を重視してきた家でもある」という（注６松岡論文）。

れていったのである。

さて、先に光源氏の「籠り」の経験を参照した際に、それが光源氏の「あだ人」としての側面を前景に引き出す契機となることについて言及した。実は、それと同様の表現上の現象が、夕霧の「籠り」においても観察されることを以下に述べてみたい。本稿で注目するのは、夕霧と「まめ」の関係である。夕霧が「まめ人」であるという規定は、この物語において「絶対的な評価として確立され、自他ともに認め合」うものとしてある[24]。従来、この夕霧の「まめ」の由来については、母葵の上から継承したもの、つまり先天的なものであると捉えられてきた[25]。本稿はこの件に関して、夕霧の「まめ」の初出状況を踏まえ、これが二条東院での「籠り」の生活を契機として表出してくるというタイミングに意味を見出しておきたい。

夕霧が二条東院に「籠る」最初の例として掲げたａの本文（少女③二七頁）を見てみると、そこでは、夕霧を二条東院に隔離し、「師」と共に「まめやかに」学問をするようにという光源氏の意向が表れていた。続いて、「籠る」の二番目の例として掲げたｂの本文（少女③二七～八頁）では、その意向に沿うかたちで夕霧の人柄が「まめ」と語られてくるのである[26]。物語において夕霧が「まめ」と語られてくるのは、このｂの場面が最初の例となる[27]。「まめ」という表現が表出してくるタイミングは、この二条東院での「籠り」の生活に入ってからということになっているのである。あたかも「まめ」は、「才」の習得を促進するための必要条件であるかのように、夕霧を造型する表現の一つとして浮上してくるのである。しかも、ｂの場面の叙述には、「おほかたの人柄まめやかに、あだめきたるところなくおはすれば」とあって、「まめ」の表出と同時に、「あだ」という要素の欠落が示されている点にも注意を要したい。これはち

---

[24] 吉村研一「人物ファイル―夕霧」（上原作和編『人物で読む源氏物語・第十六巻―内大臣・柏木・夕霧』勉誠出版、二〇〇六年）

[25] 佐貫新造「夕霧―誕生から乙女巻まで―」（『帝塚山学院大学・日本文学研究』三〇、一九九九年二月）、長谷守紘「『源氏物語』における「まめ人」の乱れ―夕霧の「下の心」に焦点を当てて―」（『愛知大学国文学』四六、二〇〇六年十一月）等。

[26] 夕霧の「まめ」が、光源氏によって方向づけられたものであるという把握は、佐藤瞳「『まめ』と夕霧―『源氏物語』・「少女」巻という始発―」（『湘南文学』四八、二〇一四年三月）にもある。

[27] 新編日本古典文学全集の注に、「このあたりから、夕霧に『まめ人』の性格が賦与される」（少女③二八頁、頭注一）とある。また、夕霧の「まめ」の初出が少女巻の当該箇所であることを指摘する論として、佐藤瞳（注 23 論文）があるが、佐藤はこれを、あくまでも語り手による規定であり、夕霧自身は「まめ」に収まりきらない欲求を抱えていると説く。

ょうど、「まめ人」として画定されていた光源氏が[28]、「籠り」を契機として「あだ人」としての側面を前景化していったのと対照的な関係に置かれていると言えよう。

さて、夕霧は二条東院での「籠り」の生活によって「才」を獲得し、一方でまた、「まめ」という表現と結びつけられることにもなった。これ以降、この「才」と「まめ」は夕霧の個性となり、それらによって夕霧の人生が切り拓かれていくことになる。

・（内大臣）「…これは才の際もまさり、心用ゐ男々しく、すくよかに、足らひたりと世におぼえためり」などのたまひてぞ対面したまふ。

（藤裏葉③四三七頁）

・負けぬる方の口惜しさはなほ思せど、罪も残るまじうぞ、まめやかなる御心ざまなどの、年ごろ異心なくて過ぐしたまへるなどを、ありがたく思しゆるす。

（藤裏葉③四四五頁）

ここに掲げたのは、いずれも内大臣が夕霧を婿として認めていくという条である。内大臣は当初、娘の雲居雁と夕霧の結婚を認めていなかった。しかし、ようやく藤裏葉巻に至って、結婚を許諾することになる。そこでは、「才」と「まめ」という二つの要素が評価されるかたちで夕霧が語られている。二条東院における「籠り」を機に夕霧の個性となった「才」と「まめ」が、今ここにおいて内大臣に受け入れられ、彼の長年の恋を成就するための要件となって機能しているのである。

結論

本稿では、少女巻で元服を迎える夕霧が、大学寮入学という進路を与えられることについて、そこに成人儀礼の本来的な構造が組み込まれている可能性について論じてきた。平安時代のこの当時、権門の貴族子弟の元服は、家筋や血筋といった先天的な条件を再確認し、それを披露する場として機能していた。それゆえ、例えば、後天的に才能を獲得するための大学寮入学という進路は、もはや現実的な利点を欠いており、

[28] 秋山虔、前掲注 16 論文。

通常は選択されない措置としてあった。しかし夕霧は、あえて大学寮へ入学させられ、自らの持っている家筋や血筋といった優位性を活用できない環境に置かれていくことになる。夕霧が、もしも当時の慣習に則って元服を行い、宮廷社会に組み込まれていたとすれば、彼は「戯れ遊びを好む」（少女③二二頁）ような普通の貴族子弟になっていたであろう[29]。だが、物語が実際に描くのは、大学寮に入学し、それを契機として二条東院という閉鎖的空間に閉じ込められていく夕霧の姿であった。しかも、物語はそれを「籠り」の経験として語ってゆく。この「籠り」という表現に注目したとき、二条東院での学生生活というものが、実は、成人儀礼の本来的な構造の「一時的な隔離生活」というプロセスに相当するものであると位置づけることができるのである。

本稿で注目したのは、この「一時的な隔離生活」において、年長者による聖なる力の授与、即ち特別教育が施されるという点である。これを考えるうえで参考になるのが光源氏の「籠り」である。この「籠り」は「雨夜の品定め」におけるもので、頭中将・左馬頭・藤式部丞といった年長の好色者たちが、特別教育の担い手として機能しているという解釈を導き出すことができる。「まめだつ」青年として振る舞っていた光源氏は、「雨夜の品定め」で一緒に籠った頭中将に感化されるかのごとく、「あだ」の側面を前景化してゆくのである。これに対し、夕霧の「籠り」では、特別教育を施す年長者の役割を担うのは「才深き師」となる。二条東院で「師」と共に「籠り」の生活を送る夕霧は、父光源氏や母方といった血縁者集団から分離されることになり、「師」という血縁外の年長者から「才」という能力を授与される。加えて、この「籠り」の生活は、夕霧にとって「まめ」という表現と結びつけられてゆく契機ともなっていた。この「才」と「まめ」は相乗的に作用しつつ夕霧の個性となり、それを軸として夕霧の人生は自立的に展開するのである。

---

[29] 村井利彦は、教育以前の夕霧の人生が推移した場合、光源氏や柏木と同様のものになったであろうと説く(「輔翼の思想―頭中将と光源氏、柏木と夕霧の友情―」注 21 書所収)。

第二章

『源氏物語』における明石姫君の生誕・生育・成人儀礼

―裳着による転身と越境―

１．問題提起

平安期に成立した物語文学である『源氏物語』には、当時行われていた儀礼文化の諸相が描かれている。それらの儀礼は、確かに、平安貴族社会や文化の実像を反映したものとして資料的に読むことも可能である。しかし、本稿の問題意識は、そういった資料的価値を探るところにはなく、あくまでも文学的な価値を見出すところにある。すなわち、平安貴族のみやびな文化として形骸化してしまった儀礼ではなく、実質的に登場人物の人生を動かしていく契機として儀礼を捉え、そこに込められている象徴的な意味について考察を展開することになる。

本稿で注目するのは、『源氏物語』の明石姫君という登場人物が経験する人生儀礼である。この明石姫君とは、物語の主人公である光源氏と明石の君という女性との間に生まれた人物である。姫君の母となる明石の君は、受領層の貴族を父（明石入道）に持つ血統で、その父と共に播磨国の明石の浦という辺鄙な場所で暮らしていた。政治の世界で失脚し、都を追われていた光源氏は、その明石の浦での流謫生活中に明石の君と結ばれ、姫君を儲けることとなったのである。

明石姫君の人生儀礼については、小嶋菜温子氏の「産養」に関する論[1]、小林正明氏や胡潔氏の「五十日」に関する論[2]、秋澤亙氏の「袴着」に関する論[3]などがある。

これらの先行論によれば、人生儀礼は平安貴族にとって、「小児の存在を社会的に周知する」[4]ためのものであり、「王朝貴族の〈家〉と〈血〉の規範的な枠組を問い直す場」[5]でもあるという。明石姫君にとって「産養」、「五十日」、「袴着」とは、彼女が光源氏

---

1 小嶋菜温子「産養をめぐる史劇―明石姫君の立后まで」（後藤祥子他編『平安文学の想像力―論集平安文学　第五号』、勉誠出版、二〇〇〇年）。また、小嶋氏による明石姫君の産養に関する論文は他に、「光源氏と明石姫君――産養をめぐる史劇」（『国文学』一九九九年四月）や「語られない産養（三）」（小嶋菜温子『源氏物語の性と生誕』立教大学出版社、二〇〇四年）などがある。

2 小林正明「五月五日の源氏物語」（『中古文学』五三、一九九四年五月）、及び、胡潔「明石の姫君の五十日について」（鈴木一雄監修『源氏物語の鑑賞と基礎知識』至文堂、二〇〇二年）。

3 秋澤亙「源氏物語の通過儀礼を読む―袴着考」（小嶋菜温子編『王朝文学と通過儀礼』竹林社、二〇〇七年）、「『蛭の子が齢』をめぐって」（小嶋菜温子、長谷川範彰編『源氏物語と儀礼』武蔵野書院、二〇一二年）。

4 胡潔、前掲注 2 論文。

5 小嶋菜温子「源氏物語の産養と人生儀礼―〈家〉と〈血〉の幻影」（前掲注 1 の『源氏物語の性と生誕生』に所収）

の子として貴族社会に承認され、更に出自が変更される人生儀礼であると考えられる。但し、これらの人生儀礼について、従来の研究では史料の参照に終始する傾向が強かったのに対し、本稿では物語の表現、具体的には「口惜し」という表現に注目することで、新たな観点を提出したいと考えている。

更に本稿では、袴着の次の段階の人生儀礼、即ち成人儀礼に相当する「裳着」に注目する。先行研究では、明石姫君の裳着について詳細に論じられることはなかった。しかし、裳着こそは、明石姫君にとって結婚（入内）と直結するものであり、いわば運命が決定的に変更される契機にほかならない。本稿が注目するのは、裳着における腰結役である。この腰結役は儀礼において重要な役割を果たす存在であり、明石姫君の裳着の場合、それは秋好中宮となる。果たして、姫君の人生の転換点において秋好中宮の存在が要請されてくることの意味とは何か。その象徴的な意味について、歴史や神話を参照しつつ、考察を展開したい。

２.「口惜し」と出自の関連性

明石姫君が経験する人生儀礼を辿っていくと、それを描く前後の文脈に「口惜し」という表現が散見することに気づかされる。因みに、物語において「口惜し」は全部で 286 例あり、そのうち明石姫君に関連して用いられているのは 3 例である[6]。この 3 例は、いずれも姫君の人生儀礼をかたどる前後の文脈において光源氏の心内や発話として表出することになる。次に掲げるのはその最初の用例で、明石姫君の誕生を語る条に表れた光源氏の心内文における「口惜し」となる。

> まことや、かの明石に心苦しげなりしことはいかにと思し忘るる時なければ、公私いそがしき紛れにえ思すままにもとぶらひたまはざりけるを、三月朔日のほど、このころやと思しやるに人知れずあはれにて、御使ありけり。とく帰り参りて、「十六日になむ。女にてたひらかにものしたまふ」と告げきこゆ。めづらしきさまにてさへあなるを思すにおろかならず。などて京に迎へてかかることをもせさせざりけむと口惜しう思さる。

[6] 用例調査は、新日本古典文学大系『源氏物語索引』（岩波書店、一九九九年）による。

（新編日本古典文学全集・澪標②二八五頁）[7]

これは、澪標巻に見える一節である。この時、光源氏は、朱雀帝から出された赦免の宣旨によって帰京し、政界への復帰を果たしていた。しかし、懐妊中の明石の君を都へ伴うことはできなかったため、光源氏の脳裏には、明石の浦に残してきた彼女のことが懸案としてあった。三月の初旬、そろそろ出産日が近づく頃かと推し量った光源氏は、明石の浦へ使者を派遣する。その使者が明石の浦から帰参して報告した内容は、十六日に無事、明石の君が女子を出産したということであった。それを聞いた光源氏は「めずらしきさま」（下線部）と、自分の血を引く子どもが生まれたことに加え、その子どもが女子であったことに二重の喜びを感じる。ここで留意すべきは、姫君出生の喜びに浸る光源氏が、一方では、「口惜し」という感想を抱いている点である。

まずはこの「口惜し」という表現の語義について確認しておきたい。『角川古語大辞典』によれば、「一面において評価しながら、不完全な箇所のあるのを、物足りなく思う心のさまをいう語」[8]という。また、『日本国語大辞典』が掲載する「口惜し」の語義の中に、「官位・身分が低くて言うに足りない」[9]とあり、『源氏物語事典』では、「残念だ、遺憾だ、つまらない、言うに足りない、の意を表す」[10]ともある。果たして光源氏は、誕生した姫君のどこに「不完全な箇所」を認め、「残念だ」という感想を漏らしているのか。「口惜し」の表現を導く文脈を本文で確認すれば、「などて京に迎へてかかることをもせさせざりけむ」とあり、光源氏は京での出産ではなかったことに対し、「残念に」思っていることがわかる。このように、姫君の身にわずかでも欠点が生じてしまうことを忌避する光源氏の心情には、同じこの澪標巻で披露されてくる占いの言葉が大きく影響していると思われる。

宿曜に「御子三人、帝、后かならず並びて生まれたまふべし。中の劣りは太政大

---

7 本文の引用は新編日本古典文学全集『源氏物語』①～⑥（小学館、一九九四～八年）により、巻名・冊数・頁数を記した。傍線等は引用者による。以下同様。
8 中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編『角川古語大辞典』第二巻（角川書店、一九八四年）、「くちをし」の項。
9 『日本国語大辞典（第二版）』第四巻（小学館、二〇〇一年）、「くちおし」の項。
10 林田孝和他編『源氏物語事典』（大和書房、二〇〇二年）、藤田麻葉執筆「くちおし」の項。

臣にて位を極むべし」と勘へ申したりしこと、さしてかなふなめり。おほかた、上なき位にのぼり世をまつりごちたまふべきこと、さばかり賢かりしあまたの相人どもの聞こえ集めたるを、年ごろは世のわづらはしさにみな思し消ちつるを、当帝のかく位にかなひたまひぬることを思ひのごとうれし思す。

（澪標②二八五頁）

光源氏はかつて、宿曜の占い師によって運命が占われ、その際に、生涯三人の子を持ち、それらは帝、后、太政大臣になるだろうという予言を得ていた。因みに、光源氏はこの澪標巻の時点で既に二人の子を儲けている。一人は藤壺との間にできた子で、現在の帝である冷泉。もう一人は葵の上との間にできた子で、現在は童殿上を果たした八歳になる夕霧。いずれも男子である。そこへ今回、明石の君との間に女子が誕生したわけであり、この女子の運命は、いずれ后になることが予定されているということになる。それゆえ光源氏は、そのような高貴な存在となるはずの女子が、「などて京に迎へてかかることをもせさせざりけむ」（澪標②二八五頁）、「かしこき筋にもなるべき人のあやしき世界にて生まれたらむは、いとほしうかたじけなくもあるべきかな」（澪標②二八六頁）などと、京の都ではなく、明石という辺境の土地で生まれてしまったことを「口惜し」と嘆いてゆくのである。

このように、明石姫君に関わって表出してくる「口惜し」の初例は、彼女の不完全性、つまりは都の女性として生まれることができなかったという出自の辺境性に起因するものであった。ここで、このような出自に関わって「口惜し」という表現が用いられる事例として顧みられてくるのが次の条である。

切懸だつ物に、いと青やかなる葛の心地よげに這ひかかれるに、白き花ぞ、おのれひとり笑みの眉ひらけたる。「をちかた人にもの申す」と独りごちたまふを、御随身ついゐて、「かの白く咲けるをなむ、夕顔と申しはべる。花の名は人めきて、かうあやしき垣根になん咲きはべりける」と申す。げにいと小家がちに、むつかしげなるわたりの、この面かの面あやしくうちよろぼひて、むねむねしからぬ軒のつまなどに這いまつはれたるを、「口惜しの花の契りや、一房折りてまゐれ」と

のたまへば、この押し上げたる門に入りて折る。

（夕顔①一三六頁）

これは夕顔巻の一節で、光源氏が病気療養中の大弐の乳母を見舞うという場面である。乳母の家の前で門が開けられるのを待っていた折に、隣家をふと見やると、笑顔を見せるかのように咲いている白い花があった。随身に尋ねたところ、夕顔という花だと言う。光源氏はそれを聞き、夕顔という名はまるで人間（＝顔）のようであると思いつつも、こうした庶民の暮らす界隈の、その賤しい垣根に咲いていることを不憫に思い、「口惜しの花の契りや」と、この花の運命の拙さを嘆く。ここで吐露される光源氏の「口惜し」は、卑賤な環境下に咲く夕顔という花の、いわば“出自の辺境性”に対するものとして捉えることができよう。因みに、この花の逸話を契機として光源氏は以後、この隣家に暮らす女（＝夕顔）のもとに通うようになるのだが、その女の運命は、結婚や恋愛で不幸な結末を迎えることになっており、あたかも夕顔の花のような「口惜し」きものであった。この夕顔という花と、そしてその花によって象徴されるかのような女の運命とを嘆く「口惜し」という表現が、先に見た通り、明石姫君に対しても用いられたのである。光源氏の心情としてかたどられた自分の娘に対する「口惜し」は、思いがけずこの夕顔の花に対して発せられた「口惜し」さをも引き寄せてしまうことになると言えよう。

以上のように、『源氏物語』における「口惜し」には“出自の辺境性”というイメージが認められるのである。明石姫君が誕生の瞬間に背負うこととなった「口惜し」とは、このような劣等性に対するものであり、具体的には、明石という辺境で出生したことや、明石一族という受領層の貴族でしかない母方の血のこととなる。光源氏はこれ以降、明石姫君が経験する人生儀礼の折ごとに、この「口惜し」という言葉を反復してゆくことになる。

３．五十日の祝いによる出自の変更

平安期において、人々が最初に経験する人生儀礼は産養である。これは生誕の際の儀礼で、小児誕生の日から数えて三、五、七、九日目に催され[11]、小児に対する形式的な饗応や、人生の門出に際しての悪鬼祓い、無病息災の祈念などが行われる[12]。産養では、親族から衣服・調度・食物などの祝いの品が贈られ[13]、この儀礼をもって親族に認知されるようになり、また、社会にも周知されることとなる[14]。しかし、明石姫君の誕生時において、その重要な意義を持つ産養という人生儀礼が欠落していることを小嶋菜温子氏が指摘している[15]。確かに、物語には明石姫君の産養に関する描写が欠落しており、その誕生に際し、例えば明石の地で母方の親族のみによって産養が行われたと想定してみても、その実態を知る術は残されていない。ただ、都にいる光源氏からは、次のような手配が施されていたことを物語は語っている。

> さる所にはかばかしき人しもありがたからむを思して、故院にさぶらひし宣旨のむすめ、宮内卿の宰相にて亡くなりにし人の子なりしを、母なども亡せてかすかなる世に経けるが、はかなきさまにて子産みたりと聞こしめしつけたるを、知るたよりありて事のついでにまねびきこえける人召して、さるべきさまにのたまひ契る。まだ若く、何心もなき人にて、明け暮れ人知れぬあばら家にながむる心細さなれば、深うも思ひたどらず、この御あたりのことをひとへにめでたう思ひきこえて、参るべきよし申させたり。いとあはれにかつは思して、出だし立てたまふ。
>
> （澪標②二八七頁）

これは、光源氏が明石姫君のために乳母を選定し、明石の浦へ送り出すという条で

---

11 山中裕・鈴木一雄編集『平安時代の儀礼と歳事』（至文堂、一九九一年）、小河寿子執筆「貴族の通過儀礼」の章。
12 『国史大辞典』第二巻（吉川弘文館、一九八〇年）、中村義雄執筆「産養」の項。
13 飯沼清子「誕生・産養・裳着」（山中裕『源氏物語を読む』吉川弘文館、一九九三年）
14 服藤早苗「通過儀礼から見た子どもの帰属―平安中期を中心にして」（田中真砂子他編『縁組と女性―家と家のはざまで』早稲田大学出版社、一九九四年
15 小嶋菜温子、前掲注１「産養をめぐる史劇―明石姫君の立后まで」論文。

ある。子どもの人格形成にとって乳母の存在は重要であるが[16]、明石の浦のような田舎ではしっかりした乳母を宛がうことは難しい。それゆえ、光源氏は京の都で姫君の乳母を選定し、明石へ派遣することを決める。この乳母の出自を確認しておくと、母はかつて桐壺帝に仕えた宣旨女房で、父は宮内卿の宰相であり、正四位相当の上達部であった。吉海直人氏によれば、このような高い出自を持つ女性を乳母にするのは当時の社会通念から外れた措置であるという[17]。しかし光源氏は、この乳母が宣旨を母に持ち、宮中の礼儀作法や教養などを熟知しているがゆえに、彼女こそが明石姫君の乳母として適材であると判断した。このような乳母に育てられてこそ、明石姫君は后がねとして立派に成長していくと考えたからである。

さて、特例的に高貴な乳母を宛がわれながらも、産養という儀式を欠落するかたちで始まった明石姫君の人生であるが、物語は「五十日の祝い」については描いていく。この五十日の祝いとは、平安期において、産養の次の段階の人生儀礼として重視されたものであり、小児の生後五十日目の夜に催す祝宴を指す。貴族社会をはじめとして、民間においても広く行われていた儀礼である[18]。以下に掲げる物語の本文によれば、明石姫君の生後五十日目に相当するのは五月五日ということになる。この「五月五日」という日付について、小林正明氏は、寛弘五年の五月五日に懐妊中の娘彰子の皇子出産を祈念して藤原道長の挙行した法華三十講を準拠として想定し、「五月五日」という日付の設定に、光源氏の権力への欲望の意志が透かし見えると説いている[19]。首肯すべき説であるが、本稿がここで注目しておきたいのは、光源氏が「口惜し」という思いを抱いている点である。

> 五月五日にぞ、五十日にはあたるらむと、人知れず数へたまひて、ゆかしうあはれに思しやる。何ごとも、いかにかひあるさまにもてなし、うれしからまし、口惜しのわざや、さる所にしも、心苦しきさまにて出で来るよ、と思す。
>
> （澪標②二九四頁）

---

16 飯沼清子、前掲注 13 論文。
17 吉海直人「明石姫君の乳母」（『平安朝の乳母達―源氏物語への階梯』、世界思想社、一九九五年）では、「当時の社会では、上達部はもちろんのこと、殿上人の娘でさえ乳母になることは滅多になかった」と指摘されている。
18 中村義雄、「幼年期の行事―五十日」（『王朝の風俗と文学』塙書房、一九六二年）
19 小林正明、前掲注 2 論文。

光源氏は依然として、姫君の誕生が京ではなく、明石のような辺境であったことに対し、「口惜し」と思っている。そのような思いを抱きながら、光源氏は次のような手配を施すことになる。

男君ならましかばかうしも御心にかけたまふまじきを、かたじけなういとほしう、わが御宿世もこの御事につけてぞかたほなりけり、と思さるる。御使出だし立てたまふ。源氏「かならずその日違へずまかり着け」とのたまへば、五日に行き着きぬ。思しやることもありがたうめでたきさまにて、まめまめしき御とぶらひもあり。

海松や時ぞともなきかげにゐて何のあやめもいかにわくらむ

心のあぐがるるまでなむ。なほかくてはえ過ぐすまじきを、思ひたちたまひね。さりともうしろめたきことは、よも」と書いてたまへり。

（澪標②二九四頁）

これは、明石姫君の五十日の祝いにあたって、光源氏が明石へ使者を派遣するという条である。その使者は、光源氏の指示によって京の物資を明石へ送ると同時に、姫君の母である明石の君に光源氏の手紙を渡す。光源氏はその手紙を通じて明石姫君への祝意を表す一方、姫君が明石という辺境で暮らしていることに対し、不満を漏らしていく。そして、手紙の末尾では、明石姫君と共に上京するよう、明石の君を促してもいる。

もし、明石姫君の五十日の祝いが京の都で行われたならば、恐らく多くの公卿が参加したであろう。それによって、明石姫君の貴族社会における存在感も高まったにちがいない。しかし、物語はそのようには描かず、明石という辺境の地で五十日の祝いが行われることを語り、むしろ姫君が貴族社会に認知される機会を逸してしまったことを表してゆくのである。光源氏はこのような現状を「口惜し」と思い、変更していかなければならないと意識する。それゆえ、五十日の祝いにあたる日に、光源氏は明石母子二人の上京を促す手紙を送ったのである。上京し、都で生活することを通じて、明石姫君に刻印された出自の辺境性という「口惜し」き要素を何とか消去しようと光

源氏は考えているのである。

明石姫君の誕生と五十日の祝いを語る前後の文脈において、光源氏は辺境の地で生まれたという姫君の出自に対し、「口惜し」という嘆きを表出する。そして、明石姫君の人生儀礼を契機に、光源氏はその「口惜し」き出自を変更する措置を施してゆく。その措置の一つは、京の乳母を明石へ派遣するということであった。宮中の風儀を熟知した乳母を明石へ派遣し、明石の地で育つのでは欠落するであろう都の教養や礼儀について、その乳母を通じて姫君に補填していこうというわけである。しかし、光源氏にとってそれはあくまでも暫定的な措置でしかない。光源氏は、五十日の祝いに際し、京の物資を明石へ送ると同時に、明石姫君の上京を促してゆく。これらの措置により、明石姫君の辺境の地で生まれたという出自は変更される方向へ向かうことになる。

４．袴着による出自の変更

松風巻に至り、明石姫君は母明石の君に連れられて、都の郊外にある大堰の山荘に移住してくることになる。この時、明石姫君は三歳の年を迎えていた。三歳という年齢は、袴着という儀式を挙行するに相応しい時期である[20]。この袴着とは、形式上は子供が初めて袴を着けるという儀式である[21]。その実質上の意味は、父方の人々が中心となって挙行する儀式である点に象徴されるように、父方側による子供の認知にほかならない[22]。明石姫君は、明石から京に移住してきたので、袴着は京で行われることになるはずである。それによって、明石姫君は光源氏の子として貴族社会に承認されることになろう。しかし、依然として姫君は母明石の君と共に京の郊外である大堰の地に留まったままであり、袴着を光源氏の自邸である二条院で行えるかどうかは未定の状態である。このような状況にあって本稿が注目するのは、光源氏が再び、袴着を迎え

---

20 服藤早苗は、「平安王朝社会の着袴」（『平安王朝の子どもたち―王権と家・童―』吉川弘文館、二〇〇四年）において、十世紀から十一世紀中期ころまでの袴着の実態を考察するところ、袴着の平均年齢は四・一歳で、十世紀には、とりわけ親王・内親王の袴着は三歳で行われることが多いと説いている。

21 中村義雄「幼年期の行事―着袴」（前掲注 18 書）

22 服藤早苗、前掲注 20 論文。及び、秋澤亙、前掲注 3 の「『蛭子の子が齢』の比喩をめぐって」論文。

る明石姫君に対して「口惜し」き思いを抱いていると語られてくる点である。

> いかにせまし、隠ろへたるさまにて生ひ出でむが心苦しう口惜しきを、二条院に渡して心のゆく限りもてなさば、後のおぼえも罪免れなむかし、と思ほせど、また思はむことといとほしくて、えうち出でたまはで涙ぐみて見たまふ。
>
> （松風②四一四～五頁）

明石姫君が明石の君のもとで日蔭の身として成長していくのを、光源氏は「口惜しき」ことと思っている。以前から光源氏は、姫君の母方の家柄が受領層に過ぎないということを懸念材料としていた。光源氏のここでの「口惜し」とは、そういった姫君の母親（明石の君）の存在に対して抱かれた気持ちであると判断される。それゆえ光源氏は、五十日の祝いの時と同様に、今度は袴着という人生儀礼を契機として、明石姫君の出自にまつわる「口惜し」き要素の消去に取りかかる。

先に述べたように、袴着は子供が父親とその一族の認知を獲得する儀式であるが、光源氏はこの儀式を、明石姫君が光源氏の子として認知されるための契機だけではなく、母親の存在自体を変更するための契機としても利用していく。すなわち、実母（明石の君）が受領の娘であるという事実を隠蔽し、上流貴族の女性（紫の上）を養母に据えることで、姫君の出自の変更を試みてゆくのである。実は、光源氏こそが、誰よりも実母の出自の重要性について痛感する人物にほかならなかった。彼は、自分が「更衣腹」として生まれたがゆえに、親王となる道が閉ざされ、源氏という臣下の身分に降ろされる経験をしてきたのである。そのような出自をめぐる苦労や絶望を、姫君の人生から払拭するべく、光源氏は袴着を契機として姫君の母親を、受領層の娘ではなく、紫の上という上流貴族の女性に変更しようと試みる。すなわち、明石姫君を実母明石の君から引き離し、紫の上の養女として二条院に引き取ろうと企図するのである[23]。

---

[23] 倉田実「平安朝の移動する子どもたち―『源氏物語』の養子縁組」（服藤早苗編『女と子どもの王朝史――後宮・儀礼・縁』森話社、二〇〇〇年）は、「受領の娘を母として出生した明石姫君は、光源氏の庶妻腹と位置づけられよう。しかし、光源氏に与えられた予言によって后がねであった。生母の出自の低さを補うためには、高い身分で教養ある養母が必要である。その養母となれるのは紫の上しかいない」と説いている。なお、『源氏物語』の養子縁組を考察する論としては、近年、村田郁恵「『源氏物語』の「養い親・養い子」」（『古代中世文学論考』第七集、新典社、二〇〇二年）、倉田実『王朝摂関期の養女たち』（翰林書房、二〇〇四年）などがある。

この光源氏の方策に対して、明石の君は抵抗の意を示すが、彼女の母尼君は思慮深い人であり、痛みを堪えて、姫君を紫の上に渡すように勧めてゆく。

（尼君）「母方からこそ、帝の御子もきはぎはにおはすめれ。この大臣の君の、世に二つなき御ありさまながら世に仕へたまふは、故大納言の、いま一階なり劣りたまひて、更衣腹と言はれたまひしけぢめにこそはおはすめれ。」

（薄雲②四二九頁）

尼君は光源氏を例にあげ、「更衣腹」の血筋を持つ光源氏が宮廷社会においていかに苦労したかを説く。この尼君の説得に従い、明石の君は姫君の将来を考慮して、姫君を紫の上へ渡すことに同意した。結果として、この母親の変更という措置は成功することになる。物語を先取りすると、若菜上巻に至り、姫君が女御となって東宮の皇子を出産した際に、自分の本当の出自を祖母尼君に教えられるという条があるのだが、その条において明石姫君の心中が次のように語られている。

心の中には、わが身は、げにうけばりていみじかるべき際にはあらざりけるを、対の上の御もてなしに磨かれて、人の思ひてこそ、宮仕のほどにも、かたへの人々をば思ひ消ち、こよなき心おごりをばしつれ、世人は、下に言ひ出づるやうもありつらむかし、など思し知りはてぬ。

（若菜上④一〇五頁）

尼君から話を聞いた明石姫君は、自分がそもそも高い地位にいられるような身分では無かったのに、紫の上の養育によって世間から軽視されずに済む存在となったことを自覚する。つまり、紫の上を母として育ったことで、出自に対して劣等感を抱くことなく、これまでの人生を過ごして来られたというわけである。ここにおいて、姫君を紫の上の養女にするという光源氏の措置の正当性が証明される結果となる。

さて、考察を姫君の袴着に戻し、その儀式の当日の様子を見てみることにしよう。

御袴着は、何ばかりわざと思しいそぐことはなけれど、けしきことなり。御しつ

らひ、雛遊びの心地してをかしう見ゆ。参りたまへる客人ども、ただ明け暮れのけぢめしなければ、あながちに目もたたざりき。ただ、姫君の襷ひ結ひたまへる胸つきぞ、うつくしげさ添ひて見えたまへる。

（薄雲②四三六頁）

光源氏は、明石姫君の袴着を世間に向けて大々的に行うつもりはなかった。しかし、その支度は格別なものであった。姫君の描写に注目してみると、襷を引き結んでいる胸のあたりがかわいらしいとあって、そこには、以前に見られたような姫君の身に漂う「口惜し」さは見られず、ただひたすら無心の姫君の姿態が明るく活写されている。

袴着はそもそも、親子あるいは一族間というごく親密な間柄だけで営まれるもので、内輪の催しとしての性格が強い[24]。明石姫君の袴着もまた、そういった内輪の催しとして行われたのであるが、留意すべきは、この二条院という光源氏の邸宅が、普段から人の出入りが頻繁な所であったと語られている点である。もし、姫君が二条院に引き取られず、大堰の山荘に留まっていたとしたら、姫君の袴着は都の人々に知られることなく、ひっそりと行われることになったであろう。しかし、二条院で儀式が行われたため、「参りたまへる客人ども」によって姫君の存在が認知され、祝福されることとなった。明石姫君は袴着を契機として、光源氏を父に持ち、紫の上を母に持つ上流貴族の姫君として世間に知られるようになったのである。

かつて光源氏は、夕顔の花に対して「口惜し」という思いを抱いた。それは夕顔という女君の象徴としても読み得るものであった。しかし光源氏は、彼女の「口惜し」き運命を変えることはできず、むしろ「なにがしの院」に連れてゆくことで彼女の死を招いてしまったのであった。その後、光源氏は明石の君との間に姫君を儲けるわけだが、その娘に対してもまた、夕顔と同じ「口惜し」という感想を漏らしてゆく。光源氏はあらゆる人生儀礼を利用して、姫君の出自に対する「口惜し」き欠点を消去していく。その結果、明石姫君は、明石という辺境の地から離れて二条院の姫君となり、更には実母明石の君から離れて紫の上を養母とすることになる。物語はこれ以降、明石姫君に対して「口惜し」という表現を用いなくなる。では、上流貴族の姫君へと変

[24] 前掲 10 書、堀淳一執筆「はかまぎ（袴着）」の項。

更された明石姫君は、今後の人生をどう歩んでゆくのか。以下に、明石姫君の裳着という人生儀礼を通してその具体的な様相を検討していくことにしたい。

５．裳着における腰結役の意味

裳着とは、女子が成人して初めて裳を着ける儀式であり、男子の元服に相当し、王朝貴族の生活史において重要な位置を占めている[25]。女子が成人するということは、すなわち、当人が結婚の資格を得たということであり、裳着はそれを公表する意味を持つ[26]。明石姫君の場合、裳着は、東宮への入内準備がととのったことを意味する。従来の研究では、この明石姫君の入内について、光源氏の王権との関わりから論じる傾向にあった[27]。それに対して本稿では、入内を促す契機としての裳着に着目し、その儀礼的意味や象徴性について考察を展開することになる。その際に、本稿が注目するのは「腰結役」の存在である。これは、男子の元服における加冠役に相当するもので、儀礼にとって重要な存在となる[28]。通常、腰結役は男性が務めるものであるが、明石姫君の裳着については、秋好中宮という女性が務めている点で留意されてくる事例と言えよう。なぜ光源氏は、あえて秋好中宮に腰結役を依頼してゆくのか。そして、そのことの象徴的な意味とは何か。このような問題意識のもとに、明石姫君の裳着について考察を展開することになる。

まずは、物語に描かれている裳着と、その裳着における腰結役の状況を【表 1】（次頁）によって確認してみることにしよう[29]。

---

25 植田恭代「元服・裳着―源氏物語にみる成人儀礼」（増田繁夫他編『源氏物語研究集成・第十一巻・源氏物語の行事と風俗』風間書房、二〇〇二年）。
26 中村義雄「成年期―元服」（前掲注 18 書）
27 秋澤亙「『夜光る玉』考――『源氏物語』潜在王権論の視座における明石姫君の位置――」（『中古文学』、一九九二年十一月）、古賀侊夫「源氏物語における王統思想―明石中宮の位相―」（『平安時代の歴史と文学　文学編』吉川弘文館、一九八一年十一月）、福長進「源氏「立后」の物語」（日向一雅編『源氏物語重層する歴史の諸相』竹林舎、二〇〇六年）等。
28 中村義雄「成年期―元服」（前掲注 18 書）
29 植田恭代、前掲注 25 論文にも、裳着の用例調査が報告されている。本稿では、植田論文を参考にしつつ、腰結役に限定するかたちの表を作成した。

【表１　『源氏物語』における裳着の一覧】

番号	巻名　・頁数	人物	主催者	腰結役	場所
1	葵　・76	紫の上	光源氏	―	二条院
2	行幸　・316	玉鬘	光源氏	内大臣	六条院春の町
3	梅枝　・412	明石姫君	光源氏	秋好中宮	六条院秋の町
4	若菜上・54	女三の宮	朱雀院	太政大臣（内大臣）	―
5	紅梅　・40	大納言の姫君達	―	―	―
6	早蕨　・269	夕霧の六の君	―	―	―
7	宿木　・474	藤壺宮(女二宮)	―	―	―

【表１】を見てみると、裳着の場面に腰結役が描かれているのは、玉鬘・明石姫君・女三の宮の三名のみであることがわかる。このうち、玉鬘と女三の宮の裳着では、いずれも、かつて頭中将と呼ばれた内大臣が腰結役を務めている。それに対して明石姫君の裳着では、秋好中宮が腰結役を務めることになっている。三例という少ない用例数の中での分析となってしまうが、この物語では、内大臣が腰結役として要請される傾向にあると、ひとまずは言えようか。そう考えたとき、明石姫君の裳着における腰結役のみが、内大臣ではなく、秋好中宮であるという点に注目されてこよう。しかもそこには、男性と女性という性差もうかがえる。ここで、まずは一般的に、腰結役を務めるのが男性であるのか、女性であるのかについて、歴史を参照してみたい。以下に掲げる【表２】（次頁）は、『源氏物語』が成立した十一世紀前後の、史料に見える裳着の腰結役の人物一覧である[30]。

[30] 服藤早苗、前掲注 20 論文における「成女式一覧」を参考にして、内親王や藤原氏の息女の裳着と腰結役に関する事例を抜粋するかたちで加工した。

【表２　十一世紀前後における裳着と腰結役の一覧】

番号	名前	裳着年	父	腰結役　・性別	史料
1	慶子内親王	916	醍醐天皇	藤原満子・女	元服部類
2	韶子内親王	924	醍醐天皇	醍醐天皇・男	西宮記
3	康子内親王	933	醍醐天皇	藤原忠平・男	西宮記・歌集
4	選子内親王	974	村上天皇	昭子女王・女	日本紀略・御遊抄
5	藤原定子	989	藤原道隆	藤原兼家・男	小右記
6	藤原娍子	990	藤原済時	藤原済時・男	小右記
7	済時の次女	990	藤原済時	藤原朝光・男	小右記
8	修子内親王	1005	一条天皇	藤原道長・男	日本紀略・小右記他
9	藤原威子	1012	藤原道長	藤原道長・男	御堂関白記
10	藤原隆子	1017	藤原道長	藤原道長・男	御堂関白記
11	藤原嬉子	1019	藤原道長	藤原道長・男	御堂関白記
12	禎子内親王	1023	三条天皇	藤原彰子・女	小右記
13	千古	1024	藤原実資	藤原実資・男	小右記
14	橘好任女	1025	橘好任	藤原資高・男	小右記

【表 2】のうち、女性が腰結役を務めている例としては、慶子内親王の裳着における藤原満子、選子内親王の裳着における昭子女王、禎子内親王の裳着における藤原彰子の三例を数えることができる。これらはいずれも内親王の裳着であるという共通性を指摘することができようか。因みに、内親王の裳着の腰結役は、父天皇（韶子内親王の裳着）が務めたり、政界の権力者（康子内親王、修子内親王の裳着）が務めたりする例も見られる。これに対して、藤原氏や橘氏といった臣下の息女たちの裳着の腰結役を見てみると、担当するのは全て男性となることがわかる。なかでも、藤原道長の息女となる威子・隆子・嬉子の裳着には注目される。これらの裳着では、全て父道長自らが腰結役を務めているのである。これを踏まえると、藤原道長と同様に政界の第一人者である光源氏も、娘である明石姫君の腰結役を担当してもよいはずだと思われ

るが、光源氏は秋好中宮に腰結役を依頼してゆくのである。次に掲げるのは、明石姫君の裳着当日の場面で、腰結役を務める秋好中宮に関する叙述が確認される箇所である。

> かくて西のおとどに、戌の時に渡り給ふ。（中略）上も、このついでに、中宮に御対面（中略）子の時に御裳たてまつる。大殿油ほのかなれど、御けはひいとめでたし、と宮は見奉れ給ふ。（中略）大臣も、思すさまにをかしき御けはひどもの、さしつどひ給　へるを、あはひめでたく思さる。
>
> （梅枝③四一二～三頁）

これによると、明石姫君の裳着は六条院の西南の殿、つまり、秋好中宮の里邸（秋の町）で行われたことがわかる。紫の上もこの機会に、秋好中宮と対面している。子の時刻に、明石姫君は裳を着けることになる。その様子を立派なものと秋好中宮は思っている。ここで注意しておきたいのは、裳着当人である明石姫君の容姿に関する描写が欠落しているという点である。姫君本人の描写は、わずかに「御けはひいとめでたし」とだけあって、秋好中宮の感想として触れられるにとどまる。これは、非常に簡略で抽象的な叙述に過ぎないと言えよう。物語が筆を費やすのは、むしろ秋好中宮の方であると言ってもよい。

そもそも、光源氏がこの裳着に至るまでのあらゆる人生儀礼を利用して、明石姫君の出自を変更しようとしてきた動機の根底には、澪標巻で語られた「御子三人、帝、后かならず並びて生まれたまふべし」（二八五頁）という明石姫君の将来に関する予言があった。光源氏はその予言の通りに明石姫君を立后させるべく、人生儀礼をコントロールしてきたのである。それゆえ今回の裳着は、姫君を天皇家へ入内させるための重要な第一歩として位置づけられよう。その裳着において、秋好中宮が腰結役に選ばれてくることの意味は、決して軽くはない。

ここであらためて、秋好中宮という人物が物語において、いかなる存在として語られてきたのかを確認しておくことにしよう。秋好中宮は、桐壺朝の皇太子であった前坊の姫君であり、母は六条御息所となる。現時点で両親は既に死去しており、光源氏の養女として冷泉後宮へ入内し、中宮となっている。しかし、秋好中宮の人生におい

て物語が重きを置いたのは、入内する前の履歴、すなわち、斎宮に卜定され、母六条御息所と共に伊勢へ下向した経験であったと言えよう。次に掲げるのは、伊勢下向に際し、母六条御息所と共に参内するという場面である。

> 申の刻に、内裏に参りたまふ。御息所、御輿に乗りたまへるにつけても、父大臣の限りなき筋に思し心ざしていつきたてまつりたまひしありさま変りて、末の世に内裏を見たまふにも、もののみ尽きせずあはれに思さる。十六にて故宮に参りたまひて、二十にて後れたてまつりたまふ。三十にてぞ、今日また九重を見たまひける。
>
> （御息所）そのかみを今日はかけじと忍ぶれど心のうちにものぞかなしき
>
> 斎宮は十四にぞなりたまひける。いとうつくしうおはするさまを、うるはしうしたてたてまつりたまへるを、いとゆゆしきまで見えたまふを、帝御心動きて、別れの櫛奉りたまふほど、いとあはれにてしほたれさせまひぬ。
>
> （賢木②九三頁）

六条御息所と斎宮（秋好中宮）は輿に乗って、申の時刻に参内した。その際、六条御息所は、かつて自分が皇太子妃として参内した時のことを回想する。自分は十六歳で東宮（前坊）に入内して、二十歳で先立たれ、宮中を退下した。そして、三十歳になった今、再び「九重」（宮中）を目の当たりにするのである。六条御息所は、華やかな往時とはうって変わった現在のわびしさを反芻し、嘆く。愁傷する六条御息所の様子に比して、十四歳になった斎宮は可愛らしく、きちんと装い立てた容姿で儀式に臨む。謁見した朱雀帝は、美しい斎宮の姿に心を動かされ、「別れの櫛」を挿す折には感涙を催す。この「別れの櫛」とは、伊勢へ赴く斎宮の頭髪に即位した帝が櫛を挿し、「京の方におもむきたまふな」と告げる儀式のことで[31]、天皇の代替わり毎に斎宮が選定されるという制度を逆手にとった儀式とも言える。だが、この朱雀帝の呪詞も虚しく、御代がわりを迎え、斎宮は伊勢の地を離れて「京の方におもむく」こととなる。帰京後の前斎宮の人生史を辿っておくと、母六条御息所が死去したことで彼女は光源氏の養女となり（澪標巻）、その光源氏の後見によって冷泉帝に女御として入内し（絵合巻）、

[31] 頭注二二（賢木②九三頁）

ついには中宮にまで昇り詰める（少女巻）。秋好中宮の人生史とは、いったんは都を離れて遠く辺境の地へと身を置きながらも、再び都という中心へと帰還し、更にはその中心点となる宮中へ入り込み、後宮后妃の頂点に立つという軌道を描くことになる。光源氏が明石姫君の裳着に際し、その腰結役をあえて秋好中宮に依頼していくことの意味とは、一つには、このような秋好中宮の人生史にあやかって、同じく辺境の地に身を置く経歴を持つ姫君の人生を、やがては中宮位にまで導こうとすることにあったと解せよう。

６．「裳」の持つ象徴的意味

さて、前節に見てきたような物語内部の論理から導き出されてくる解釈について、本節では更にそれを補完するべく、秋好中宮の「斎宮」という経歴に着目してみたい。斎宮とは、伊勢の神に奉仕する巫女のことであるが、その始原を遡る過程で『日本書紀』巻六・垂仁天皇紀二十五年三月十日条に見える次の記事が目に入ってくる。

> 三月の丁亥の朔にして丙申に、天照大神を豊耜入姫命より離ちまつり、倭姫命に託けたまふ。爰に倭姫命、大神を鎮め坐させむ処を求めて、菟田の筱幡に詣り、更に還りて近江国に入り、東美濃を廻り、伊勢国に到る。時に天照大神、倭姫命に誨へて曰はく、「是の神風の伊勢国は、則ち常世の浪の重浪帰する国なり。傍国の可怜国なり。是の国に居らむと欲ふ」とのたまふ。故、大神の教の随に、其の祠を伊勢国に立て、因りて斎宮を五十鈴川の上に興てたまふ。是を磯宮と謂ふ。則ち天照大神の始めて天より降ります処なり。
>
> （新編日本古典文学全集・三一九頁）[32]

当初、宮中で祀られていた天照大神は、崇神天皇六年に豊鍬入姫命に託され、大和国の笠縫邑に祀られた[33]。そして垂仁天皇二十五年三月十日、豊鍬入姫命の姪である倭姫命に託され、各地を廻り歩いた後に伊勢国へと到り、そこに斎宮を設置し、祀るこ

---

32 新編日本古典文学全集『日本書紀』①（小学館、一九九四年）
33 『日本書紀』巻第五・崇神天皇六年条（前掲注 32 書、二七一頁）

とになる。これが伊勢の斎宮の始まりであると『日本書紀』は記す。伊勢の斎宮となった最初の人物としての倭姫命。実はこの倭姫命の「裳」を身に着けることで、越境可能な身体性を獲得し、更には子供から大人へと転身を遂げた少年がいた。その名を小碓命（＝倭建命）という。

> 是に、天皇、其の御子の建く荒き情を惶りて詔はく、「西の方に熊曾建二人有り。是、伏はず礼無き人等ぞ。故、其の人等を取れ」とのりたまひて、遣しき。此の時に当たりて、其の御髪を額に結ひき。爾くして、小碓命、其の姨倭比売命の御衣・御裳を給はりて、剣を御懐に納れて、幸行しき。故、熊曾建が家に到りて見れば、其の家の辺にして、軍、三重に囲み、室を作りて居りき。是に、「御室の楽を為む」と言ひ動みて、食物を設け備へき。故、其の傍を遊び行きて、其の楽の日を待ちき。爾くして、其の楽の日に臨みて、童女の髪の如く、其の結へる御髪を梳り垂れ、其の姨の御衣・御裳を服て、既に童女の姿と成り、女人の中に交じり立ちて、其の室の内に入り座しき。爾くして、熊曾建の兄弟二人、其の嬢子を見咸でて、己が中に座せて、盛りに楽びき。故、その酣なる時に臨みて、懐より剣を出し、熊曾が衣衿を取りて、剣を其の胸より刺し通しし時に、其の弟猛建、見畏みて逃げ出でき。乃ち、其の室の椅の本に追ひ至り、其の背の皮を取りて、剣を尻より刺し通しき。
>
> （新編日本古典文学全集・二一七～二一九）[34]

これは、『古事記』中巻・景行天皇条に見える記事である。景行天皇の皇子小碓命は、勅命を受け、熊曾建の討伐に赴いた。しかし、熊曾建の室は、「軍、三重に」囲まれていて立ち入ることができない。そこで小碓命は、姨（叔母）の倭比売命の「御衣・御裳」を着て少女に変装し、首尾よくその囲いを突破することになる。倭比売命は、景行天皇と同腹の皇女であり、先に見た通り伊勢の斎宮の嚆矢とされる人物でもあった。小碓命が、あえてその倭比売命から「御衣・御裳」を借り受けたのは、ただ単に女装して身を隠すためだけではなく、そこには伊勢の神の力によって越境可能な身体性を

[34] 新編日本古典文学全集『古事記』（小学館、一九九七年）

獲得するという象徴的な意味も込められていたと考えておきたい[35]。更に留意すべきは、小碓命がこの熊曾征伐を果した際に「倭建命」という名称を得ている点である[36]。『古事記』の語る文脈では、その勇敢な力を称えて熊曾建から名を献上されたことになっているが、古代の成人儀礼において命名が重要な式目の一つであることに鑑みれば、ここには象徴的な次元で子供から大人への転身という物語（プロセス）が構造化されているとも読み得よう[37]。

さて、ここに示してきたエピソードは、伊勢の斎宮という存在や、その斎宮の「裳」という装束に関わって引き込まれてくる神話的イメージを確認するために参照したものであり、『源氏物語』の作者が果たしていかなる上代文献を参照していたかといった執筆状況の実態を考証するものとは趣を異にする。したがって本稿では、典拠論ではなく、あくまでも表現論の一環としてこの問題を取り扱い、文化表象としての神話的イメージを物語の解析に導入することになる。このような前提のもとに、再度、明石姫君の裳着へと考察を差し戻すことにしよう。本稿が注目したのは、裳着において、腰結役というかたちで秋好中宮が関与してきているという点であった。その第一義的な意味については前節で述べた通りである。加えて本節では、その秋好中宮の「斎宮」であったという経歴に着目し、考察を展開してきた。その結果、秋好中宮を伊勢の斎宮の創始者となった倭姫命の系譜に連なる存在として、つまりはイメージを継承する存在として捉える視点を提示することになる。すなわち、神話において小碓命が斎宮である倭姫命の助力を得て少女へと転身し、熊曾建の室への侵入を果したように、明石姫君もまた、斎宮であった秋好中宮の助力を得て成女へと転身し、宮中への入内を果そうとしているのではないかという読みの提案である。神話においてその転身は、「裳」を着るという行為によって実現されていた。物語においてその転身は、「裳着」

---

35 新編日本古典文学全集の頭注二には、「小碓命は、この倭比売命の与えたものをもって熊曾を討つことを果すわけで、伊勢の神助を得てなされた西征ということになる」（二一八頁）とある。また、本居宣長も、『古事記伝』二十七之巻において「此比賣命の御衣御裳をしも、請し賜はり賜ふ所以は、倭比賣命は、伊勢大御神の、御杖代と坐ませば、其御威御霊を假賜はむの御心なりけむかし」と、この熊曾征伐は朝廷の信奉する伊勢の神の威力を語るものであったと説いている（大野晋編『本居宣長全集』第十一巻、筑摩書房、一九六九年）。

36 「其の時より御名を称へて、倭建命と謂ふ」（前掲注 **34** 書、二二一頁）

37 同様の観点から倭建命の女装を解したものとして、畠山篤「ヤマトタケルの女装―歴史のなかの女装」（礫川全次他著『女装の民俗学』批評社、一九九四年）がある。畠山は、「初陣に少年から青年に切り変(ママ)わる成人戒的な人格変更の性格があることを思わせる」とし、この物語の構想に成人戒の発想を見て取る。

という儀式によって実現されてゆく。そしてその転身によって、小碓命は倭建命と成り、明石姫君は明石女御と成る。つまり、小碓命も明石姫君も「裳」を身に着けることによって、転身を実現するわけである。

実は、霊力が衣裳を介して分与されるという発想は古代より存在していた。折口信夫によれば、古代天皇は鎮魂式において、衣を配ることにより、自分の霊威を臣下に分与したという。そしてそれは、「衣配り」という慣習として、後世に伝えられてきたとも説く[38]。この折口説を踏まえつつ、松井健児氏は、玉鬘巻に語られている光源氏の衣装贈与について、それが光源氏から女性たちへの「精神的な力の分与」であると解した。また、氏は、衣裳があやかりものであるという「古代的な心性」について、それが王朝時代においても根強いものであるとも指摘している[39]。

そもそも、明石姫君の裳着が東宮への入内を前提として行われるものであることは、「梅枝」巻の物語状況において人々の共通認識となっていた。しかも、その入内を阻むものは現時点で何も見当たらない。権勢家たちは光源氏の威勢を憚って、自分の娘の入内を延滞するほどである。このような条件のもとにおいても、光源氏はなお、自分で腰結役を担当するのではなく、秋好中宮にその役割を依頼し、万全を期していく。光源氏が見通していたのは、伊勢の神に仕える斎宮という立場にあった秋好中宮の力を借り受けて越境する身体性を獲得し、宮中へ入っていくという神話的文脈であったのではないか。

結論

中宮と運命付けられている明石姫君の人生は、父光源氏の「口惜し」という嘆きから始まる。それは明石姫君が明石という辺境で生まれたことに加えて、受領の娘腹という出自が中宮という身分に相応しくないからである。しかも、物語は明石姫君の人生儀礼の折毎に「口惜し」という表現を織り交ぜている。その「口惜し」き要素を消去し、中宮としての姫君を作り出すのは光源氏にとって難関となる。光源氏はその難関を越える解決策を明石姫君の人生儀礼に求める。それゆえ、光源氏によって領導さ

38 折口信夫「ほうとする話」(『折口信夫全集』第二巻、中央公論社、一九八七年)
39 松井健児「『源氏物語』の贈与と饗宴―玉鬘十帖の物語機構」(『源氏物語の生活世界』翰林書房、二〇〇〇年)

れる姫君の人生儀礼は、彼女の身に存在する「口惜し」き要素を段階的に取り除く営みとして捉えることができる。出産、五十日の祝い、袴着という人生儀礼の前後において、光源氏の「口惜し」き嘆きに伴い、その「口惜し」き要素を取り除くための措置を光源氏は講じていく。そういった措置を実施したため、袴着以降、明石姫君に対する「口惜し」という表現は物語から消えていった。つまり、この「口惜し」の消滅は、姫君の出自が持っていた地縁（明石という辺境）・血縁（明石の君という実母）という劣等性の消滅を意味する。

劣等性が消滅され、正統な上流貴族の娘に変身した明石姫君の成人儀礼である裳着において、姫君の運命が決定的に変更される契機を迎える。そこで、光源氏は通例に反して、裳着における腰結役を女性である秋好中宮に務めてもらうことにする。秋好中宮は伊勢の斎宮であったという前歴を持つ女性であり、現在は、冷泉帝の中宮となっている。秋好中宮が明石姫君の裳着の腰結役を務めることには、姫君を秋好中宮にあやからせていくという光源氏の計算が含まれていよう。だが、それだけでは表面的な現象をなぞる読みにすぎない。本稿では、更にそこへ神話的イメージを導入し、秋好中宮の介在によって伊勢の神の力が注ぎ込まれてくるという読みの可能性を拓いてきた。秋好中宮から伊勢の神の力を借り受けることにより、明石姫君は女御へと転身し、宮中への入内という越境を果たすことになるのだと言えよう。そして、その延長線上には、秋好と同じく中宮という境地が予定されることにもなる。

第三章

『源氏物語』における女三の宮の結婚儀礼

―媒介者としての乳母―

１．問題提起

『源氏物語』には、登場人物の恋と結婚が様々な形で描かれている。今井源衛氏は、その多様多彩な結婚が形の上から三種類分けられると主張している。一つは「結婚に至るまでの経過に主眼を置く」もの、二つ目は「男女の出会い」を語るもの、三つ目は「結婚前から後にかけて、長期にわたる経過」を描くものである[1]。これら三種類はそれぞれ、婚約期間・恋愛契機・結婚生活として要約することができよう。また、こういった分類とは別に、私通婚（略奪婚も含む）／裁可婚[2]という、制度の内／外を観点とした形態区分もある。これら様々な結婚が描かれるなか、『源氏物語』の研究では、従来、皇女の結婚が重要な問題として注目されてきている[3]。本稿で考察の対象とするのは、この皇女の結婚に含まれる女三の宮の結婚である。女三の宮は朱雀院の第三皇女で、母は先帝の姫君の藤壺女御である。朱雀院は出家を前にして、女三の宮の前途を案じ、婿選びを行うが、蛍宮、別当大納言、柏木などの求婚者がいたにもかかわらず、光源氏への降嫁を決める。女三の宮の結婚については、彼女が光源氏へ降嫁する理由と意味をめぐって考察する論[4]や、降嫁を受ける光源氏の、准太上天皇という制度的身分に注目して考察する論[5]などがある。これら先行研究に対して本稿では、女三の宮の結婚に関わる一連の叙述を結婚儀礼の構造という観点から見つめ直すことになる。なかでも、その儀礼的構造上の重要なプロセスとなる婿選ぶに注目し、そのプロセスに関与してくる女三の宮の乳母に焦点を絞って考察を展開する。物語において、女三の宮の乳母として名前が出ているのは、左中弁の妹、中納言の乳母、侍従の乳母、小侍従、の四名である。これらのうち、女三の宮の婿選びに関与してくるのは左中弁の

---

1 今井源衛「女三の宮物語の発端」（『完訳日本の古典、第十九巻、源氏物語（六）』小学館、一九八六年）

2 「裁可婚」という言い方は今井久代「皇女の結婚―女三宮降嫁の呼びさますもの―」（『源氏物語構造論』風間書房、二〇〇一年）に見られる。

3 後藤祥子「皇女の結婚―落葉宮の場合」（『源氏物語の史的空間』東京大学出版会、一九八六年）、今井久代「皇女の結婚―女三宮降嫁の呼びさますもの―」（『源氏物語構造論』風間書房、二〇〇一年）など。

4 今井源衛「女三の宮の降嫁」（『源氏物語研究』未来社、一九六二年）、石田穣二「若菜の巻について」（『源氏物語論集』桜楓社、一九七一年）、今井久代「皇女の結婚―女三宮降嫁の呼びさますもの―」（『源氏物語構造論』風間書房、二〇〇一年）

5 浅尾広良「昼渡る光源氏―女三宮との結婚儀礼に見る天皇準拠の構造（『源氏物語の準拠と系譜』、翰林書房、二〇〇四年）、土居奈生子「〈准太上天皇〉の結婚『女三の宮の降嫁』再検討―」（『名古屋大学国語国文学』八三、一九九八年十二月）

妹という乳母である。考察の端緒として、まずはこの乳母の発言から見ていくことにしたい。次に掲げるのは女三の宮の婿選びに苦慮する朱雀院に対して、乳母が光源氏を後見にしてはどうかと進言する場面である。

a 乳母「中納言は、もとよりいとまめ人にて、年ごろもかのわたりに心をかけて、外ざまに思ひ移ろふべくもはべらざりけるに、その思ひかなひては、いとどゆるぐ方はべらじ。かの院こそ、なかなか、なほいかなるにつけても、人をゆかしく思したる心は絶えずものせさせたまふなれ。その中にも、やむごとなき御願ひ深くて、前斎院などをも、今に忘れがたくこそ聞こえたまふなれ」と申す。朱雀院「いで、その旧りせぬあだけこそは、いとうしろめたけれ」とはのたまはすれど、げに、あまたの中にかかづらひて、めざましかるべき思ひはありとも、なほやがて親ざまに定めたるにて、さもや譲りおききこえましなども思しめすべし。

（新編日本古典文学全集・若菜上④二七～八頁）[6]

b この御後見どもの中に、重々しき御乳母のせうと、左中弁なる、かの院の親しき人にて年ごろ仕うまつるありけり。この宮にも心寄せことにてさぶらへば、参りたるに会ひて物語するついでに、（乳母）「上なむ、しかじか御気色ありて聞こえたまひしを、かの院に、をりあらば漏らしきこえさせたまへ。皇女たちは、独りおはしますこそは例のことなれど、さまざまにつけて心寄せたてまつり、何ごとにつけても御後見したまふ人あるは頼もしげなり。上をおきたてまつりて、また真心に思ひきこえたまふべき人もなければ、おのらは仕うまつるとても、何ばかりの宮仕にかあらむ。わが心ひとつにしもあらで、おのづから思ひの外のこともおはしまし、軽々しき聞こえもあらむ時には、いかさまにかはわづらはしからむ。御覧ずる世に、ともかくもこの御事定まりたらば、仕うまつりよくなむあるべき。かしこき筋と聞こゆれど、女はいと宿世定めがたくおはしますものなれば、よろづに嘆かしく、かくあまたの御中に、とりわききこえさせたまふにつけても、人のそねみあべかめるを、いかで塵も据ゑたてまづらじ」と語らふに……。

（若菜上④二九～三〇頁）

---

[6] 本文の引用は新編日本古典文学全集『源氏物語』①～⑥（小学館、一九九四～八年）により、巻名・冊数・頁数を記した。傍線等は引用者による。以下同様。

ａは、女三の宮の乳母たちが、朱雀院が四人の皇女の中で最も溺愛する女三の宮の結婚（婿選び）に関して苦悩を抱えていることを語る条である。後段の文脈から判断すれば、左中弁の妹もここに含まれていると解せる。女三の宮の乳母たちの意見は、夕霧を婿の第一候補とするものであったが、しかし、夕霧は結婚したばかりで、女三の宮との結婚を受け入れるのは難しいとも述べている。次に、婿の第二候補として進言しているのが、夕霧の父親である光源氏であった。乳母の話によると、光源氏は好色心の持ち主で、その気持ちは今も絶えていないという。そして、光源氏の妻妾群の中には、正妻に相応しい身分の女性が欠けているため、高貴な血をひく女三の宮を受け入れる可能性があるとも述べている。以上のような乳母たちの意見を聞いた朱雀院は、光源氏を婿候補として定めるに至る。

ｂは、朱雀院の意向を受けた乳母が、自分の兄に対して光源氏への仲介を打診している条である。この兄は、左中弁の職にあり、六条院（＝光源氏の邸宅）に長年仕えてきた。乳母は兄に、次のような話をしていく。まず、皇女が独身を通して人生を送るのは常例であるが、朱雀院は女三の宮を心配し、自分が存命中に信用できる人を見つけ、女三の宮の後見、つまり結婚相手として彼女の将来を担保しようと考えていること。次に、光源氏は女三の宮にとって、相応しい結婚相手であると朱雀院が考えているため、左中弁を通じて、光源氏に朱雀院の意向を伝えてもらいたいということ。

このように、乳母は朱雀院に女三の宮の婿の候補者について進言するだけではなく、光源氏への打診も間接的に行うことになる。養君（この場合は女三の宮）の結婚に関して、乳母の意向が働くのは決して少なくはないが、それらは私通婚において多く見られる現象であり[7]、女三の宮の結婚のような、皇女の降嫁という公的な裁可婚に乳母という存在が介入することは異例であると考えられる。物語が、あえて乳母という存在を前面に出して女三の宮の結婚を描いてゆくところには、いかなる論理が働いているのか。本稿では、以上のような問題意識のもとに、女三の宮の結婚における乳母の役割について考察を展開してみたい。

---

7 吉海直人『源氏物語の乳母学―乳母のいる風景を読む―』世界思想社、二〇〇八年

２．親による結婚の正当性

女三の宮は、父朱雀院が出家を前にして、彼女の将来を案じることによって物語に浮上しはじめる。女三の宮は幼い頃に母を亡くしたため、後見となりうるのは父院のほかにいない。それゆえ、朱雀院がこの時点で心配しているのは、父親の保護を失った時に、女三の宮がどのようにしてこの世で生きていくかということである。そのような心配を抱きながら、朱雀院は女三の宮の結婚を考慮してゆく。朱雀院は、女性の結婚は自ら決めるのではなく、親の裁可が必要であるという価値観を抱いている。次に掲げるのは、朱雀院が女性の結婚について、親の裁可を得ることがいかに必要であるかを述べている条である。

c（朱雀院）「（前略）また$\boxed{\text{さるべき人}}$に立ち後れて、頼む陰どもに別れぬる後、心を立てて世の中に過ぐさむことも、昔は人の心たひらかにて、世にゆるさるまじきほどのことをば、思ひ及ばぬものとならひたりけむ、今の世には、すきずきしく乱りがはしきことも、類にふれて聞こゆめりかし。昨日まで高き親の家にあがめられかしづかれし人のむすめの、今日はなほなほしく下れる際のすき者どもに名を立ちあざむかれて、亡き親の面を伏せ、影を辱むるたぐひ多く聞こゆる、言ひもてゆけば、みな同じことなり。」

（若菜上④三三～四頁）

d（朱雀院）「すべてあしくもよくも、$\boxed{\text{さるべき人}}$の心にゆるしおきたるままにて世の中を過ぐすは、宿世宿世にて、後の世に衰へある時も、みづからの過ちにはならず。あり経てこよなき幸ひあり、めやすきことになるをりは、かくてもあしからざりけりと見ゆれど、なほたちまちふとうち聞きつけたるほどは、親に知られず、$\boxed{\text{さるべき人}}$もゆるさぬに、心づからの忍びわざし出でたるなむ、女の身にはますことなき疵とおぼゆるわざなる。なほなほしきただ人の仲らひにてだに、あはつけく心づきなきことなり。みづからの心より離れてあるべきにもあらぬを、思ふ心より外に人にも見え、宿世のほど定められむなむ、いと軽々しく、身のもてなしありさま推しはからるることなるを、あやしくものはかなき心ざまにやと

見ゆめる御さまなるを、これかれの心にまかせてもてなしきこゆる、さやうなることの世に漏り出でむこと、いとうきことなり」

（若菜上④三三～四頁）

ｃは、女三の宮の将来を心配する朱雀院の発言である。親や兄弟など、頼みとなる後見に先立たれても、昔は人の心が穏やかで、男の方では世間で許されないことをしないため、女性は自分の考えに従って生きていられた。しかし、当節は、親に大事に育てられてきた身分の高い家の娘が、身分のいやしい好色者にもてあそばれて浮名を立て、結局、亡き親の面目を汚して名を貶めてしまうことが多い、とある。

ｄは、女三の宮の婿選びに苦慮する朱雀院の発言である。朱雀院によれば、親や兄弟の裁可によって結婚すれば、女性の将来が良くても悪くても、それは宿運によるものであるという。たとえ不幸な暮らしになるとしても、それは当人の過ちにはならないのである。それに対して、親や兄弟の同意を得ず、自分勝手な結婚をした場合、幸運に恵まれて幸せな暮らしになるとしても、それは女性にとって、一見、悪くはなかったと思われるけれども、やはり、結婚に至る経緯を聞きつけた際には、親にも知られず、しかるべき媒介者も立てずに自分勝手な内緒事をしたということで、この上もない汚点になるという。つまり、朱雀院は、女三の宮の結婚相手は自分で決めるのではなく、親によって決められることを望んでいるのである。

ｃとｄはいずれも、朱雀院が、自分の存命中に女三の宮の結婚相手を決めようとする理由について述べたものである。注目したいのは、「さるべき人」という表現が３回にわたって繰り返されている点である。果たして、この頻出する「さるべき人」という表現は、この物語においてどのような意味合いで使われているものなのか。試みに、物語における「さるべき人」の用例を調査し、その概要を把握しておくことにしよう。

【表１　「さるべき人」に関する用例】

番号	巻名　・頁数	対象	さるべき人
1	桐壺　・023	桐壺更衣	験者
2	桐壺　・041	桐壺帝	女性

3	空蝉　・126	●軒端萩	父や兄
4	夕顔　・145	◎軒端萩	結婚相手
5	夕顔　・160	光源氏	手伝い人
6	若紫　・257	若紫	手伝い人
7	薄雲　・445	藤壺	女房
8	少女　・022	●夕霧	親・伯父・兄など
9	玉鬘　・091	●玉鬘	父内大臣
10	行幸　・300	玉鬘	宮中の人々
11	若菜上・025	◎女三の宮	婿
12	若菜上・033	●女三の宮	親・兄弟
13	若菜上・033	●女三の宮	親兄弟
14	若菜上・034	●女三の宮	親兄弟
15	若菜上・120	●明石の君	明石の入道
16	若菜下・184	光源氏	道々の名手
17	若菜下・222	女三の宮	女房・乳母
18	柏木　・303	光源氏	不明
19	柏木　・329	柏木	血縁の方々
20	橋姫　・130	八の宮	身分が高い人
21	総角　・246	◎大君	婿
22	総角　・249	◎大君	婿
23	総角　・292	薫	手伝い人
24	総角　・300	◎大君・中の君	夫
25	総角　・336	中の君	女房
26	早蕨　・366	◎夕霧の娘	薫
27	宿木　・412	匂宮	調理人
28	宿木　・414	夕霧	薫
29	東屋　・030	少将	女性

「さるべき人」について用例調査をしたところ、物語には29例あることが確認できた（【表1】を参照）。このうち本稿では、親と兄弟のことを指す7例（表中の●印）、女君の婿を指す6例（表中の◎印）の、合計13例について特に注目しておきたい。これらの「さるべき人」は、いわば女君にとって、親兄弟や婿などの親しい人、あるいは信頼できる人であり、一生の幸福にかかわる存在であると理解できよう。更にここでは、親と兄弟のことを指す7例に焦点を絞ってみたい。表中8番は夕霧の例であり、この事例のみ男子となるため除外しておくと、残りの6例の「さるべき人」は、いずれも女君の結婚に関わって表出してくるという共通性を指摘することができる。つまり物語は、女君が結婚という儀礼に臨む文脈において、親・兄弟を指す「さるべき人」という表現を用い始めるのである。この6例のうち、女三の宮の結婚に関わる「さるべき人」（表中12・13・14）については、既に本文資料（ｃ・ｄ）として掲げておいた。そこで、ここではまず、それ以外の女君の結婚に関わる「さるべき人」の用例（３例）について具体的に考察してみたい。

①（光源氏）「人知りたることよりも、かやうなるはあはれも添ふこととなむ、昔人も言ひける。あひ思ひたまへよ。つつむことなきにしもあらねば、身ながら心にもえまかすまじくなんありける。また、さるべき人々もゆるされじかしと、かねて胸いたくなん。忘れで待ちたまへよ」など、なほなほしく語らひたまふ。

（空蝉①一二六頁）

これは、光源氏が一夜を共に過ごした軒端萩を相手に語る条である。光源氏は人妻である空蝉に心惹かれ、空蝉の部屋に潜入し、契りを結ぼうとした。しかし、空蝉は忍び寄る光源氏の気配を察して小袿を脱ぎ捨てて身を隠してしまった。そこで、光源氏は、空蝉と共に寝ている軒端萩と契りを結ぶことになる。逢瀬の後、光源氏は軒端荻に、今後の二人の身の処し方について言及し、この恋が人目を忍んだものとならざるをえないことについて述べてゆく。その発言中に、「さるべき人々もゆるされじかしと」とあり、すなわち、軒端萩の「さるべき人」が二人の結婚を許さないだろうと光源氏は言うのである。この「さるべき人」について新編全集の頭注は、「軒端萩の父や

兄など、その結婚を取り決める後見の人々をさす」[8]と解釈している。実はこの条、光源氏の本心では軒端萩との関係を維持するつもりはなく、それゆえ、「その責任の一半が女の側にあるように言いくるめる」[9]のである。

②(少弐)「我さへうち棄てたてまつりて、いかなるさまにはふれたまはむとすらん。あやしき所に生ひ出でたまふも、かたじけなく思ひきこゆれど、何時しかも京に率てたてまつりて、さるべき人にも知らせたてまつりて、御宿世にまかえて見たてまつらむにも、都は広き所なれば、いと心やすかるべしと思ひいそぎつるを、ここながら命たへずなりぬること」とうしろめたがる。

（玉鬘③九一頁）

これは、夕顔の乳母の夫である少弐が重い病気に罹り、自分の死期の近いことを察して、息子たちに玉鬘のことを託すという条である。少弐の話によれば、美貌の持ち主である玉鬘が筑紫という鄙びた田舎で育てられるのは考えられないことであるという。なるべく早く彼女を京まで連れもどし、「さるべき人」に玉鬘の存在を知らせなければならないとある。ここにおける「さるべき人」は、実父内大臣のことを指す[10]。

ここで、玉鬘と内大臣の親子関係について再確認しておくことにしたい。玉鬘は、内大臣（昔の頭中将）と夕顔の間に儲けられた姫君であった。しかし、母夕顔と娘玉鬘は、突然、内大臣のもとから姿を消してしまう。その姿を消した玉鬘は、夕顔の乳母に養われることになる。玉鬘が三歳の時、母夕顔と死に別れ、そして四歳の時、夕顔の乳母夫婦に連れられて、筑紫へ下向することになる。それ以来、乳母夫婦はずっと玉鬘の将来を案じていて、いつか彼女のことを実の父である内大臣に託したいと願っていた。紆余曲折の後、玉鬘は光源氏に引き取られることになり、養女として六条院に住むようになる（玉鬘巻）。その玉鬘の存在が、成人式に相当する裳着に際し、光源氏によってついに内大臣に明かされ、更には内大臣に裳着の腰結役を務めてもらうことにもなるのである。ここに至り、玉鬘が内大臣家の姫君であるという事実が世に知られることになる。裳着の後、玉鬘と鬚黒によって強引に関係を結ばれてしまうの

8 空蝉①一二六頁・頭注十三
9 空蝉①一二六頁・頭注十三
10 玉鬘③九一頁・頭注二四

だが、この二人の関係を内大臣が黙認することにより、晴れて二人の結婚が成立し、玉鬘は鬚黒という政界の実力者の北の方となった。

③（明石の君）「人にすぐれむ行く先のこともおぼえずや。数ならぬ身には、何ごともけざやかにかひあるべきにもあらぬものから、あはれなるありさまに、おぼつかなくてやみなむのみこそ口惜しけれ。よろづのこと、さるべき人の御ためとこそおぼえはべれ、さて絶え籠りたまひなば、世の中も定めなきに、やがて消えたまひなば、かひなくなむ」とて、夜もすがらあはれなることどもを言ひつつ明かしたまふ。

（若菜上④一二〇頁）

これは、明石の君が母尼君と悲喜こもごもの運命を感嘆する場面である。将来は、明石姫君が国母になり、姫君の生んだ皇子が即位するだろうことに対して、明石の君はたとえ血統上は帝の祖母であっても、自分がそういった栄光を浴びるべき身であるとは思っていない。すべては「さるべき人の御ため」であると明石の君は言う。この「さるべき人」とは、新編日本古典文学全集の頭注によれば、明石の君の父明石入道のことを指す。明石入道は、夢を信じて明石の君を光源氏に嫁がせて、その二人の間に儲けられた姫君を東宮の女御に出世させるような「幸福な宿縁をもった人」である[11]。自分の一族にこれほどの幸福な宿縁をもたらす父明石入道が人里を離れ、山に籠ったことに対して、明石の君は残念でならないと思っている。

ここでこれまでに見てきた①から③の「さるべき人」について振り返っておこう。まず、①の軒端萩の用例では、光源氏が彼女との結婚を回避するための言い訳として、軒端荻の父や兄には自分との結婚は許してもらえないだろうと、「さるべき人」を持ち出してきていた。ここから、女性の結婚にとって、父や兄弟の意見がかなり重要であることが判る。次に、②の玉鬘の用例と、③の明石の君の用例は、いずれも父親の許可や計画に従って結婚し、幸福になるという文脈で表出している。つまり、女性の結婚には、親や兄弟の意見に従うべきであるという規範意識が存在していることを窺うことができる。同じ規範意識は、女三の宮の婿選びに際して、朱雀院によっても繰り

11 若菜上④一一九頁・頭注四

返し述べられていた。なぜ物語は、女性の結婚に際し、親の裁可の重要性を強調する場面を繰り返し描くのか。

平安期の規範意識を考えるうえで参考になるのが律令である。『戸令』第八「嫁女条」には、女性の結婚の条件について、「凡そ女に嫁せむことは、皆先づ祖父母、父母、伯叔父姑、兄弟、外祖父母に由れよ。次に舅従母、従父兄弟に及ぼせ。若し舅従母、従父兄弟、同居共財せず、及び此の親無くは、並に女の欲せむ所に任せて、婚主と為よ」と規定されている[12]。工藤重矩氏はこれについて、次のような解釈を施している。

> 親が決める結婚は律令的な意味での正式な結婚の条件を満たしており、親同士の許諾を経て妻（正妻）となれば、娘は家や法によって保護される。男親の庇護があること、それが世間的幸福の第一の条件である[13]。

即ち、貴族社会において正式な結婚は、親の許諾が必須条件なのである。ここで、平安期の貴族社会の実相を顧みておくことにしよう。参考として、『栄花物語』と『大鏡』に語られた結婚の事例を見てみたい。本稿で注目するのは、藤原済時という実在した人物の二人の娘の結婚に関する叙述である[14]。これを通して、結婚における親の関与がいかなる重要性を持つのかについて確認しておきたい。

e　東宮の十五六ばかりにおはしましけるに、ある僧の経尊く読みければ、つねに夜居せさせて世の物語申しけるついでに、小一条殿の姫君の御事を語りきこえさせけるに、宮、御耳とどまりて思しめして、この僧を夜ごとに召しつつ経を読ませさせたまひて、ただ夜の御物語には、この小一条のわたりの御事を言種に仰せられて、「このことかならず言ひなしたらば」など、いみじう真心に仰せられければ、大将に聞えければ、かくてのみやは過ぐさせたまふべき、花山院の御時もかしこうのがれましし か、帝のいと若うおはしますにあはせて、内裏にも中宮さへおはしませば、いとわづらはし、これは麗景殿さぶらひたまふめれど、それはあへな

12 「戸令第八」（日本思想大系『律令』岩波書店、一九七六）
13 工藤重矩「婚姻制度と恋愛物語の型―母親の立場による物語構想の制約」（『源氏物語の結婚』中公新書版・中央公論社、二〇一二年）。なお、以下に本論で参照する平安期の婚姻に関する諸事例については、工藤氏の論から多くの示唆を得ている。
14 工藤重矩、前掲注 13 論文にも、藤原済時の娘の結婚の事例が取り上げられている。

んなど思していそぎたまふ。姫君、十九ばかりにおはしますべし[15]。

f　小一条の中の君と聞ゆるは、宣耀殿の御弟の君、殿も上も、ともかうもなさでうせたまひにしかば、いかで女御殿に劣らぬさまのことをなど思しかまへて、東宮の御弟の帥宮に聞えつけたまへりしかば、南院に迎へたまへりしかど、年月に添へて御心ざし浅うなりもていきて、和泉守道貞が妻を思し騒ぎて、この君をばことのほかに思したりしかば、居わづらひて、小一条の祖母北の方の御もとに帰りたまひにしぞかし[16]。

eは、夜居の僧から娍子の事を聞いた東宮（＝三条天皇）が、娍子に関心を寄せるという条である。僧は、東宮が関心を持ったことを娍子の父済時に告げた。それを聞いた済時は、花山院からの入内の要請を断り、また、帝（＝一条天皇）の後宮には既に中宮定子がいるということで入内をも断念し、東宮への入内を決意する。

fは、済時のもう一人の娘、即ち娍子の妹である「中の君」の結婚について記した条である。この時、中の君は両親を失っていたのだが、姉に劣らぬ出自であるため、東宮（＝三条天皇）の弟の帥宮（＝敦道親王）に意向を通じて接近し、男女の関係を持つようになった。やがて、中の君は正式に帥宮の邸宅である南院に迎えられることになる。しかし、年月が経つにつれて帥宮の気持ちは冷えてゆき、帥宮は和泉守道貞の妻（和泉式部）との恋愛に熱中するようになる。中の君は居づらくなり、ついに祖母のもと（小一条）に帰ってしまうという結果となる。この一連の出来事は『大鏡』にも記されている。

g　小一条の大将の御姫君ぞ、ただ今の皇后宮と申しつるよ。三条院の御時に、后にたてたてまつらむと思しける、こちよりては、大納言の女の、后にたつ例なかりければ、御父大納言を贈太政大臣になしてこそは、后にたてさせたまひてしか。されば皇后宮いとめでたくおはしますめり[17]。

---

15 新編日本古典文学全集（小学館）『栄花物語』巻第四「みはてぬゆめ」
16 新編日本古典文学全集（小学館）『栄花物語』巻第八「はつはな」
17 新編日本古典文学全集（小学館）『大鏡』「師尹伝」

h いま一所の女君こそは、いとはなはだしく心憂き御有様にておはすめれ。父大将のとらせたまへりける処分の領所、近江にありけるを、人にとられければ、すべきやうなくて、かばりになりぬれば、もののはづかしさもしられずや思はれけむ、夜、かちより御堂にまゐりて、うれへ申したまひしはとよ[18]。

gは、三条天皇が東宮だった時に、娍子が父済時の裁可によって入内し、女御となり、やがて敦明親王他の皇子たちを産み、ついには三条天皇即位の翌年（一〇一二年）に皇后宮の地位にまで昇ったという記述である。

一方、hは、妹の中の君が、父済時の歿後に帥宮敦道親王と結婚し、二、三年ほど過ごしたものの、敦道親王の心移りによって離婚することとなり、姉の勧めに従って小一条邸に帰ることになったという経緯を記したものである。なお、この中の君が後に経済的に困窮した状況に陥ることも、hは語っている。この済時の二人の娘の運命について、新編日本古典文学全集『栄花物語』の頭注は以下のように批評している。

『大鏡』師尹伝はこの女性に関して、「父殿うせたまひにし後、御心わざに、冷泉院の四の親王、帥の宮と申す御上にて」とし、自らの意志で結婚したとする。当時の風俗としては考えにくいことであるが、後文に東宮と姉娍子が、この結婚は知らぬことであったので、仲がおかしくなっても気楽だ、と思ったとあることから、『栄花』も『大鏡』と同じく、中の君の意志で結婚したと書いていると解釈すべきであろう[19]。

つまり、姉の娍子は父親の裁可婚であるのに対し、妹の中の君は私通婚であったことが判明する。本人の運不運ということはあるにしても、父親の庇護のもとに入内した姉の境遇と、父親の歿後に自分の意志で結婚した妹の境遇とを見比べてみると、親の許可の有無が女性の後の人生に大きな影響を与えていることがわかる。

ここで再び『源氏物語』に戻っておこう。朱雀院は、当時の規範意識に則って、女性の結婚に関し、「さるべき人」の重要性を強調していた。これは、裁可婚こそが女性

18 新編日本古典文学全集（小学館）『大鏡』「師尹伝」（小学館、一九九六年）
19 新編日本古典文学全集（小学館）『栄花物語』巻第八の頭注一一

にとって幸福をもたらすものであり、私通婚は女性を不幸にするという考えにほかならない。朱雀院は、自分の死後、もし女三の宮が自分の意志によって誰かと結婚すれば、『栄花物語』や『大鏡』に語られた済時の娘中の君の場合と同じように不幸に陥る可能性が高いと考えているのである。そして、自分が存命中、親としての立場で結婚相手を決めることができれば、女三の宮は幸福な人生を送ることができるだろうという考えを朱雀院は抱いていると読み取っておきたい。

親の許諾を得た結婚であれば、律令上も、世間にも認められ、所謂正式な結婚として認知されることになる。朱雀院によって主導される婿選びからうかがえる価値観とは、親の裁可によってこそ結婚の正当性が保証されるというものなのである。

３．媒介者による結婚の正当性

前節では結婚における親の関与について論じてきたが、本節では更に、親以外の第三者が関与してくることで、結婚の正当性が保証されていくという事例について論じていきたい。なお、本節ではこの第三者のことを、「媒介者」と規定しておくことにする。結婚において媒介者の存在が重視されるという価値観は、工藤重矩氏によれば、儒教によるものだという[20]。例えば、漢籍の『孟子』には、「父母の命、媒妁の言を待たずして、穴隙を鑽って相窺ひ、牆を踰えて相従はば、則ち父母・國人皆之を賤まん」とある[21]。子供が親の許可や媒酌の仲介を待たずに、勝手に塀や壁に穴を切って覗き合ったり、塀を乗り越えて勝手に密会したりするようなことをしたら、親も世間も皆これを軽蔑するだろうというのである。また、『管子』には、「自媒の女は、醜にして信ぜられず」とあり[22]、親の指示、媒酌の言葉を待たずに、男女が勝手に会うのは軽蔑されるべき行為であるということになっている。男女の結婚成立には、親だけではなく、媒介者の存在も重要なのである。こういった価値観は、日本の平安期においても浸透していた。

ここで、平安時代の文学作品に書かれた結婚における媒介者の関与の事例を見てみ

---

20 工藤重矩、前掲注 13 論文。
21 「滕文公下」（全釈漢文大系　第二巻　宇野精一著『孟子』、集英社、一九七三年）
22 「形勢第二」（全釈漢文大系　第四十二巻 遠藤哲夫著『管子上』明治書院、一九八九年）

よう[23]。まず、取り上げたいのは、『蜻蛉日記』に記された求婚の条である。これは『蜻蛉日記』の作者である道綱母に藤原兼家が求婚するという事例となる。

> さて、あへなかりしすきごとどものそれはそれとして、柏木の木高きわたりより、かく言はせむと思ふことありけり。例の人は、案内するたより、もしはなま女などして、言はすることこそあれ、これは、親とおぼしき人に、たはぶれにもまめやかにもほのめかししに、便なきことと言ひつるをも知らず顔に、馬にはひ乗りたる人して、うちたたかす[24]。

兼家が媒介者も立てずに、直接父親に結婚を打診したことについて、道綱母は、「例の人は、案内するたより、もしはなま女などして言はすることこそあれ…」と不満を漏らしている。つまり、通常では、結婚の打診は本人が直接行うわけではなく、媒介者が「案内する」ものなのである。媒介者を立てずに直接父親に打診する兼家に対して道綱母が不満を漏らすのは、兼家がこの結婚をそれほど重視しておらず、女性を大切にしていないと思うからであろう。

結婚に媒介者が必要である事例として、ここでもう一つ取り上げておきたい。これは、『栄花物語』に見える藤原長家と成行女との結婚成立に至る経緯である。

> かくて、殿の三位中将（長家）この頃十五ばかりにおはするに、御かたちなどうつくしう、年来殿の上（倫子）の御子にし奉らせ給ふ。御覚えなども心殊なるを、ただ今いみじき人の御婿の程におはすれば、さやうにきこえ給ふわたり多かるべけれど、えさもあらぬに、侍従の中納言（行成）の御むかひ腹の姫君十二ばかりなるを、またなう思ひかしづき給ひ、生まれた給ひけるより、心殊におぼしわきてありけるを、この中将の君を、さてもあらせ奉らばやと思しなりて、さべき方便りして、殿（道長）の御けしき給はらせ給へば、「雛遊びにやうにて、をかしからん」など宣はせて、にくからぬ御けしきを伝へ聞き給ひて、俄に急ぎたち給ふ[25]

---

23 以下に参照する『蜻蛉日記』と『栄花物語』の事例は、山中裕・鈴木一雄編集（『平安時代の儀礼と歳事』、至文堂、一九九一年）伊藤一男執筆「結婚」の項にも紹介されている。
24 新編日本古典文学全集『蜻蛉日記』（小学館、一九九五年）
25 新編日本古典文学全集『栄花物語』巻第十四「あさみどり」（小学館、一九九五年）

藤原道長と倫子の子（養子）である藤原長家が十五歳程になった。顔だちが可愛らしく、世間の評判も格別である。そのため、彼を婿に欲しいと思う家が多い。藤原行成は、正妻腹の姫君が十二歳になっており、長家を婿として迎えようと考えていた。そこで、しかるべき筋を通じて長家の父である道長に意向を打診する。道長は、「雛遊びのようで、可愛いことであろう」と言って、この結婚を承諾した。行成は、道長のところに「さべき方より便りして」という形で結婚の意志を表した。この「さべき方」というのは媒介者のことにほかならない。前節において、結婚する女性の親や兄弟などの後見人のことを『源氏物語』では「さるべき人」という表現によって示していたことが想起されてもくる。結婚に関与するべき人の存在を、平安期の文学作品は、「さるべき人」や「さべき方」として表現しているのである。

以上に見てきた通り、平安貴族の結婚には媒介者が欠かせない存在となる。結婚においては、当事者の親の許可や裁可といった要因とともに、媒介者の活動も重要視されているのである。親や媒介者という存在が、結婚の正当性を保証するのである。ここで、『源氏物語』に立ち戻り、物語に描かれている女君たちの結婚の成立経緯に親や媒介者がどのように関与しているかを検証してみることにする。

【表２　『源氏物語』における主要な女君の結婚】

番号	巻名　・頁数	男性	女性　・　身分	親	女官	乳母	備考
1	桐壺　・038	桐壺帝	藤壺　・皇女		○		親がいない
2	桐壺　・047	光源氏	葵の上　・臣下の娘	○			
3	末摘花　・286	光源氏	末摘花　・親王の娘		○		親がいない
4	葵　・072	光源氏	紫の上　・親王の娘				親がいない
5	明石　・258	光源氏	明石の君　・受領の娘	○			
6	澪標　・301	冷泉帝	弘徽殿女御・臣下の娘	○			養父光源氏の意志
7	絵合　・369	冷泉帝	秋好斎宮　・前坊の娘	○			
8	真木柱　・350	鬚黒	玉鬘　・臣下の娘			○	後に親に承認される
9	藤裏葉　・437	夕霧	雲居雁　・臣下の娘	○			
10	藤裏葉　・450	東宮	明石姫君　・光源氏の娘	○			
11	若菜上　・061	光源氏	女三の宮　・皇女	○		○	
12	夕霧　・481	夕霧	落葉の宮　・皇女				親がいない
13	竹河　・088	冷泉帝	玉鬘の大君・臣下の娘	○			
14	総角　・269	匂宮	中の君　・親王の娘				親がいない
15	宿木　・401	匂宮	六の君　・臣下の娘	○			
16	宿木　・401	薫	女二の宮　・皇女	○			

ここに掲げた【表２】は、『源氏物語』に描かれた主要な女君の結婚を取り上げたも

のである。これらの諸例を分析する上で重視したのは、その結婚に誰が主導的な関与をしたかである。その関与者の区別を、親・女官・乳母として項目に立てておいた。親が関与する事例は、葵の上・明石の君・弘徽殿女御・秋好中宮・雲居雁・明石姫君・女三の宮・玉鬘の大君・夕霧の六の君・今上帝の女二の宮、の十名となる。女官が関与する事例は、藤壺・末摘花の二例となる。乳母が関与する事例は、玉鬘・女三の宮の二例となる。また、関与者がいない事例としては、落葉の宮・八の宮の中の君の二例を挙げることができる。これらの事例から判明することとして、まずは、親が存命中の女性の結婚は、全て親の承諾を得るか、親の意思によって成立するということである。次に、親が関与しない事例を見てみると、例えば玉鬘は、乳母の手引きによって鬚黒の手に落ちたが、後にこの結婚は、実父の内大臣と養父の光源氏それぞれから承認されることになる。また、八の宮の中の君は、結婚の時点で両親を失っているが、庇護者である薫の関与によって匂宮と結婚している。落葉の宮は、親や庇護者がいないため、また、紫の上は孤児同然の境遇に置かれていたため、それぞれ光源氏と夕霧に略奪されることになる。藤壺と末摘花は、ともに親がいないが、彼女たちの結婚は宮廷に仕えている女官（男性側の存在）の仲介によって成立した。

以上の分析をまとめてみると、親や庇護者がいるのであれば、女性の結婚が親の裁可によるのは普通である。親がいない場合は、媒介者によって結婚が成立したり、男性に奪い取られたりすることになる。そういったなかにあって、女三の宮の場合は、親と乳母の両方の関与が認められ、特殊な事例と判断される。

さて、以上を通覧した上で、本稿では特に、結婚に関与してくる乳母という媒介者の存在について注目してみたいと思う。女三の宮の結婚の話を進める過程において、媒介者の存在に着目する視点は、すでに先行研究において提示されている。但し、それらの先行研究はおおよその傾向として、女三の宮の乳母の兄である左中弁の存在を論じるものとなっている[26]。それに対して、本稿は、乳母の存在に注目することになる。この乳母は、朱雀院に助言したり、兄の左中弁を通じて光源氏に朱雀院の意向を伝え

---

26 今井源衛「女三の宮物語の発端」（『完訳日本の古典　第十九巻　源氏物語（六）』小学館、一九八六年）、藤本勝義「女三宮の乳母と兄・左中弁」（『源氏物語の想像力―史実と虚構―』笠間書院、一九九四年）など。また、乳母に注目する論として、吉海直人「女三の宮の乳母」（『源氏物語の乳母学―乳母のいる風景を読む―』世界思想社、二〇〇八年）があるが、同論は、乳母の活躍を「女三の宮の幸福と自分の利害を重ねる」ための行動という観点から扱っており、媒介者という観点を導入する本稿とは趣向を異にする。

たりするなど、媒介者としての役割を十全に果たしてゆく。この乳母こそは、左中弁とともに女三の宮の結婚における重要な媒介者にほかならないことを提起しておきたい。平安時代では、結婚の正当性が親や媒介者によって保証されることをこれまでに確認してきたが、女三の宮の結婚では、特に媒介者たちの存在が前景化してきており、物語はこの結婚を正当なものとして、すなわち儀礼として描こうとしていると言えよう。そういった儀礼としての結婚の、本来的な意味とは何か。次節では、より広範な視点から儀礼としての結婚と、その結婚儀礼に関与する媒介者の役割について考察を展開する。

４．乳母による神婚の成立

女三の宮の結婚に乳母という媒介者が関与することの意味を考察する端緒として、ここでは、女三の宮の〈皇女〉という血統に注目しておきたい。皇女とは、神聖視される存在であり、その神聖なる身ゆえに結婚禁止の立場に置かれる傾向がある。次に掲げるのは、西郷信綱氏によって報告された海外の王国における皇女の結婚禁止の話である。

> ウガンダをはじめアフリカの旧王国では、皇女とただ人との結婚は禁止されており、皇女は恋人をもってもいいが子供を生んではならぬとされていた。それは王族の聖なる血を汚す行為にあたるからだ。かといって皇子との結婚は近親相姦になりがちなため、皇女には独身者が多くならざるをえない。アフリカだけではない。東南アジアのタイ王国でも王女は普通人と結婚しても子を生むことを禁じられていたという。こうした事例を考えるならば、これがいわゆる神聖王権に固有な構造の一環であるのは確かで、日本古代の宮廷もそれを共有していたと見てほぼ誤るまい[27]。

これによれば、聖なる血を持つ皇女の純粋な血統を維持するため、皇女が皇族以外の普通人との結婚を禁止されているのは多くの王室に見られる現象であるという。古

[27] 西郷信綱『源氏物語を読むために』平凡社、一九八三年

代日本の宮廷も同じ発想を持つようである。『継嗣令』第十三「王娶親王条」には、「凡そ王、親王を娶き、臣、五世の王を娶くこと聴せ。唯し五世の王は、親王を娶くこと得じ」[28]とあり、皇女の通婚対象が皇族に限定されていたことがわかる。この通婚対象の限定について、今井久代氏は、これは日本の皇族の存在を他氏と「区別＝聖別」する意図の表れであると説いている[29]。つまり、皇族の重要な存在たる皇女は天皇と結婚する立場にあり、それゆえ他氏に流出することは許されないというわけである。しかし、やがて藤原氏の勢力が膨大化するようになると、藤原氏の息女たちが続々と入内し、天皇と結婚することになる。その結果、本来は天皇を結婚対象としていた皇女（内親王）たちが天皇と結婚できなくなり、尊貴の身を保つために独身を守り通すことが多くなったという経緯が指摘されてもいる[30]。また、皇女は天皇だけではなく、「斎宮や斎院として、神々と結婚」することもある。その結婚はしかし、「聖婚」というべきものであり[31]、実質上、斎宮や斎院に卜定された皇女は独身として過ごすことになる。

要するに、皇女は臣下に降嫁できず、天皇としか結婚できないというわけである。あるいは、天皇と結婚しない場合でも、斎宮や斎院に選ばれ、いわば巫女として神と結婚する存在となり、独身を守り通すことになる。このように皇女は神聖な身であり、結婚もその神聖性を壊すものであってはならないことが価値観として共有されていたのである。では、神聖な身である皇女、斎宮、斎院たちは、『源氏物語』において、どのような婚姻状況にあるのか。その状況を一覧表にしてみた（【表３】を参照）。

---

28 「継嗣令第十三」（日本思想大系『律令』岩波書店、一九七六年）
29 今井久代「皇女の結婚―女三宮降嫁の呼びさますもの―」（『源氏物語構造論』風間書房、二〇〇一年）
30 若菜上④二九頁・頭注二八。
31 梅山秀幸「上代の結婚について」（『創造の世界』46、一九八三年）

【表３　『源氏物語』における皇女・斎宮・斎院の結婚】

番号	人物	身分	結婚状況	結婚相手
1	大宮	桐壺帝の妹	結婚	左大臣
2	藤壺中宮	先帝の娘	結婚	桐壺帝
3	秋好中宮	前坊の娘・斎宮	結婚	冷泉帝
4	朝顔の姫君	斎院	独身	―
5	女五の宮	桐壺帝の妹	独身	―
6	女三の宮	朱雀院の娘	結婚	光源氏
7	落葉の宮	朱雀院の娘	結婚	柏木･夕霧

【表３】によれば、物語に登場する八人の皇女、斎宮、斎院のうち、結婚するのは六人、独身のまま人生を送るのは二人である。非婚の二人のうち、朝顔の姫君は、桐壺帝の弟である桃園の宮を父としており、皇女ではなく二世女王となる。朱雀王朝では、賀茂の斎院に卜定された。彼女は光源氏の長年にわたる求愛を拒み、叔母である女五の宮とともに桃園の宮邸で独身として生涯を終える。ちなみに、この女五の宮は、桐壺帝の妹であり、やはり生涯独身で過ごした。この二人は、共に独身を守り通したことによって、神聖で尊貴な身を保つことに成功したと言える。

こういった独身皇女たちに対し、結婚する六人の皇女たちはどのような状況に置かれているか。六人のうち、天皇と結婚するのは藤壺中宮と秋好中宮である。藤壺中宮は先帝の皇女である。桐壺帝の後宮に入内した。秋好中宮は前坊(桐壺王朝の皇太子)の姫宮であり、桐壺帝によって皇女同然に扱われていた（葵巻)。ちなみにこの秋好中宮は、朱雀王朝では伊勢の斎宮に卜定され、母の六条御息所と共に伊勢の地へ赴くという経験をしてもいる。朱雀帝の退位によって京へ帰還した後は、光源氏の後見によって冷泉帝の後宮へ入内し、女御を経て中宮になった。このように藤壺中宮と秋好中宮は、天皇と結婚することによって神聖性を保ち得た。残りの四人の皇女はいずれも降嫁となる。桐壺帝の妹である大宮は、左大臣と結婚した。この左大臣は、物語においては藤原氏として設定されており、したがって臣下との結婚（降嫁）となる。同じ

く藤原氏と結婚したのが落葉の宮である。彼女は、女三の宮とともに朱雀院の皇女となる。落葉の宮の結婚した相手は柏木（左大臣の孫にあたる）であったが、やがて柏木は死去し、未亡人となった後に夕霧と再婚した。今上帝の女二の宮の結婚もまた、降嫁となる。結婚相手は、光源氏の子息で、夕霧の弟である薫。しかし、薫の実父は柏木であり、この本当の血筋で判断すれば、やはり藤原氏への降嫁ということになる。以上が女三の宮を除く皇女たちの婚姻状況となる。概観したところの傾向としては、非婚もしくは天皇との結婚によって神聖性を保つ皇女が多く見られた。但し、藤原氏という臣下への降嫁の例も見られた。このような降嫁の場合は、皇女としての神聖性が保てなかった事例として判断してもよかろう。そう考えてみた時、光源氏と結婚する女三の宮の場合が問題となってくる。結婚時における光源氏の身分が准太上天皇であるという点に留意すれば、天皇に準じる結婚、すなわち入内ということになるが、しかし物語の語る文脈では、臣下への降嫁という印象が強められている。では、女三の宮と光源氏の結婚は女三の宮の皇女としての神聖性を保ち得るのか。それを回答する前に、まずは、物語が皇女の結婚に対して抱いている価値観を見てみることにする。実は、皇女は独身を通して人生を送るべきだという価値観を、物語は繰り返し語っているのである。以下に掲げるのは物語に見られる〈皇女非婚〉を語る条である。

i（乳母）「上なむ、しかじか御気色ありて聞こえたまひしを、かの院に、をりあらば漏らしきこえさせたまへ。皇女たちは、独りおはしますこそは例のことなれど、さまざまにつけて心寄せたてまつり、何ごとにつけても御後見したまふ人あるは頼もしげなり…」

（若菜上④二九頁）

j（朱雀院）「しか思ひたどるによりなむ。皇女たちの世づきたるありさまは、うたてあはあはしきやうにもあり、また高き際といへど、女は男に見ゆるにつけてこそ、悔しげなることも、めざましき思ひもおのづからうちまじるわざなめれと、かつは心苦しく思ひ乱るるを、…

（若菜上④三二頁）

ｋ（御息所）「皇女たちは、おぼろけのことならで、あしくもよくも、かやうに世づきたまふことは、心にくからぬことなりと…」。

（柏木④三三〇～一頁）

ｉは、前掲したｂの本文の一部である。乳母は、皇女であれば独身を通すべきであるが、女三の宮の将来に配慮し、適切な人と結婚しなければならないと言っている。ｊは、女三の宮の婿選びにあたって、朱雀院が高貴な身分を持つ皇女が世間並の男と結婚すれば、必ず悔しいことや腹立たしいことなどが起こると主張している条である。ｋは、落葉の宮の母御息所が、よほどのことでなければ、皇女にとって臣下との結婚は身分に相応しくないと言っている場面である。

ｉ～ｋにおける人物たちの発言は、いずれも〈皇女非婚〉という価値観に基づくものである。たとえ結婚するとしても、神聖化された皇女は、神の形代である天皇との結婚しか認められない。そのような結婚でなければ、独身のまま人生を送るべきであるというのである。だが、そのような価値観に反して物語は、大宮、女三の宮、落葉の宮、女二の宮といった皇女たちが降嫁していく様相をも語ってゆく。なぜか。実は、歴史を顧みれば、横並びの皇族集団内で自らの子孫に独占的に皇統を伝えていくために、藤原摂関家との婚姻関係を結んでいく天皇の在り方が指摘されており[32]、もはや〈皇女非婚〉という価値観のみでは対応できなくなっていたという現実が横たわっていたのである。物語は、そういった現実をも見据え、〈皇女の結婚〉という選択肢がいかにして可能であるかという問題を、女三の宮という人物を描いてゆく過程で織り込んできたのではあるまいか。〈皇女非婚〉という選択肢が失われた状況において、つまり、〈皇女の結婚〉という選択肢しか残されていない状況において、いかに皇女の神聖性は維持され得るのか。物語はこの問題に対する回答として、儀礼に則った結婚という形式の中で皇女の神聖性を補完していく方法を用意してきたと、本稿では考えておきたい。そして、その神聖性を補完する方法として選ばれたのが、媒介者によって主導される結婚であったのである。女三の宮が皇女であるがゆえに持つ神聖性を、降嫁によっても損なうことなく、むしろ結婚という儀礼において神聖性を付加していこうとするかのように、物語はそこに媒介者の存在を描いてゆく。その媒介者とは、具体的

[32] 今井久代、前掲注４論文。

には乳母のことを指す。乳母という女性が結婚に媒介者として関与してくることの意味とは何か。以下に、媒介者の淵源を探りながらその意味を論じてみたい。

媒介者という存在はどこから生じたものであるのか。『風俗通義』「逸文」には次のようにある。

> 女媧禱祠神祈而為女媒,因置昏姻,行媒始行明矣。夫昏以昏時,而昏繇此；因以因姬,而因乎人。姻者,姻之始,媒者,姻之聚,所謂昏因姻媒如此。（路史後紀二）[33]

「女媧」は、中国において人類の祖として崇拝されている女神である。ここに引用した『風俗通義』によれば、女媧は祠神に祈ることによって、女媒になり、婚姻を発生させるとある。女媧は結婚の媒介者の祖でもあることがわかる。ここで、結婚における女性の媒介者の淵源を、この「女媧」に求めておきたい。この、媒介者を務める女性の存在は、時代の経過に伴って神格化される傾向が見られる。ここで、『礼記』の「月令」を見てみたい。そこには天子が媒神を祭る場面が記されている。

> 是の月や、玄鳥至る。至るの日、大牢を以て高禖を祠る。天子親ら行き、后妃九嬪を帥て御る。乃ち天子の御する所を禮し、帯びしむるに弓とくを以てし、授くるに弓矢を以てし、高禖の前に于てす[34]。

『礼記』の「月令」におけるこの一節は、天子が親しく高禖を祭り、妃嬪の随行することについて書かれたものである。これによると、燕（婚姻の象徴とされる鳥）が訪れてきた月には、牛・羊・豚の三種の供儀によって高禖の神を祀り、天子はみずからその場所へ行き、后妃は九嬪を率いて供をする。そして、天子の寵愛によって懐妊している女子を高禖の前で祝福し、これに弓袋を帯びさせ、弓矢を授けて男児の出産を祈るという。ここでいう「高禖の神」とは、結婚の媒神のことである。『礼記』の文脈によれば、高禖の神は結婚の媒神という役割だけではなく、出産を保証する神としても祀られていることがわかる。ここで留意すべきは、「高禖」という名称とその表記

---

33 『風俗通義校注』（王利器校注『風俗通義校注』中華書局出版、一九八一年）の「佚文」から引用。但し、この引用文を文献として最後収録するのは『路史後紀二』である。
34 「月令」（全釈漢文大系　第十二巻　市原亨吉他著『礼記上』集英社、一九七六年）

である。「禖」の表記は「媒」に通じており、女性の職掌に関わるものであることを意味する。荆雲波によれば、これは、媒介者を務めている女性の神性を表すために、「媒」の字が神性の意味を持つ「示」偏の「禖」に代替されることになったという。また、中国古代の考えでは、媒神とは、天と地を繋ぐ神であり、それゆえに、天と地の間で起きている全ての出来事を承知する神でもある。このような宗教的世界観により、天地の神婚に擬される人間の婚姻もまた、媒神に掌握されているはずだと考えられていたらしい[35]。

このような媒介者の淵源にまつわる神話的エピソードを踏まえたとき、『源氏物語』において女三の宮の結婚に乳母という女性が介在していることの意味もまた、異なった角度から解釈される可能性が拓かれてこよう。すなわち、女三の宮の降嫁を、聖婚の本来的な構造に則って、女性の媒神が取り持つ結婚として進行し、成立させようとしているのではないかという解釈の可能性である。女三の宮の結婚に乳母という女性が媒介者として登場してくることの意味を、このように見出しておきたい。

結論

平安時代に成立した文学作品や律令によれば、当時の貴族社会における正当性を持つ結婚には、親の裁可と媒介者の介在が重要視されている。女三の宮の結婚に際して、父朱雀院が自ら「婿選び」を主導することになる。また、その結婚には、乳母という女性の関与が設定される。この乳母の活躍は媒介者の行動にあたるものであると考えられる。それゆえ、親（＝朱雀院）と媒介者（＝乳母）の関与によって、女三の宮における結婚の正当性が保証されることに至る。

しかし、〈皇女〉という血統に注目してみると、女三の宮の結婚に乳母という媒介者が関与することの意味はより広範な視点から把握できる。皇女は神聖な身であり、結婚もその神聖性を壊すものであってはならない。そのような場合、皇女たちは神の象徴である天皇と結婚したり、〈皇女非婚〉という価値観に従ったりするほかならない。それゆえ、降嫁を選択する女三の宮の神聖性を維持するためには、物語は儀礼に則っ

35 荆雲波「士昏礼における神話思惟」（『文化記憶と儀式叙事』、南方日報出版社、二〇一〇年 ）

た結婚という形の中で方法を用意してきた。それは乳母という媒介者の設定である。媒介者の淵源を探り出せば、媒介者はそもそも女性が担当するものであり、しかも、媒神と呼ばれて、天地神婚のような結婚を保証する力を持っている。物語において、女三の宮の結婚には乳母という女性の媒介者が介在することの意味はまた、媒神の角度から解釈できると考えられる。すなわち、物語は、女三の宮の降嫁を神婚の構造に則って、女性の媒神が取り持つ結婚として成立させることによって、女三の宮の〈皇女〉としての神聖の身を保ち得ることにするのである。

第四章

『源氏物語』における光源氏の祝賀儀礼

―儀礼の場による権力の移譲―

１．問題提起

孔子の言葉によれば、人は「四十にして惑わず」、すなわち、人は四十歳から中年期に入り、人生に迷わなくなるという。言い換えれば、四十歳を境目として、人は歩んできた人生を反省したうえで、今後の人生をどのように送っていくのかを知り始める。しかし、平安時代において、四十歳は人が老年期に入ることを意味し、その年に算賀という長寿を祝う行事が行われ、それ以後十年ごとに催されることになる[1]。

本稿で取り上げたいのは光源氏の四十賀である。光源氏の四十賀は若菜上巻で、息子・妻・養女たちによりそれぞれ盛大に挙行された。具体的な状況は【表１】に示した通りである。

【表１　光源氏における四十賀】

番号	巻名　・頁数	主催者	光源氏との続柄	場所	時期
1	若菜上・55～61	玉鬘	養女	六条院	正月子の日
2	若菜上・92～97	紫の上	妻	二条院	十月
3	若菜上・97～98	秋好中宮	養女	六条院	十二月
4	若菜上・98～102	夕霧	長子	六条院	十二月か

本稿で注目したいのは、【表 1】のうちの玉鬘が主催した賀宴である。この賀宴は、新年正月に催され、この年に開かれる四つの賀宴のうち、最初のものとなる。以下に掲げるのは、その賀宴の様子である。

a．さるは、今年ぞ四十になりたまひければ、御賀のこと、おほやけにも聞こしめし過ぐさず、世の中の営みにて、かねてより響くを、事のわづらひ多くいかめしきことは、昔より好みたまはぬ御心にて、みな返さひ申したまふ。正月二十三日、

[1] 中村義雄、「老年期」(『王朝の風俗と文学』塙書房、一九六二年)、山中裕・鈴木一雄編集『平安時代の儀礼と歳事』(至文堂、一九九一年)、小町谷照彦執筆「算賀」の章。

子の日なるに、左大将殿の北の方、若菜まゐりたまふ。かねて気色も漏らしたまはで、いといたく忍びて思しまうけたりければ、にはかにて、え諫め返しきこえたまはず。忍びたれど、さばかりの御勢ひなれば、渡りたまふ儀式など、いと響きことなり。

（新編日本古典文学全集・若菜上④五十四～五頁）[2]

b. 式部卿宮は参りにくく思しけれど、御消息ありけるに、かく親しき御仲らひにて、心あるやうならむも便なくて、日たけてぞ渡りたまへる。大将の、したり顔にて、かかる御仲らひに、うけばりてものしたまふも、げに心やましげなるわざなめれど、御孫の君たちは、いづ方につけても、おり立ちて雑役したまふ。籠物四十枝、折櫃物四十、中納言をはじめたてまつりて、さるべきかぎり、とりつづきたまへり。御土器くだり、若菜の御羹まゐる。御前には、沈の懸盤四つ、御坯どもなつかしくいまめきたるほどにせられたり。

（若菜上④五十八頁）

aは、正月の子の日に、玉鬘が六条院へ赴き、光源氏と対面する場面である。四十歳を迎えた光源氏であったが、大げさな儀式は面倒だとのことで、皆からの祝福を遠慮していた。しかし、正月二十三日に、鬚黒大将の北の方である玉鬘は六条院を訪問し、若菜を光源氏に献上する。玉鬘は忍んで行動したのであったが、太政大臣（＝内大臣）の実子（娘）であるという血統に加え、左大将の正妻であるという立場もあって、その訪問の儀式などは実にたいそうな騒ぎとなった。

bは、その賀宴に参加した人々の様子を描く条である。式部卿宮は、娘が鬚黒に離縁されたため、玉鬘の主催する賀宴に出席したくなかったが、紫の上の父親という立場上、光源氏の祝賀行事には出席しなければ具合が悪いと思い、日が高くなってから六条院に姿を現した。夕霧は、籠物、折櫃物などの献上品を用意している。ここで、特に注目しておきたいのは鬚黒大将の存在である。鬚黒大将は光源氏の婿として宴会に出席し、得意そうな顔をしていろいろと差配している。鬚黒大将のそのような得意

[2] 本文の引用は新編日本古典文学全集『源氏物語』①～⑥（小学館、一九九四～八年）により、巻名・冊数・頁数を記した。傍線等は引用者による。以下同様。

そうな態度について、物語は「うけばる」という語を用いて表わしてゆく。

四度にわたって催される光源氏の四十賀について、研究史の上では、主に賀宴における音楽の演奏が注目され、そこに潜んでいる光源氏の王権との関わりが考察されてきた[3]。あるいはまた、歴史に準拠して光源氏の賀宴を考察する論もある[4]。こういった緒論に対して、本稿は、玉鬘が主催する光源氏の四十の賀宴に登場してくる鬚黒大将の「うけばる」姿に注目することになる。果たして、光源氏の四十賀が最初に養女の玉鬘によって主催され、その賀宴において鬚黒大将の「うけばる」姿が描かれてくることの意味とは何か。従来は看過されてきた鬚黒大将という人物に視点を据えることで、光源氏の賀宴という儀礼的空間を新たな角度から読み解いてみたい。

2.「うけばる」と身分の関連性

前節で指摘したように、玉鬘によって主催される光源氏の四十賀における鬚黒大将の様子について、物語は「うけばる」という語を用いて描き出している。「うけばる」という表現の語義について確認しておくと、『角川古語辞典』によれば、「遠慮なく行う。また、得意になってする。でしゃばる」とある[5]。また、『源氏物語大辞典』には、「遠慮せずに振る舞う」とあり[6]、『日本国語大辞典』には、「万事心得顔に一手に引き受ける。遠慮をせずふるまう。公然とふるまう」、「得意になって、出しゃばる」とある[7]。これらの辞書的な解釈をまとめてみると、「うけばる」は遠慮なく行動する人の様子を表す言葉であることがわかる。ちなみに、物語において「うけばる」は 15 例あり、そのうち、身分と関わって用いられているのは 6 例である。本稿はその 6 例を考察し

---

3 鈴木日出男「天地・鬼神を動かす力」(『源氏物語虚構論』東京大学出版社、二〇〇三年)、小嶋菜温子「六条院と音楽―喩としての音楽」(『源氏物語批評』有精堂出版、一九九五年)、小嶋菜温子「光源氏の〈家〉と〈血〉の閉塞―横笛・鈴虫巻の月と音楽」(『源氏物語の性と生誕―王朝文学史論』立教大学出版社、二〇〇四年)、竹田誠子「若菜下巻女楽における“場”の設定と主題性」(王朝物語研究会編『研究講座　源氏物語の視界 4―六条院の内と外―』新典社、一九九七年)。

4 金孝珍「准太上天皇光源氏の四十賀―上皇・天皇の算賀儀礼内容を通して―」(日向一雅編『源氏物語の礎』青簡社、二〇一二年)、浅尾広良「光源氏の算賀―四十賀の典礼と准拠―」(『源氏研究』第七号、翰林書房、二〇〇二年)

5 中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編『角川古語大辞典』第二巻（角川書店、一九八四年)、「うけばる」の項。

6 秋山虔、室伏信助編『源氏物語大辞典』(角川学芸出版、二〇一一年)、「うけばる」の項。

7 『日本国語大辞典（第二版)』第四巻（小学館、二〇〇一年)、「うけばる」の項。

つつ、そこから鬚黒大将を形容する「うけばる」の意味を見出すことにする。まず、後宮で暮らしている女性たちにおける「うけばる」の用例を見ていきたい。

①藤壺と聞こゆ。げに御容貌ありさまあやしきまでぞおぼえたまへる。これは、人の御　際まさりて、思ひなしめでたく、人もえおとしめきこえたまはねば、うけばりてあかぬことなし。かれは、人のゆるしきこえざりしに、御心ざしあやにくなりしぞかし。思しまぎるとはなけれど、おのづから御心うつろひて、こよなう思し慰むやうなるも、あはれなるわざなりけり。

（桐壺①四十二～三頁）

②心の中には、わが身は、げにうけばりていみじかるべき際にはあらざりけるを、対の上の御もてなしに磨かれて、人の思へるさまなどもかたほにはあらぬなりけり、身をばまたなきものに思ひてこそ、宮仕のほどにも、かたへの人々をば思ひ消ち、こよなき心おごりをばしつれ、世人は、下に言ひ出づるやうもありつらむかし、など思し知りはてぬ。

（若菜上④一〇五頁）

①は、光源氏の母桐壺更衣が亡くなった後に入内する藤壺を語る条である。藤壺は先帝の四の宮であり、桐壺更衣の容貌に酷似していたため、桐壺帝に望まれて入内した。桐壺更衣は後見がなく、他の女御・更衣たちに苛められて病気がちになり、死んでしまったが、その彼女とは違い、藤壺は皇女の身分であるため、桐壺帝にどれほど寵愛されても桐壺更衣のように弘徽殿女御らに気がねする必要はない。

②は、明石姫君が自分の本当の出自を知らされた時の心中思惟を描く条である。これによれば、明石姫君は、自分がそもそも高い地位にいられるような身分ではありえなかったのに、紫の上の養育によって世間から尊敬される身になったという自覚を持ったことがわかる。また、明石姫君は、これまでの自分を振り返り、ほかに並ぶ者の無く、尊貴な存在と思い込み、後宮では周囲の人々を見下していて、傲慢にしていたことを反省している。

①と②は、いずれも後宮に身を置く女性の生きざまを語る条である。その生きざまについて、物語は「うけばる」という語によって語っている。①は皇女としての藤壺。

②は光源氏を父に、紫の上を養母に持つ明石姫君。彼女たちが後宮において憚ることなく行動できるのは、やはり身分が尊いからにほかならない。つまり、後宮における「うけばる」は、女性の出自と密接にかかわっていることがわかる。

次に掲げるのは政界で活躍している光源氏に関する「うけばる」の用例である。

③六条院も、すこし御心地よろしくと聞きたてまつらせたまひて、参りたまふ。御賜りの御封などこそ、みな同じごと遜位の帝と等しく定まりたまへれど、まことの太上天皇の儀式にはうけばりたまはず、世のもてなし思ひきこえたるさまなどは、心ことなれど、ことさらにそぎたまひて、例の、ことごとしからぬ御車に奉りて、御達部などさるべきかぎり、車にてぞ仕うまつりたまへる。

（若菜上④四五頁）

これは、病気がちとなっている朱雀院をお見舞いする光源氏の、その行列の様子を描く場面である。冷泉帝は自分の父親が光源氏であることを知った後、光源氏を臣下として扱ってはいけないと思い、太上天皇という待遇を賜る。しかし、光源氏は本当の太上天皇の格式のように威儀を張らず、簡素な外出ぶりをしている。その光源氏の外出ぶりを、物語は「うけばりたまはず」と、「うけばる」という語を否定するかたちで表わしてゆく。光源氏のような政界において至上の地位にある者であれば、「うけばる」という姿勢を本来なら見せるところなのに、そういった姿勢を見せず、謙虚な姿勢を見せている光源氏の様子を、物語は美徳として語っているのである。このような、いわば政界の権力者の姿勢に関わって「うけばる」が用いられる例は、他にもある。次に掲げるのは、権勢家の婿になる男性たちに対して用いられた「うけばる」の例である。

④紙燭さして歌ども奉る。文台のもとに寄りつつ置くほどの気色は、おのおのしたり顔なりけれど、例の、いかにあやしげに古めきたりけんと思ひやれば、あながちにみなも尋ね書かず。上の町も、上臈とて、御口つきどもは、ことなること見えざめれど、しるしばかりとて、一つ二つぞ問ひ聞きたりし。これは、大将の君の、下りて御かざし折りてまゐりたまへりけるとか。

すべらきのかざしに折ると藤の花およばぬ枝に袖かけてけり

うけばりたるぞ、憎きや。（宿木⑤四八四頁）

⑤（少将）「かやうのあたりに行き通はむ、人のをさをさゆるさぬことなれど、今様のことにて咎あるまじう、もてあがめて後見だつに罪隠してなむあるたぐひもあめるを、同じことと内々には思ふとも、よそのおぼえなむ、へつらひて人言ひなすべき。源少納言、讃岐守などのうけばりたる気色にて出で入らむに、守にもをさをさ承けられぬさまにてまじらはんなむ、いと人げなかるべき」とのたまふ。

（東屋⑥二四頁）

④は、今上帝が藤の宴を催す場面である。この宴は、今上帝の女二の宮が薫に降嫁することとなり、三条宮へと転居することになったため、その送別会として催された。宴会に参加する公卿たちが歌を詠んだが、格別といえるものはない。そういった儀礼的な歌のうち、物語は薫の詠んだ歌を形式的に記録したとある。それは薫が庭上に下りて帝の御挿頭に藤の花を折って差し上げた時の歌である。歌の内容は「主上の御挿頭にさしあげようと思って、藤の花のとても手の届かぬ高い枝に袖をかけたのでございました。主上の御意にかなうようにと、及びもつかぬ高貴な姫宮をいただきました」（全集訳・四八五頁）というものである。語り手はこの歌には薫の誰はばかるところのない態度が内包されると評している。そして、そういった薫の態度を、物語は「うけばる」という語によって表わしていくのである。

⑤は、浮舟が常陸介の実子ではないという事実を知った左近少将の発言である。これによると、左近少将は当初、常陸介の経済的な援助を得られると思い、浮舟に求婚したが、その後、浮舟が常陸介の実子ではないことを知り、浮舟との結婚は自分にとってメリットがないと考え始めていた。そして、もし、浮舟と結婚した場合、常陸介の実子と結婚した源少納言や讃岐守たちが「うけばる」顔で常陸介邸を出入りするのに対し、自分は肩身の狭い思いをすることになるだろうとある。

④と⑤は、いずれも権勢家の婿になる男性の「うけばる」という態度を語る条である。薫は女二の宮の婿として今上帝の恩寵を受け、藤の宴において、公卿たちの前で「うけばる」態度を示している。常陸介の実子と結婚し、常陸介の婿となった源少納言や讃岐守は、婿扱いされない者と比べて「うけばる」態度を取るだろうと予想され

ている。つまり、薫や源少納言、讃岐守たちは、権力や財力を持つ人物の婿になることによって、「うけばる」資格を持つようになると考えられる。

以上が、この物語において、身分とかかわっている「うけばる」の用例である。そのうち、藤壺と明石姫君の用例は、家柄がよく、後宮において「うけばる」資格を持つというものとなる。また、光源氏の用例は、政治の世界で栄華を極めたことで、彼こそが「うけばる」資格を持つべき人物であるというものとなる。薫や源少納言、讃岐守たちの用例は、自分より権勢を持つ者の娘と結婚することによって、政界における地位や財力が上昇し、「うけばる」資格を持つというものとなる。そして、こういった「うけばる」という語と共に語られる人物たちの系列に、鬚黒大将も加わるということになる。鬚黒大将は、玉鬘が主催する光源氏の四十賀において、「うけばりてものしたまふ」（若菜上④五八頁）と描かれていた。新編日本古典文学全集の頭注が指摘するように、ここは、「源氏と鬚黒は舅と婿の関係」[8]であることが前提となっており、そういった前提のもとにこの用例を解釈すれば、鬚黒大将が婿として光源氏の四十賀に出席できることをもって、物語は「うけばる」と語っているということになろうか。物語における人物たちの「うけばる」は、いずれも地位や財力の上昇を伴って表出されるものであった。鬚黒大将もまた、光源氏の婿となることで、地位や財産が上昇し、そのことをもって物語は「うけばる」と表現してきているということになるのであろうか。但し、ここで留意すべきは、鬚黒大将の妻となった玉鬘は光源氏の実子ではなく、養女にすぎないという点である。この点を踏まえた場合、鬚黒大将は、光源氏の純然たる婿とは言えなくなる。そう考えた場合、“婿として賀宴に出席することで、地位や財産の上昇がもたらされる”という解釈では、まだ不十分な所があるとも言えよう。そもそも、光源氏の四十賀の現在時において、鬚黒大将の政界における地位や財力とはいかなるものであったのか。次節では、鬚黒大将の置かれた政治状況をめぐって考察を展開していきたい。

３．鬚黒大将における「うけばる」の素質

冷泉帝が退位し、今上帝が即位するにともない、鬚黒は新帝の後見として、位が上

8 若菜上④五七頁・頭注八

げられることになる。次に掲げるのは、鬚黒が昇進される条である。

左大将、右大臣になりたまひてぞ、世の中の政仕うまつりたまひける。女御の君は、かかる御世をも待ちつけたまはで亡せたまひにければ、限りある御位を得たまへれど、物の背後の心地してかひなかりけり、六条の女御の御腹の一の宮、坊にゐたまひぬ。

（若菜下④一六五頁）

これは、冷泉帝の譲位後、政界における人事異動に関して、鬚黒大将に言及される条である。鬚黒は左大将から右大臣に昇進し、「世の中の政仕うまつりたまひける」立場になる。これについて、新編日本古典文学全集の頭注は、鬚黒が「新帝の唯一の外戚として昇進、政の補佐役になる。世の重鎮となるべき『下形』がいよいよ実現する」と述べている[9]。実は、鬚黒が政界の実力者となる「下形」という素質は、既に物語によって暗示されていた。以下に【表２】として掲げるのは、物語における「下形」の用例調査の結果である[10]。

【表 2　『源氏物語』における「下形」の用例】

番号	巻名　・頁数	対象	意味
1	藤袴　・342	鬚黒大将	政界の候補者
2	梅枝　・415	調度品の雛型	
3	若菜下・160	鬚黒大将	次世代の権勢家
4	鈴虫　・376	法会の予備知識	

【表 2】に示したように、『源氏物語』において、「下形」の用例はわずか四例である。「下形」の辞書的な意味を確認してみると、「①手本、基準となる一定の形。②本来の

9 若菜下④一六四頁・頭注一四
10 斎藤紗代「『源氏物語』鬚黒についての一考察」（『成蹊国文』第三十五号、成蹊大学文学部）は、「下形」についても考察を行っている。

性質、素質、候補者。③物事を行なう基礎、予備的な心得」[11]とある。これを踏まえると、表中の用例２は①の意味にあたり、用例４は③の意味にあたる。用例１と用例３は、いずれも鬚黒大将に関する用例であり、②の意味にあたる。つまり、物語において「下形」が人物に関わって用いられる場合、それらはすべて、鬚黒大将の権勢家としての素質をかたどる表現となっているのである。以下に、鬚黒大将に関わる「下形」について、実際に物語の本文を参照し、その具体的な状況について確認してみよう。

大将（＝鬚黒大将）は、この中将（＝柏木）は同じ右の次将なれば、常に呼びとりつつ、ねむごろに語らひ、大臣（＝内大臣）にも申させたまひけり。人柄もいとよく、朝廷の御後見となるべかめる下形なるを、などかはあらむと（内大臣は）思しながら、かの大臣（＝光源氏）のかくしたまへることを、いかがは聞こえ返すべからん、さるやうあることにこそと心得たまへる筋さへあれば、任せきこえたまへり。

（藤袴③三四二頁）

これは、用例１の「下形」である。玉鬘に熱心に求婚し続けている鬚黒大将について、玉鬘の実父である内大臣がどのような所感を抱いているかが語られている。内大臣は、鬚黒の人柄が実に立派であり、また次代の権勢を担う第一の実力者であるため、婿とするのに不足はないと判断している。この“次代の権勢を担う候補者”の意を表わす語として用いられているのが、「下形」という表現となる。

親王の御おぼえいとやむごとなく、内裏にも、この宮の御心寄せいとこよなくて、このことと奏したまふことをばえ背きたまはず、心苦しきものに思ひきこえたまへり。おほかたも、いまめかしくおはする宮にて、この院、大殿にさしつぎたてまつりては、人も参り仕うまつり、世人も重く思ひきこえけり。大将も、さる世の重しとなりたまふべき下形なれば、姫君の御おぼえ、などてかは軽くはあらむ。

（若菜下④一五九～一六〇頁）

11 『日本国語大辞典（第二版）』第四巻（小学館、二〇〇一年）、「下形」の項。

これは、用例３の「下形」である。鬚黒大将が先妻との間に儲けた真木柱の婚姻について触れる条で、真木柱の母方の祖父である式部卿宮と、真木柱の父である鬚黒大将の、それぞれの権勢が評されている。式部卿宮は、光源氏や太政大臣（もとの内大臣で玉鬘の父）に次ぐ権門であり、声望が高く、帝のおぼえもよく、重視されているとある。加えて鬚黒大将も、やがては国家の重鎮になるはずの人物であるとして、その両方の血筋をひく真木柱の評判はとても高いというのである。このような真木柱の血統の優位性を語る文脈において、その父である鬚黒大将の存在が「下形」として表現されてくるのである。

以上のように、鬚黒大将は、藤袴巻において既に「下形」と形容され、政界での出世が予見されていた。更に、若菜下巻に至っては、彼の「下形」としての素質が再び言及され、次代の権勢家になり得る人物像が固められることになる。

ここで、再び玉鬘が主催する光源氏の四十賀の場面を想起してみよう。その場における鬚黒について、物語は「したり顔にて、かかる御仲らひに、うけばりてものしたまふも、げに心やましげなるわざなめれど、御孫の君たちは、いづ方につけても、おり立ちて雑役したまふ」（若菜上④五八頁）と記していた。鬚黒が「うけばりてものしたまふ」と描写されていることについて、第２節では、地位や財産を持つ人に用いられる語である可能性について触れた。鬚黒もまた、この若菜上巻の時点でこの語によって描き出されているということは、彼が政治的地位や財力を持つ人物になったことを意味すると一応は考えられる。しかし、ではなぜその鬚黒大将の存在が強調されてくるのが光源氏の四十賀という儀礼の場であるのか。光源氏の四十賀は、玉鬘・紫の上・秋好中宮・夕霧の順によって催されるものであった。血縁の遠近や地位の高低という観点からは、玉鬘が最初に賀宴を催すべき理由を説明することはできない。この問題は、玉鬘の存在に主眼を置くのではなく、別の観点を導入するべきところなのではないか。すなわち、光源氏の四十賀が最初に玉鬘によって主催されるのは、彼女の夫であり、賀宴の実質的な差配者である鬚黒大将を、儀礼という公的な場に引き出すための役割を果たしているのではないかという観点である。果たして、物語が光源氏の四十賀という儀礼の場を利用して、鬚黒を表舞台に引き出してくることの意味とは何か。この問題を考えるにあたり、儀礼の場を利用して、権力の移譲や政権の交代を実現するという文化人類学や民俗学の事例報告を参照しておきたい。

４．儀式による「転倒儀礼」の上演

権力の継承は、後継者が前任者を殺害するというかたちによって成立することがある[12]。これは権力の継承の原型と言えるかもしれない。しかし、暴力を用いず、平和的に権力の継承が行われる場合も当然ある。その場合に利用されるものの一つとして、儀礼の場が挙げられる。儀礼という特殊な時空が用意されることで、権力を欲する者は、暴力に頼ることなく、その欲求を公的なかたちで表明することが可能となる。本節では、そういった儀礼と権力の関係について、諸文化に見られる事例を参照した上で考察したいと思う。

【事例 1】:

新王の即位を祝す国家祭儀は、ニカングの肖像を中心に行なわれる。シルック領土の北部にあるアクルワにニカングの祭祀所があるが、そこに掲げられてある肖像が祭祀たちによって運ばれる。この肖像は北部の軍隊に護られるシルック王国の北部をまず制覇するためにまわったあと南部をまわるが、新王を支える南部の軍隊と首都を確保するために闘う。これらはすべて儀礼用の模擬戦であるが、あくまでも新王が全国を制覇して王となるための儀礼的演劇である。こうして各地区をニカングの肖像を掲げた一隊が通過してゆくと、各地区の人々はニカングへの尊崇の念を表すために集まって次の地区まで行列を組んでついてゆき見送る。肖像にはニカングの霊がいると信じられているからである。[13]

【事例 2】:

オゴンが死んで二年たつと、彼の名誉のために、イムゴーノ、「死を立ち去らせること」という名の儀礼がおこなわれる。これは他の喪の明けの儀礼とちがってレベの畑でおこなわれ、主役となるのも仮面の男ではなく、装身具を一杯身につけ、晴れ着で着飾った女たちである。しかも彼女たちは、草や木で仮面の模像をこし

---

[12] Ａ・ファン･ヘネップ『通過儀礼』(岩波文庫、二〇一二年)、例えば、昔のエジプトにおいても、年を取っている酋長は力が弱くなったため、よく力強い若者に殺され、酋長の座から追い落されることになる。(王貴民著 『中国礼俗史』文津出版社 民国八十二年)
[13] 青木保『儀礼の象徴性』岩波書店、一九八四年

らえて、仮面のダンスをまねて踊る。カモシカの仮面のダンス、カナガの仮面のダンス。若い娘や、高い家の仮面のダンス。女たちの踊りはまずサンガでおこなわれ、つぎにサンガと同盟している地域でも続けられる。これらの日には、飲み干せないほどの量のビールが男にも女にもふるまわれる。この儀礼の中心をなしているのが、男と女の役割の転倒であることは明らかである。死と戦うために組織されている男たちの仮面結社のおかぶを奪って、女たちが仮面の模像を作り、仮面のダンスを踊る。地域に住む何百人もの女たちが、晴れ着を身につけ、ビールの酔いに身をまかせながら、何日もの間踊り続けるのである。しかしこの時、女たちはまったく例外的に、男たちの独占物である太鼓を叩く。ドゴン社会の根幹にあるのが男と女の分離であり、そして男たちはあらゆる手段を用いて自分たちの権威を女の上に築こうと努めていることを考えると、女が主役となるこの儀礼が、彼らの社会秩序の根幹を揺るがす転倒儀礼としての性格をもっていることは明らかである。人々はこの儀礼によって、死んだオゴンが具現していた古い秩序から、新しいオゴンが治める秩序へと移行しようとする。というのも転倒儀礼こそは、私たちがくり返しのべてきたように、攪乱された古い秩序から、新しい十全な秩序へ移行するためのいわば常套手段だからである。[14]

【事例 3】:

象牙海岸のアグニ族では、前王が死に、新王が即位するまでの空位期間、典型的なさかさま世界が出現する。この期間、自由人と宮廷の捕虜奴隷との関係は《ひっくりかえされる》。王が死ぬと、直ちに奴隷たちは王居を占拠し、ひとりが奴隷王となって、権力のあらゆる表徴を僭主する。一時的に王宮と位階制をうちたて、亡くなった王の座をしめ、あらゆる王の特権を享受する。彼は贈物を要求し、首邑の備蓄食糧を人をやって押収させる。最高権力が空白となり、統治者と被統治者が役割をかえるや否や、一切はあたかも社会が社会自身のカリカチュアとなったかのように、生起する。王様奴隷は、人間にたいするその命令権と、《世界にたいする》その支配権の強さを宣言する。自由人たちは、摂政がひそかに日常業務を規制し、新王の到来を準備しているのを知っているのだが、にもかかわらずこ

14 竹沢尚一郎『象徴と権力――儀礼の一般理論』勁草書房、一九八七年

の見せかけの王に服従する。奴隷たちの一時的な昇進を表明する傍若無人のふるまい―王の死去がその隷属をたちきったのである―と、王への服喪が自由人たちに課している拘束や禁止とは、きわめて対照的である。奴隷たちはもっとも豪華な腰巻きをまとい、祝宴をひらき、飲物を山ともってこさせる。権威と威信を回復したと断言し、もっとも聖なる掟すら犯してしまう。彼らは、王が守護者である政治的・市民的社会をひっくりかえすが、その代りに嘲弄的な王、常軌を逸した秩序、虚偽の規則体系しか代置できない。彼らはいわば、既存の社会秩序には、愚弄とカオスの危険以外に代替物がないことを示しているかのようである。亡き王の埋葬のその日に、虚偽の権力は廃棄される。奴隷は絹の腰巻を破りすて、王様奴隷は殺される。こうして各人と各事物をその地位と場所にふたたびつけて、新しい王は、秩序づけられた社会と組織された宇宙の支配権とを掌握することができるのである。[15]

【事例 1】は、スーダンのナイル河沿いに散在する部族の中のシルック族に見られる新王の即位式の様子である。新王は即位を宣言するために、ニカングの肖像を奪い取らなければならない。ニカングとは、「シルック王国の創造者たる不死の文化英雄」である[16]。古い王が死んだ後、選ばれた新王が全国民の支持を得るには、ニカングの肖像を掲げて、各地域を通過しなければならない。これによって権力の移行が完成し、新王が新しい権力者となったことを表すと考えられる。

【事例 2】で言及されているオゴンは、西アフリカにあるドゴン族の最高権力者である。オゴンが死んだあとの二年間は殯の期間であり、二年経つと葬送というかたちの儀礼が行われる。オゴンに対する葬送儀礼は「古い秩序から、新しいオゴンが治める秩序へ移行」することを意味するという。ここで注目しておきたいのは、この儀礼において主役を務めるのが男性ではなく、女性であるという点である。これは、女性と男性が入れ替わるという「社会秩序の根幹を揺るがす転倒儀礼」として読み取ることが可能である。儀礼の場は、女性にとって権力を主張する場所になっていると理解できよう。つまり、ここでは、女性は新しい秩序、いわゆる新しいオゴンを象徴し、男

15 山内昶「王権と転倒儀礼」甲南大学紀要文学編 67、一九八七年
16 青木保『儀礼の象徴性』岩波書店、一九八四年

性は古い秩序、死んだオゴンを象徴するのである。女性が男性に反発することは、権力を新しいオゴンに移譲するタイミングが来たという宣言であると言ってもよかろう。

【事例 3】は、王が死んで葬送される日までの期間、いつもは支配される立場である奴隷が、逆転して王になり、王としての支配権を持つようになる。そして、その期間中、奴隷たちは豪華な服を着用して、祝宴を開く。これは亡き王に対する葬送、新王の到来を迎える儀礼を行っていると考えられる。つまり、儀礼は奴隷たちにとって抑圧された権力への欲望を発散する場になっていると言えよう。

【事例 1】では、下位に存在する者ではなく、新王という次世代の権力候補者が儀礼の主役を担うことになっているが、そこでもやはり、ニカングの肖像を古い王から奪い取ることによって、自分こそが新たな権力者であるという立場を表明することになっている。【事例 2】における女性と、【事例 3】における奴隷は、いずれも儀礼を通して普段は手に入れられない権力を入手する。儀礼の最後では、新王の到来によって女性や奴隷は本来の立場に戻るが、儀礼を通じて見えてくるのは、下位に存在する者が権力の獲得を主張し、その主張に従って権力が与えられていくという構造である。

以上は、いずれも儀礼の場が、ある人物を「重要な政治的および宗教的役職」に就かせ、そして「絶対な権威」を与える機能を果たしていると解釈できる事例である[17]。これらの事例から“権力の獲得を主張し、その主張に従って権力を与えられる者”が儀礼の場で存在していることがわかる。これを踏まえた上で、再び『源氏物語』に目を移すことにしよう。

５．光源氏の四十賀における鬚黒の登場

光源氏は四十歳になったにもかかわらず、まだ若くて、健康に見えるが、近親者たちによって長寿を祝う算賀の儀礼が催行されてゆく。祝われる立場にある光源氏は、この儀礼の場において受動的とならざるを得ないのである[18]。そもそも、年齢を重ねるということ自体が、受動的な現象ではなかったか。老いが訪れてくるのを拒否する気持ちは誰にもあろうが、誰一人として、その訪れを拒否することはできない。平安時

---

17 竹沢尚一郎『象徴と権力――儀礼の一般理論』勁草書房、一九八七年

18 武者小路辰子「若菜巻の賀宴」（鈴木一雄監修・中田武司編集『源氏物語の鑑賞と基礎知識―若菜上』至文堂、二〇〇〇年）

代の貴族もまた、例外ではなかった。『伊勢物語』には、人間のそういった心境を象徴的に語る章段がある。

むかし、堀河のおほいまうちぎみと申す、いまそがりけり。四十の賀、九条の家にてせられける日、中将なりけるおきな、

桜花散りかひ曇れ老いらくの来むといふなる道まがふがに[19]

これは第九十七段「四十の賀」の章段であり、堀河の大臣が九条の家で四十賀を催した日の出来事を描いたものである。賀宴に出席した者の中には、当時中将であった翁もいて、次のような和歌を詠んだとある。「桜花よ、散り乱れて、あたりをかすませておくれ。老いがやってくるという道が、わからなくなるように」（新編日本古典文学全集訳）と。この話に端的に表れているように、平安貴族は老いがやってくるのを恐れ、拒否しているのである。実は、こういった心境は、同じく四十賀を催された光源氏においても観察されるものであった。

（光源氏）「過ぐる齢も、みづからの心にはことに思ひとがめられず、ただ昔ながらの若々しきありさまにて、改むることもなきを、かかる末々のもよほしになむ、なまはしたなきまで思ひ知らるるをりもはべりける。中納言のいつしかと儲けたなるを、ことごとしく思ひ隔てて、まだ見せずかし。人よりことに数へとりたまひける今日の子の日こそ、なほうれたけれ。しばしは老を忘れてもはべるべきを」と聞こえたまふ。

（若菜上④五七頁）

これは、四十賀の儀式において玉鬘が若菜を献上することに対し、光源氏が自らの年齢を嘆くという場面である。光源氏によれば、これまで歳を取っていくことについて、特に気にもしていなかったし、ただ昔と同じように若い気持ちのまま暮らしていたのだが、こうして玉鬘の子どもたちを目の前にしてみると、いつの間にか自分が孫を持つような年齢になっていたのだと、気恥ずかしく感じられてしまうという。実は、

19 新編日本古典文学全集『伊勢物語』・一九九頁）

光源氏の息子である夕霧が、最近になって子どもを儲けていたのだが、まだ面会をしていないため、光源氏は自分が孫を持つ年齢になったという自覚を持たずにいられたのであった。しかし、こうして今回、玉鬘が四十賀を催したことで、光源氏は自分が四十歳という老境に入ってしまったことを痛感する。それゆえ光源氏は、発言の最後に、「この祝賀さえなければ今しばらくの間は老いを忘れていられたのに」と、玉鬘に対して冗談半分で恨み言を述べてゆくのである。

このように、光源氏は老いが訪れることを恐れつつ、しかし、孫までもできているという現状を再認識し、自分がすでに老年期に入った身であることを受け入れざるを得ない。『伊勢物語』の堀河の大臣にせよ、光源氏にせよ、いずれも政治の世界で一定の地位を築いた人物であり、そういった彼らが老いを恐れるのは、自分が今まで君臨していた世界の中心から外され、権力を揮えぬ立場に追いやられる時期が迫ってきたことを痛感するからであると考えられる。

若菜上巻において、光源氏の長寿を祝う四十賀は、多くの紙幅を費やして叙述されている。一年という時間をかけ、四回にわたって催された賀宴は、いずれも見事に運営された。これは、光源氏の力に頼っていた息子・娘・養女たちがそれぞれ成長し、「見事な祭りを運営する力」を有するまでに成長したことを意味する。換言すればそれは、かつては光源氏が所有していたはずの行事運営能力が、四十歳になった現在、彼の掌中から次世代の子どもたちの手に移譲せざるを得なくなったということである[20]。実際に物語は、次巻となる若菜下巻において、政界の世代交代を語り出すことになっている。その世代交代は、冷泉帝の退位に伴う人事異動というかたちで行われてゆく。次に掲げるのは、その冷泉帝の退位に関する叙述である。

> はかなくて、年月も重なりて、内裏の帝御位に即かせたまひて十八年にならせたまひぬ。（冷泉帝）「次の君とならせたまふべき皇子おはしまさず、もののはえなきに、世の中はかなくおぼゆるを、心やすく思ふ人々にも対面し、私ざまに心をやりて、のどかに過ぐさまほしくなむ」と、年ごろ思しのたまはせつるを、日ご

20 三田村雅子「懐妊と算賀の時間」（『源氏物語―物語空間を読む』筑摩書房、一九九七年；但し、他の主催者たちが光源氏の保護から脱出して、独自の行動能力を有していることに対し、共に主催者である紫の上だけが光源氏の庇護から脱出していない。川名淳子「若菜巻　光源氏四十賀について（一）―紫の上主催の賀を中心に―」（『立教大学日本文学』第五十二号、一九八四年七月）

ろいと重くなやませたまふことありて、にはかにおりゐさせたまひぬ。世の人、飽かず盛りの御世を、かくのがれたまふことと惜しみ嘆けど、春宮もおとなびさせたまひにたれば、うち継ぎて、世の中の政などことに変るけぢめもなかりけり。

（若菜下④一六四～五頁）

冷泉帝が即位してから十八年が経過し、ついに退位する時期が訪れた。退位するにあたって冷泉帝は、自分には次の世を継ぐ皇子がいないので、残りの人生を気安く、親しい人々と交際するなど、私人として自由に暮らしていきたいと考えている。冷泉帝の退位について、世間では惜しみ嘆いているが、朱雀院の皇子である東宮はすでに成人していたため、すぐに皇位を継ぎ、政治状況も特に変更なく、従来通りの世の中となった。ここで注意しておきたいのは、「世の中の政などことに変るけぢめもなかりけり」とある点である。これについて、新編日本古典文学全集の頭注は、「御代替りで権勢の交代する場合が多いが、ここでは変化がない。源氏の最大の権勢も従前どおりである」[21]と解説する。しかし、後続する文脈には、政界人事の異動に関して以下のような叙述がうかがえるのである。

太政大臣、致仕の表奉りて、籠りゐたまひぬ。（致仕の大臣）「世の中の常なきにより、かしこき帝の君も位を去りたまひぬるに、年ふかき身の冠を挂けむ、何か惜しからん」と思しのたまふべし。左大将、右大臣になりたまひてぞ、世の中の政仕うまつりたまひける。女御の君は、かかる御世をも待ちつけたまはで亡せたまひにければ、限りある御位を得たまへれど、物の背後の心地してかひなかりけり、六条の女御の御腹の一の宮、坊にゐたまひぬ。さるべきこととかねて思ひしかど、さしあたりてはなほめでたく、目おどろかるるわざなりけり。右大将の君、大納言になりたまひぬ。いよいよあらまほしき御仲らひなり。

（若菜下④一六五頁）

ここには、冷泉帝の譲位後に展開された政界の人事異動の詳細が語られている。それによると、太政大臣は、「年ふかき身の冠を挂けむ、何か惜しからん」と、辞職する

21 若菜下④一六四頁・頭注一一

意を表わしたらしい。ちなみにこの語句は、後漢の逢萌が王莽に仕えることを忌避して、冠を東都の城門に挂け、家族を連れて遼東に逃れたという故事[22]に基づくものである。そこには、新帝の即位に伴って政界の時勢も変わるべきであるという太政大臣の意向も含まれていると考えたい。太政大臣は、後進のために身を退こうと考えているのである。その後進とは、次に触れる鬚黒大将にほかならない。

政界における人事の異動を語る文脈で、太政大臣の引退表明と入れ替わるようにして言及されてくるのが鬚黒大将の右大臣就任であった。鬚黒は、いよいよ右大臣となり、太政官制度の上では実質的なトップの座に就くこととなる。鬚黒の政治の力に関しては、第２節においてすでに考察を行ったように、彼は今上帝の後見として今後の政権を一手に収める権勢家となることが予測される。

人事異動に関する叙述の最後は、夕霧に対する言及となっている。夕霧は、右大将から大納言に昇進したとある。夕霧の昇進を語る文脈には、「（新任の右大臣とも）いよいよあらまほしき御仲らひなり」とあって、夕霧と鬚黒の関係がいよいよ親密さを増していることが触れられている。この新たな関係について、新編日本古典文学全集の頭注は、「源氏の側からいえば、あらたな権勢家鬚黒をも自家の傘下におさめたことになる」[23]と解説する。しかしこれは、換言すれば、光源氏一門の勢力を維持するためには鬚黒と組む必要があったということであり、政界における鬚黒の存在が増大化しつつある状況を象徴していよう。

このように見てくると、かつては政界を二分する勢力であった太政大臣と光源氏は、今や世代交代の波によって政治の世界から身を退くこととなり、新たに台頭してきた鬚黒の存在を無視できなくなっていることがわかろう。

ここで再び、玉鬘が主催した光源氏の四十賀の場面を振り返ってみたい。その場面に登場してくる玉鬘について、物語は「左大将殿の北の方」（若菜上④五五頁）と呼び、また、「さばかりの御勢ひなれば」（若菜上④五五頁）ともあって、玉鬘の背後に控える夫鬚黒大将の存在を強調する。つまり、玉鬘によって主催された光源氏の四十賀は、実質的には鬚黒によって催行された賀宴なのである。また、その賀宴では管絃の遊びが催されるのだが、その音楽に用いる楽器の数々については、「太政大臣の、その方は

22 若菜下④一六四頁・頭注一三
23 若菜下④一六五頁・頭注二一

ととのへたまひ」（若菜上④五八頁）と、玉鬘の実父である太政大臣が調達したことが語られている[24]。ここで留意したいのは、鬚黒も太政大臣も、ともにこの物語では藤原氏に設定されているという点である。光源氏の四十賀は、鬚黒にとって、藤原氏としての財力や人脈を示す場として機能しているのである[25]。そして、そのような鬚黒大将の存在感の増大化を、物語は「うけばる」と表現するわけである。

ここで、前節に見てきた儀礼の場における権力の交替劇を想起しておきたい。儀礼の場はしばしば、普段は下位に置かれている者たちの欲望を汲み取るがごとく、立場を転倒させ、新たな王の誕生を演出する。儀礼の場とは、“権力の獲得を主張し、その主張に従って権力を与えられる者”の登場を容認するのである。ここに見てきた光源氏の四十賀もまた、そういった儀礼の場と同様の構造を孕んでいるのではないか。そして、物語はそのような構造に則って、次世代の権力候補者である鬚黒大将の存在を「うけばる」という表現と共に語ってゆくのである。

さて、『源氏物語』には、他にも算賀儀礼が描かれている。果たしてそれらは上記に見てきたような構造を、どのように踏まえているのであろうか。次節では、それらの算賀儀礼についても触れておくことにする。

６．物語に見られる算賀と政界の動き

松井健児氏によれば、宮廷社会の公的儀式に見られるさまざまな文化的な催しは、「政治的な権力形成の場」であるという[26]。また、袴田光康氏は、平安前期の天皇や上皇にとって、四十歳という境界年齢を迎える祝賀儀礼は、単に本人を祝うわけではなく、算賀を主催する者の「主体性と深く関わった政治的儀式」でもあると説く[27]。これ

---

24 鬚黒が強く印象づけられると同時に、太政大臣の存在感もかなりある。池田氏は、玉鬘の賀では、玉鬘の準備した物に対して、「いまめかし」「いまめく」とするところに注目をし、太政大臣が絵合において、用意した絵を「いまめかし」と語られていることから「いまめかし」いものとは、藤原氏的なあり方であると説いている。池田節子「光源氏四十賀と朱雀院五十賀の相違を中心に」(小嶋菜温子・長谷川範彰編『源氏物語と儀礼』武蔵野書院、二〇一二年)

25 池田尚隆「『栄花』と『源氏』と『小右記』―藤原娍子記事を中心に―」（『山梨大学教育学部研究報告』一九八九・二）

26 松井健児「宮廷文化と遊びわざ」(『源氏物語の生活世界』翰林書房、二〇〇〇年)

27 袴田光康「『源氏物語』の算賀―宮廷算賀と直系皇統の視点から―」(小嶋菜温子編『王朝文学と通過儀礼』竹林舎、二〇〇七年)

らの先行論を踏まえつつ、本節では『源氏物語』に描かれている算賀と政治の関係性について考察を展開しようと思う。

『源氏物語』には、三人の登場人物に関わる算賀についての克明な描写がある。すなわち、本稿で問題としている光源氏の四十賀（若菜上巻）、桐壺帝の主催によって一院に奉られた紅葉の賀（紅葉賀巻）[28]、そして朱雀院の五十賀（若菜下巻）である。そのほか、紫の上の父である式部卿宮の五十賀（少女巻）については、準備のことが言及されているが、儀式そのものは記されていない。ここでは式部卿宮の五十賀を除外し、紅葉の賀と朱雀院の五十賀を考察の対象とすることにしたい。実は、一院のための紅葉の賀と朱雀院の五十賀という二つの算賀は、いずれも表面的には平安朝のみやびを描いた儀礼の場でありながら、その深層には政界の権力構造の動きが潜んでいるという点で共通性が認められるのである。まずは、紅葉の賀から見ていきたい。

> その夜、源氏の中将正三位したまふ。頭中将正下の加階したまふ。上達部は、みなさるべきかぎりよろこびしたまふも、この君にひかれたまへるなれば、人の目をもおどろかし、心をも喜ばせたまふ、昔の世ゆかしげなり。
>
> （紅葉賀①三一五～六頁）

これは紅葉の賀宴が終わった後、桐壺帝が見事な舞を見せた貴公子たちへの褒美として昇進を通達する条である。光源氏は四位中将から正三位に、頭中将は従四位から正四位下に昇位しており、それにともなって、ほかの上達部たちも昇位することになった。つまり、紅葉の賀を契機として、政界の人事異動が行われたのである。実は、この人事異動には桐壺帝の政治的思惑が込められていると考えられる。すなわち、紅葉の賀が催された時点で藤壺は懐妊中であり、その皇子が誕生した暁には、皇子の後見人として光源氏を用いようという桐壺帝の構想のもとに、光源氏が四位から正三位に昇進させるという人事が行われたのではないかという可能性が読み得るのである。それゆえ、光源氏の昇進は、同じくこの賀宴で舞を演じた藤原氏である頭中将よりも

---

[28] 通説では、紅葉の賀は一院に奉られる賀宴であるが、紅葉賀巻に算賀と明記されていないため、紅葉賀は算賀ではなく、一般の行幸であると主張する説もある。高田信敬「朱雀院の行幸―紅葉賀臆説―」（森一郎・岩佐美代子・坂本共展編『源氏物語の展望』第十輯、三弥井書店、二〇一一）。本稿では、通説に従い、紅葉賀を算賀の行幸として考察対象とする。

上位になるかたちで行われた。次に掲げるのは、譲位を間近にした帝が、藤壺、光源氏、藤壺が生んだ皇子（後の冷泉帝）に対する措置である。

> 七月にぞ后ゐたまふめりし。源氏の君、宰相になりたまひぬ。帝おりゐさせたまはむの御心づかひ近うなりて、この若宮を坊にと思ひきこえさせたまふに、御後見したまふべき人おはせず、御母方、みな親王たちにて、源氏の公事知りたまふ筋ならねば、母宮をだに動きなきさまにしおきたてまつりて、強りにと思すになむありける。
>
> （紅葉賀①三四七頁）

七月には立后が予定されているが、桐壺帝はそれに先立って、光源氏を宰相に昇進させた。譲位を前にして、桐壺帝は藤壺が出産した皇子を立坊しようとするが、この皇子にはしっかりした後見がいないため、その母である藤壺を中宮にすることで皇子の立場の安定化を図る。光源氏の昇進は、こういった藤壺の立后や、若宮立坊と連動している出来事として語られているのである。この件に関して、三谷邦明氏は、光源氏の宰相への昇進を、桐壺帝の「御代替わり」後の政治状況のための布石であると指摘している[29]。この三谷氏の指摘は、光源氏の宰相昇進に関わってのものであるが、それを遡った文脈において語られてくる紅葉の賀での光源氏の正三位昇進についても、適用できるのではないか。つまり、桐壺帝の布石は紅葉の賀の時点において、すでに発動していると考えられる。実際に、紅葉の賀における人事異動を、政界における勢力の調整として読む論も提出されている[30]。

これら諸論を踏まえると、紅葉の賀の時点で藤壺が懐妊した皇子の将来を考慮した桐壺帝は、光源氏を三位に昇進する方策を実施したと考えられてこよう。なお、桐壺帝は皇子（後の冷泉帝）を立坊したが、桐壺帝の退位にともなって即位したのは朱雀帝である。朱雀帝は桐壺帝の第一皇子で、右大臣を外祖父に持ち、弘徽殿女御を母とする。こういった出自に対して、冷泉は、立坊したとはいえ、有力な後見者がいない。

---

29 三谷邦明「源典侍物語の構造」（『物語文学の方法Ⅱ』有精堂、一九八九年）

30 松井健児氏は、儀式の場とは、「社会秩序の逆転や調整の場」であると当時に、「新たな社会秩序を生み出す場」でもあると説いている（松井健児「朱雀院行幸と青海波」『源氏物語の生活世界』翰林書房、二〇〇〇年）。

このような状況において、冷泉が朱雀帝の次代の天皇として無事に即位できるか否かは予断を許さない。そのため、桐壺帝は冷泉の有力な後見者を選ぶ必要があった。冷泉の後見者を選ぶとすれば、光源氏が最もふさわしい人物であると桐壺帝は考えていたのであろう。それゆえ、桐壺帝は紅葉の賀をきっかけに、光源氏を昇進させ、生まれてくる皇子（冷泉）の有力な後見者となるように育成してゆくのである。

桐壺帝は、光源氏を冷泉の後見者として育成するべく官位を上げてゆくわけだが、それはすなわち、光源氏に政治の力を付与するということである。そして、政治力を身に着けた光源氏の保護によって冷泉が順調に即位できれば、今度はその冷泉の天皇としての力が光源氏の前途を保証するようになるであろう。つまり、冷泉と光源氏は相互依存の関係であり、そのような関係へと至る布石として、この紅葉の賀という儀礼の場が用意されてきているのである。つまり、紅葉の賀という儀礼の場は、桐壺帝が自らの権力を駆使することによって、自分の構築したい政治状況を生み出す場として機能しているのである。

但し、そういった政界の構図は一方で、危険を内包していることには留意しておきたい。この場に参観者として立ち合っている藤壺の身には、光源氏の子が宿されている。つまり、全てを裁量しているはずの桐壺帝は、実は、自らの権力の届かない領域を、この時抱えてしまっているのであり、それが賀宴という公儀的な場において、透かし見えてきているという危険な契機でもあるのである。このように考えてきた場合、光源氏の存在は、桐壺帝によって打たれた布石であると同時に、その権力者の立場を危険に陥らせる存在でもあることが見えてくる。更に留意すべきは、この紅葉賀は、実は物語の構成の上では、次巻の花宴と対構造になっている催事でもあるという点である。花宴までをも視野に収めた場合、今度は存在感を増しつつあった光源氏が反転して権力候補者から引きずり落とされていく模様をうかがうことができる。次に掲げるのは、花宴に描かれた、東宮(光源氏の兄、後の朱雀帝)が、光源氏に舞を所望する場面である。

> 楽どもなどは、さらにもいはず調へさせたまへり。やうやう入日になるほど、春の鶯囀るといふ舞いとおもしろく見ゆるに、源氏の御紅葉の賀のをり思し出でられて、春宮、かざし賜せて、切に責めのたまはするにのがれがたくて、立ちて、

のどかに、袖かへすところを一をれ気色ばかり舞ひたまへるに、似るべきものなく見ゆ。

（花宴①三五四頁）

花宴の舞楽の場面。日の傾く時分に、東宮は紅葉の賀宴で光源氏の舞った青海波を思い出し、それを再現したいという欲求から、挿頭の花を光源氏に賜り、舞を所望する。光源氏は辞退しきれず、立ち上がって、袖をひるがえす所作を一つばかり舞った。

この花宴は紅葉賀とともに桐壺帝によって主催された晴儀であるが、そこに浮かび上がるのは東宮の命令に従うしかない光源氏の姿である。この光源氏の姿は、「紅葉賀の時とは打って変わって力が抜けている」と説かれている[31]。桐壺帝の御代が終わり、帝の位を継承する東宮の時代が訪れつつあることを予感させるとも言えよう。つまり、この宴において次代の権力者として描かれているのは、光源氏の兄東宮ということになる。考察の対象を紅葉の賀に限定せず、この花宴までも含めれば、台頭してきているのは東宮であるという解釈も成立することをここに確認しておきたい。

では次に、若菜下巻に描かれている朱雀院の五十賀に潜む政治性を見てみよう。

御賀は、二十五日になりにけり。かかる時のやむごとなき上達部の重くわづらひたまふに、親はらから、あまたの人々、さる高き御仲らひの嘆きしをれたまへるころほひにて、ものすさまじきやうなれど、次々にとどこほりつることだにあるを、さてやむまじきことなれば、いかでかは思しとどまらむ。女宮の御心の中をぞ、いとほしく思ひきこえさせたまふ。例の五十寺の御誦経、また、かのおはします御寺にも摩訶毘盧遮那の。

（若菜下④二八四～五頁）

これは女三の宮が主催する朱雀院の五十賀を描く条である。賀宴は女三の宮によって主催されるが、実際に計画をしたのは光源氏である。この光源氏によって計画された朱雀院の五十賀は紫上の病、女三宮の病が次々に発生することで、度々延期され、結局年末も押し迫った時期に挙行されることになる。これは光源氏の世界を、「内側か

31 三田村雅子「花宴」（秋山虔編『新・源氏物語必携』學燈社、一九九七年）

ら切り崩していく」ものとなっていると三田村雅子氏は説いている[32]。また、そこには、光源氏の「老い」の姿が現れていて、若い世代が台頭してくるという交代劇としての意味が含まれるとも説かれている[33]。ここで留意したいのは、果たしてその若い世代とはいったい誰のことを指しているのかという点である。賀宴の場面を見てみると、実は物語は、その賀宴の場に不在の人物、すなわち欠席した柏木に対して多くの筆を費やしていることに注目される。柏木はなぜこのような大事な賀宴に欠席したのか。物語の文脈でその理由を確認すれば、賀宴の本番を迎えるための練習である試楽の場において、光源氏は柏木に対して皮肉と鋭い視線を浴びせたことが原因と推測されてくる。以下に掲げるのは、その試楽当日の場面である。

> とどめてほほ笑まるる、いと心恥づかしや。さりとも、いましばしならむ。さかさまに行かぬ年月よ。老いは、えのがれぬわざなり」とてうち見やりたまふに、人よりけにまめだち屈じて、まことに心地もいとなやましければ、いみじきことも目もとまらぬ心地する人をしも、さし分きて空酔ひをしつつかくのたまふ、戯れのやうなれど、いとど胸つぶれて、盃のめぐり来るも頭いたくおぼゆれば、けしきばかりにて紛らはすを御覧じ咎めて、持たせながらたびたび強ひたまへば、はしたなくてもてわづらふさま、なべての人に似ずをかし。
>
> （若菜下④二八〇～一頁）

本番と同じプログラムで舞楽が催された後、光源氏は酔いを装って、柏木に皮肉を述べてゆく。それによると、自分は歳を取ったせいか、「酔泣き」の癖がどうにも止められない。その老醜の姿を柏木が目ざとく見つけて笑みを浮かべているので恥ずかしくてならない。でも、それも当面のことだ。年月は誰に対しても平等に流れる。誰もがやがて歳を取るのだ、と言う。光源氏は自虐的に老いを話題にしつつ、柏木の若さに嫉妬してゆくのである。光源氏がこのような攻撃的な言葉を柏木に発していくのは、妻である女三の宮と柏木の関係を知ってしまったことによる。光源氏に密通が露見したことを察知した柏木は、精神的に追い詰められ、病気がちになってしまう。柏木は、

---

32 三田村雅子、前掲注 20 論文。
33 三田村雅子、前掲注 20 論文。

光源氏が主催する朱雀院の五十賀の試楽には欠席するつもりであったが、光源氏がわざわざ招待状を送ってきたのに加えて、父大臣もたいした病気ではないという理由で出席を促したため、結局柏木は試楽に赴かざるを得なくなったのである。だが、光源氏はやはりその密通事件が頭から離れず、ようやく参上してきた柏木に対して、上記のような鋭い皮肉を言ってしまう。光源氏の発言を聞いた柏木は、胸が動悸し、悪酔いをして頭もずきずきと疼く。そして、宴も終わらないうちに六条院を退出した。この日を境に、柏木は体が衰弱してゆき、病の床に臥せってしまうことになる。その結果、柏木は正式な五十賀に出席できなくなったのであった。

さて、若き青年である柏木が、朱雀院の五十賀に出席できなくなってしまったという状況は、物語世界の中に、いかなる波紋を投ずるのか。物語が描くのは、柏木の親兄弟をはじめとする一族の者たちが嘆き沈む有様である。なぜなら、柏木こそは、藤原摂関家の正当な後継者にほかならず、いわば藤原氏一族の運命は彼の存在に託されていると言えるからである[34]。そのような柏木が、公的な儀礼の場である朱雀院の五十賀に欠席したわけであり、藤原氏一族にとっての損失は決して小さくない。これは、いわば藤原氏が大事な後継者を失ってしまったことを暗示する場面になるのではないか。

朱雀院の五十賀の場が政治的な色彩を帯びていることについては、従来、光源氏が孫たちに童舞を献上させるという条に関わって、それが次世代の育成と権力維持のための布石となるという側面から論じられてきたが[35]、そういった次世代へ向けての権力維持のための布石は、この柏木に対する光源氏の皮肉な発言にもうかがうことができると考えておきたい。本来であれば、現状の権力者の引退と入れ換えるようにして、次の権力候補者が存在感増大させていく契機としてあるはずのところを、朱雀院の五十賀では、そういった契機を逸するために、物語は柏木の姿を描いてゆく。

さて、このように見てくると、本節で取り上げてきた紅葉の賀と朱雀院の五十賀は、いずれも、第 4 節で抽出した“権力の獲得を主張し、その主張に従って権力を与えられる者”という方程式が、そのままのかたちで実践されているわけではないというこ

---

34 村井利彦「輔翼の思想―頭中将と光源氏、柏木と夕霧の友情―」(『人物で読む「源氏物語」第十六巻――内大臣・柏木・夕霧』勉誠出版、二〇〇六年)

35 池田節子「光源氏四十賀と朱雀院五十賀の相違を中心に」(小嶋菜温子・長谷川範彰編『源氏物語と儀礼』武蔵野書院、二〇一二年)

とがわかる。紅葉の賀では、東宮という別の権力候補者が後に控えていた。朱雀院の五十賀では、次代の権力候補者である柏木が機を逸していく場となっていた。唯一、光源氏の四十賀のみが、儀礼の持つ本来的な構造に準拠するかたちで、次世代の権力候補者の台頭を描いていることが判明する。

結論

光源氏の四十賀は四回に渡って催されるが、そのうち、養女の玉鬘によって最初に主催された賀宴は特に注目に値する。その賀宴は、表面上は玉鬘が主催者となるが、実質的には玉鬘の夫である鬚黒大将が、自らの財力や人脈を誇示するための場となっている。その鬚黒の存在を、物語は「うけばる」という表現を用いて描いてゆく。この「うけばる」という語は、物語において、人物の地位や財力と関わるものとして用いられており、鬚黒の場合もまた例外ではない。鬚黒は、次世代の政界において権勢家となることが有力視されている人物であり、光源氏の四十賀の時点では、まさに台頭しつつある新勢力として描かれている。一方、四十賀で祝われる立場にある光源氏は、今や老境を迎え、引退を促されている。四十賀という儀礼の場は、そのような旧勢力と新勢力の交代劇が演じられる舞台として物語に描かれてきているのである。

では、なぜそのような交代劇の場として、四十賀という儀礼の場が選ばれているのか。諸文化に見られる儀礼を参照してみると、下位の者や次世代の権力候補者が“権力の獲得を主張し、その主張に従って権力を与えられる”というプロセスが構造化されていることを見て取ることができる。鬚黒大将が光源氏の四十賀という儀礼の場で「うけばる」姿とは、この権力の獲得を主張する姿として解釈されるべきものなのではないか。鬚黒は、自らの持つ財力や人脈を誇示することによって、自分こそが光源氏に取って代わる次世代の権力者であることを主張するわけである。このような鬚黒の積極的な在り方に対し、光源氏の在り方は専ら受動的と言わざるを得ない。自分ではまだ若いと思っている光源氏は、鬚黒の妻である玉鬘によって老境に入った身であることを痛感させられる。光源氏にとって四十賀とは、老いを受け入れ、そして、もはや政界の主役として君臨する立場にはないことを受け入れるための儀礼としてあると言ってよい。光源氏の人生の転換点として機能する四十賀とは、それゆえ典型的な

通過儀礼の機能を有しているとも言える。

四回にわたって催された光源氏の四十賀が玉鬘によって最初に主催されたことの意味とは何か。本稿ではこのような問題意識のもとに考察を展開してきた。その結果として、玉鬘が主催する光源氏の四十賀とは、老境に入った光源氏が引退を余儀なくされ、次世代の権勢家である鬚黒が存在感を増大化していく契機としてあるという見解を提示しておくことにする。

第五章

『源氏物語』における葵の上の葬送儀礼

―呪術による境界の設定―

1. 問題提起

平安期に成立した『源氏物語』には、当時の貴族社会で重視されている人生儀礼が数多く描かれている。そのうち、葬送儀礼に関する描写が最も多く[1]、注目されるべき現象であると思われる。葬送は、端的に言えば、生者と死者が別れる際に、生者の側によって執行される儀式であり、したがってそこには、生者の死者に対する思いが込められてもいよう。今回、考察の対象とするのは、光源氏の正妻である葵の上の葬送儀礼である。葵の上は、左大臣を父に持ち、母は桐壺帝と同腹の妹にあたる大宮であり、左大臣家にとって大切な一人娘となる。桐壺巻の叙述によれば、東宮（朱雀帝）から入内を望まれながらも、左大臣と桐壺帝との合意によって、皇籍を奪われた光源氏と結婚することになった。そして、結婚九年目の春、葵の上は光源氏の子を懐妊したのだが、出産に際して物の怪に襲われて急逝。物語はその葵の上の死について、招魂儀礼、遺体損壊、葬送儀礼、追悼儀礼といったプロセスを描出してゆく。考察を展開する端緒として、まずは試みに、それらのプロセスの具体相を本文によって確認してみたい。

a 御物の怪のたびたび取り入れたてまつりしを思して、御枕などもさながら二三日見たてまつりたまへど、やうやう変りたまふことどものあれば、限りと思しはつるほど誰も誰もいといみじ。

（新編日本古典文学全集・葵巻②四六頁）[2]

b 人の申すに従ひて、いかめしきことどもを、生きや返りたまふとさまざまに残ることなく、かつ損はれたまふことどものあるを見る見るも尽きせず思しまどへど、かひなくて日ごろになれば、いかがはせむとて鳥辺野に率てたてまつるほど、いみじげなること多かり。

（葵巻③四七頁）

---

[1] 青木慎一・長谷川範彰・馬場淳子「『源氏物語』通過儀礼一覧」による。（小嶋菜温子・長谷川範彰編 『源氏物語と通過儀礼』武蔵野書院、二〇一二年）。

[2] 『源氏物語』の本文の引用は新編日本古典文学全集（小学館）により、巻名・冊数・頁数を記した。傍線等は引用者による。

c 夜もすがらいみじうののしりつる儀式なれど、いともはかなき御骸骨ばかりを御なごりにて、暁深く帰りたまふ。

（葵巻③四七～八頁）

d 殿におはし着きて、つゆまどろまれたまはず、年ごろの御ありさまを思し出でつつ、などて、つひにはおのづから見なほしたまひてむとのどかに思ひて、なほざりのすさ　びにつけても、つらしとおぼえられたてまつりけむ、世を経て疎く恥づかしきものに思ひて過ぎはてたまひぬる、など悔しきこと多く思しつづけらるれど、かひなし。鈍める御衣奉れるも、夢の心地して、我先立たましかば、深くぞ染めたまはましと思すさへ……。

（葵巻③四八～九頁）

a は、急逝した葵の上に蘇生術が施行されている描写であり、つまり招魂儀礼の行われている場面である。葵の上が息絶えてしまったとはいえ、その状態が物の怪に取り憑かれているだけの可能性もあり、まだ本当の死去の状態ではないという一縷の望みに左大臣家の人々は縋るのである。葵の上の枕をそのままの状態にして移動させず[3]、様々な蘇生の秘術を施し、二三日様子を観察したとある。

b は、蘇生が失敗した葵の上の遺体が損なわれていく様子を語っている条である。遺体がすでに損壊しているため、左大臣家の人々は、仕方なく、葵の上の遺体を鳥辺野へ運んで行き、葬送を催すことになる。

c は、葵の上の葬式の様子について語った叙述である。葬式は夜通し行われ、喧騒の中で盛大な儀式として挙行された。

d は、光源氏が葵の上を深く追悼する場面である。光源氏は、葵の上が最期まで自分に対し、よそよそしく気詰まりな夫だという認識を抱いたまま死んでしまったことについて残念だと思っている。

さてここで、『源氏物語』に描かれてくる葬送に関する先行研究を概観しておきたい。頼富本宏氏は、『源氏物語』の各帖における登場人物の死と葬送に関する記述をベース

[3] 葵巻②・四六頁・頭注 **14** によると、「仮死状態になった人を、北枕西向きに位置を変える「枕がえし」をすると、その人は蘇生できないと考えられていた」という。

に、実質的儀礼の経過や手続きを五段階に分け、(1)平癒祈祷、(2)臨終・入棺、(3)葬送・葬儀、(4)追善法事、(5)墓制と整理している。これらのうち、死の前に行われる「(1) 平癒祈祷」と、葬式以降に行われる「(4) 追善法事」が、平安期においては中心的なものであったという[4]。また、葵の上の葬送に関わる論に限定してみると、林田孝和氏は、全身が腐乱するまで「いきやかへり給ふ」と行われた葵の上の招魂儀礼について、大陸ふうの呪法や加持祈祷・立願など、さまざまな魂呼ばいが行われたと指摘して、招魂儀礼に注目している[5]。更に、葬送儀礼の後に展開される追悼の場面については、松本真菜美氏が、葬送儀礼の後の物語描写について、葵の上が親近者に哀悼される場面は伝統に則って描かれていると説き[6]、中西紀子氏が、葵の上の追悼場面の長々さを、光源氏の「心内に悲哀の真情がないからこそ、それをおぎなう外の形を哀しく美しく荘厳しなければならない」として、夫婦の情愛の薄さを説いている[7]。

以上のように、先行研究は凡そ、葵の上の死に関する招魂儀礼と追悼儀礼に注目しながら論じる傾向にある。それらに対し、本稿では、招魂儀礼と葬送儀礼の間の期間に描かれている葵の上の遺体損壊の場面（＝ｂ）に注目してみたい。葵の上という人物は、左大臣を父に持つ上流貴族の姫君であり、なおかつ、主人公光源氏の正妻という立場にあるが、そのような上流の貴婦人の最期を描くにあたって、なぜ物語は遺体損壊というプロセスを敢えて語ってゆくのか。

2. 歴史に見られる招魂儀礼と死体の洗浄

葵の上の遺体損壊について、物語本文は「かつ損はれたまふことどものあるを見る見るも尽きせず思しまどへど」（葵③四七頁）という一言で描いている。本節では、この遺体損壊の描写をめぐって考察を展開してゆく。この描写に関して、林田孝和氏は次のような説明をしている。

---

4 頼富本宏「源氏物語の葬送―とくに仏教儀礼の立場から―」（小嶋菜温子編『王朝文学と通過儀礼』竹林舎、二〇〇七年）
5 林田孝和「源氏物語の葬列―「車より落ちぬべう惑ひ給へば」を焦点に―」（『源氏物語の精神史研究』桜楓社、一九九三年）
6 松本真菜美「葬送儀礼関係歌の流れから見る『源氏物語』」（小嶋菜温子・長谷川典彰編『源氏物語と儀礼』武蔵野書院、二〇一二年）
7 中西紀子「光源氏の哀しみの形姿―葵上葬送における追悼表現を中心に―」（『王朝文学研究誌』大阪教育大学大学院王朝文学研究会、一九九九年）。

葵上は夕霧をやっと出産したあと、除目で人少なになった夜、再び出現した六条御息所の生霊にとり憑かれ絶命する。秋とはいえまだ暑さの残る陰暦八月の中旬、二日三日で死相が顕著となるが、そのまま数日安置。遺骸は傷んでいく。そこなわれていく。大形の魚は舟に引きあげる前、海中で血抜きをし、鮮度を保とうとすることからもわかるとおり、死体は血液の溜まったところから腐敗する。葵上の遺体も腹部や背中から腐蝕が進むはずである。体は白い帷子をまとっているから、見えるのは葵上の顔だけである。その顔が腐蝕し崩れていくと語るのである。作者はまさに葵上の全身腐乱の状態を描ききる。サディスティック極まりない描写といえよう[8]。

林田氏によれば、葵の上の遺体が腐敗し、醜く崩れていくのは、この場面の時期が残暑である陰暦の八月に設定されているからであるという。暦の上では秋とはいえ、まだ暑さの残るなか、二三日安置された遺体は、当然のことながら腐乱してゆく。次第に死相が顕著となってゆく葵の上は、その安置されている期間に、「生きや返りたまふとさまざまに残ることなく」(葵②47 頁)招魂儀礼が施行されている。これはつまり、葵の上の遺体の腐敗を招致し、促進してしまったのは、ほかならぬ招魂儀礼であると言っても過言ではない。しかし、本来の招魂儀礼は遺体の腐敗を招致するようなものではなかった。実は、女性が死んだ直後、招魂儀礼が施される例は歴史上しばしば見られる。以下に、その事例のいくつかを確認していきたい[9]。次に掲げるのは藤原嬉子が死んだ後、彼女に行われた蘇生術を描く場面である。

今は加持の声も聞えず、御読経の声も聞えず、「観音」とのみ申しののしる。一人が一声を申すだに、いかがは験おはすなるに、ましてそこらの人の、同じ心に一心に念じたてまつるほどは、さりともとこそは見えさせたまへ。されどすべて限りになり果てさせたまひぬ。御年十九。あないみじ、あさましと思しめす。殿の御前は、やがてさし退いて、あさましく臥させたまひぬ。主計助守道、おはしま

8 林田孝和「源氏物語の葬列」(『源氏物語の精神史研究』桜楓社、一九九三年)
9 中村義雄『王朝の風俗と文学』(塙書房、一九六二年)や、山中裕・鈴木一雄編集『平安時代の儀礼と歳事』(至文堂、一九九一年)などを参考にした。

す対の上に、御衣を持て上りて、よろづを申しつづけ招きたてまつる[10]。

嬉子は、親仁親王（後の後冷泉天皇）を出産した。生誕三日目の産養の当日、御湯殿の儀が終わったころに、嬉子はにわかに苦しみ始めたため、読経、加持祈祷が行われることになった。しかし、その効果もなく、十九歳の若い年で亡くなってしまう。嬉子の父である藤原道長は、落胆のあまり床に就いてしまった。そこで、嬉子の招魂儀礼が行われることとなる。主計助守道が嬉子の衣装を持って屋根に上り、東の方を向いて三度名前を呼びながら衣装を振るという作法を行った。ここで注目されるのが、招魂術が失敗した後に、嬉子の亡骸が洗浄されるというプロセスがある点である。

暮には、やがて、納めたてまつりてこそは御車におはしますべければ、上の御前は、御帳の内に入らせたまひて、泣く泣く見たてまつらせたまふ。かくてうせさせたまへれば、むつかしう思しめさるらむとて、小式部の乳母、よろづにおりたちて、御湯殿せさせたてまつる。こたみばかりの御宮仕と思ひつつ、言ひつづけ泣く声ぞいみじきや。上の御前の、御身をさぐらせたまふに、いとひややかにおはします。これこそは例の人に変わらせたまへることはありけれと、殿も上も、「われを捨ててはいづち、いづち」と、泣きまろばせたまふことかぎりなし。御衣など着かへさせたてまつらせたまへり。よろづ出だし立てまつらせたまふほどぞ、げにいみじきや[11]。

これは嬉子の体を入棺する条である。暮には嬉子の亡骸を納めて、車に乗せる予定であるため、母の倫子が御帳の内に入って、泣きながら嬉子を見ている。小式部の乳母は、最後のご奉公だと思いながら、自らの手で嬉子の体を洗浄する。倫子は、嬉子の体に触ってみると、本当に冷たくなっていることがわかった。これにつけ、倫子は自分の娘がすでに生きている人とは違ってしまったこと、つまり死んでしまったことを実感する。その後に、嬉子は着物を着替えさせられて、出棺されることになる。

体が乳母によって丁寧に洗浄されることから、生前と同じように、嬉子は近親者に

10 新編日本古典文学全集（小学館）、『栄花物語』巻第二十六「楚王のゆめ」、五〇七～八頁

11 新編日本古典文学全集（小学館）、『栄花物語』巻第二十六「楚王のゆめ」、五一三頁

大切に扱われていることがわかる。倫子は洗浄された嬉子の体を触って、そこで、触覚によってはじめて、娘の死を信じた。つまり、外観から判断すれば、嬉子の体は生きている人とあまり変わらない状態にあると理解できよう。

ここで、遺体が洗浄されるもう一つの事例を挙げておこう。これは藤原長家の妻の遺体が洗浄されるという事例である。

> かくて十五日になりぬれば、こたみの御歩きの、例のやうにありけれど、御車に物まきなどして、またむつかしうてうせたまへれば、御湯殿などして、やがて児君も同じ物に入れたてまつりて、かき添へて御懐に抱きたるやうにて臥せたてまつるほど、おほかた誰もさかしう見たてまつるべきにあらず、また参りよるひともすくなし[12]。

これは、藤原長家の妻の亡骸が洗浄され、入棺されるという場面である。懐妊中だった長家の妻は、物の怪に悩まされ、その物の怪を退治するためにさまざまな祈祷が行われたが、生まれた男君は死産であった。その後も長家の妻の容態は回復せず、ついに死んでしまった。家人は彼女が穢れたままで亡くなったと思い、お湯を使って彼女の体を洗浄し、その男君と一緒に同じ棺に入れたとある。

以上の事例から、平安貴族には女性が死んだ後、なるべく体の清浄さを維持するために遺体を洗浄するという風習があったことが推測できる[13]。しかし、同じく上流貴族の女性でありながら、光源氏の妻である葵の上の遺体は損壊していく様子が描かれているのである。藤原嬉子は、葵の上と同様に蘇生術が施行されたにもかかわらず、体に異変もなく、しかも、納棺する前にはきれいに整えられた状態であった。また、藤原嬉子も、藤原長家の妻も、共に出産した直後に死んだため、穢れの状態のまま入棺させてはいけないとの配慮から、体が洗浄されていた。葵の上もまた、出産直後の急逝であったのだが、彼女の体はそのまま放置され、洗浄されぬまま入棺されることに

---

12 新編日本古典文学全集（小学館）、『栄花物語』巻第二十七「ころものたま」、二八頁

13 中村義雄『王朝の風俗と文学』塙書房、一九六二年、「葬送」の項によれば、「入棺に先だって沐浴の事が行われる」という。また、山中裕・鈴木一雄編集『平安時代の儀礼と歳事』、至文堂、一九九一年、河添房江執筆「葬送・服喪」の項によれば、「死が確認されると、死者としての扱いをする。必要がある場合には、近親者や僧の手により、まずは沐浴をさせる」という。

なっている。つまり、藤原嬉子、藤原長家の妻、葵の上と、三者いずれも出産を契機として死去しているという点では共通するのであるが、その死後の施術においては全く異なる処置が施されていることに気づかされるのである。すなわち、歴史上の前二者の場合は遺体を洗浄され、生前の姿を維持されているのに対し、物語上の後者の場合のみが遺体を損壊され、生前の姿とは全く異なる状態が現出してくることになっている。いかに、物語に描かれた葵の上の死が、歴史上の女性たちの死とは異なる、特殊な事例であるかがうかがえよう。この葵の上の死の特殊性を解明するには、歴史上の事例を参照するだけでは限界があるということである。では、この特殊性を解明するには、いかなるアプローチが可能であるのか。本稿がそのアプローチの可能性として導入を試みるのが、神話ということになるのであるが、その詳細については後述する。まずは、その論を展開する上での前提として、「なぜ、葵の上の遺体は醜く描かれたのか？」という問題を解決しておきたい。次節では、その問題について、同じく『源氏物語』の女性登場人物であり、光源氏の女君でもある紫の上の死との対比において考えてみることにする。

3. 紫の上の葬送儀礼と「極楽往生」

前節に述べたように、平安時代の上流貴族は女性の遺体の洗浄と完全性を重視している。実は、『源氏物語』の世界においても、葵の上以外の女性の死については美しく描かれているのである。そのうち、特に注目しておきたいのは紫の上の死である。紫の上は、葵の上の死後に初めて光源氏と枕を交わし、その後、光源氏の最愛の女性として生涯を送り、四十三歳の年に死去する。以下に掲げる場面は、その紫の上の死を描いたものである。光源氏は以前より、息子の夕霧が紫の上に接近することを警戒していたのだが、こうして紫の上が亡くなった今、もはや夕霧から紫の上の様子を隠そうという気持ちにもならない。

（夕霧）「あなかま、しばし」としづめ顔にて、御几帳の帷子をもののたまふ紛れに引き上げて見たまへば、ほのぼのと明けゆく光もおぼつかなかれば、大殿油を近くかかげて見たてまつりたまふに、飽かずうつくしげにめでたうきよらに見ゆ

る御顔のあたらしさに、この君のかくのぞきたまふを見る見るも、あながちに隠さんの御心も思されぬなめり。

（御法④五〇八～九頁）

夕霧は、灯火を近づけて紫の上の死に顔に見入る。夕霧の目に映るのは、生前と変わらず美しく、気高く見事に見えるきれいな紫の上の顔である。その様子を傍らでみながら、光源氏は涙が止まらなくなる。夕霧は、自分がずっと憧れていた女性の死に顔を見て、かえって限りなく悲嘆に暮れてしまうのであった。物語はこの場面に続く文脈で、紫の上の髪について筆を費やしている。

御髪のただうちやられたまへるほど、こちたくけうらにて、つゆばかり乱れたるけしきもなう、つやつやとうつくしげなるさまぞ限りなき。灯のいと明かきに、御色はいと白く光るやうにて、とかくうち紛らはすことありし現の御もてなしよりも、言ふかひなきさまに何心なくて臥したまへる御ありさまの、飽かぬところなしと言はんもさらなりや。なのめにだにあらず、たぐひなきを見たてまつるに、死に入る魂のやがてこの御骸にとまらなむと思ほゆるも、わりなきことなりや。

（御法④五〇九～一〇頁）

紫の上の髪は無造作に投げ出されている。これに勝るものは無いと思われるほど、少しのもつれもなく、つやつやと美しい風情が溢れていると描かれている。灯火が明るいため、紫の上の顔の色は白く光るように見えており、無心に臥している現在の様子のほうが、かえって生前よりも素晴らしいのではないかと物語は語る。このような完璧な美しい亡骸について、夕霧は「死に入る魂のやがてこの御骸にとまらなむと思ほゆるも、わりなきことなりや」という感想を抱いている。すなわち、無理な願いとは言え、紫の上の魂がこのままいつまでも綺麗な亡骸にとどまっていてほしいと思わずにはいられない、というのである。これは光源氏の願いでもあろう。しかし、光源氏はそのような願いに反するかのような行動に出る。蘇生術を紫の上に施さず、彼女の遺体がまだ綺麗なうちに、火葬してしまうのである。

十四日に亡せたまひて、これは十五日の暁なりけり。日はいとはなやかにさし上がりて、野辺の露も隠れたる隈なくて、世の中思しつづくるにいとど厭はしくいみじければ、後るとても幾世かは経べき、かかる悲しさの紛れに、昔よりの御本意も遂げてまほしく思ほせど、心弱き後のそしりを思せば、このほどを過ぐさんとしたまふに、胸のせきあぐるぞたへがたかりける。　　（御法④五一一頁）

これは、紫の上の葬送の次第を綴った条である。紫の上は八月十四日に亡くなり、葬送は十五日の暁に行われた。つまり、紫の上の死では、かつて葵の上の死に関わって描かれた招魂儀礼や遺体損壊といったプロセスを踏まず、死から直接、葬送というプロセスに入り、しかもそれを一日のうちに施行することになっているのである。この紫の上の葬送の在り方について、先行研究がどのような解釈を加えてきたかを振り返っておこう。鬼束隆昭氏は、歴史上の人物の葬送の事例を参照した上で、紫の上が即日葬られるということは異例であると述べている[14]。河添房江氏は、紫の上をかぐや姫に喩えて、この迅速な葬送により、「紫の上は生前の美しさを微塵も損なうことなく、天女の昇天のような清らかさのまま煙と化していった」と論じた[15]。塚原明弘氏は、紫の上の葬送儀礼におけるこの現象を「即日葬送」と命名し、極楽往生という思想的背景を考察することによって、この在り方は、光源氏が紫の上の蘇生を自発的に諦め、紫の上の他生への旅立ちを促すための措置であると説く[16]。頼富本宏氏によれば、平安中期頃から極楽往生の思想が流行するようになったとされており[17]、それを踏まえると、塚原氏の説には首肯すべき点が認められる。

果たしてこの『源氏物語』において、塚原氏や頼富氏の説くような極楽往生の思想は実際にうかがえるのであろうか。本稿では試みに、この極楽往生の思想が反映している表現として「後の世」や「蓮」を措定し、その表出してくる状況を調査してみた[18]。ここではそれらのうち、特に光源氏と紫の上に関わって表出している事例を取り上げ

---

14 鬼束隆昭「源氏物語における死・葬送・服喪の表現」（源氏物語探求会編『源氏物語の探求　第七輯』一九八二年八月）
15 河添房江「源氏物語の内なる竹取物語――御法・幻を起点として――」（『源氏物語の喩と王権』一九九二年）
16 塚原明弘「紫の上の死と葬送の表現」（『中古文学』第五十三号）
17 頼富本宏、前掲注 4 論文。
18 「後の世」と「蓮」の用例調査については、巻末の付録を参照。

ておく。

e. 池はいと涼しげにて、蓮の花の咲きわたれるに、葉はいと青やかにて、露きらきらと玉のやうに見えわたるを、（源氏）「かれ見たまへ。おのれ独りも涼しげなるかな」とのたまふに、起き上りて見出だしたまへるもいとめづらしければ、（源氏）かくて見たてまつるこそ夢の心地すれ。いみじく、わが身さへ限りとおぼゆるをりをりのありしはや」と涙を浮けてのたまへば、みづからもあはれに思して、

（紫の上）消えとまるほどやは経べきたまさかに蓮の露のかかるばかりを

（源氏）契りおかむこの世ならでも蓮葉に玉ゐる露の心へだつな

（若菜下④二四五頁）

f. さるは、わが御心にも、しか思しそめたる筋なれば、かくねむごろに思ひたへるついでにもよほされて同じ道にも入りなんと思せど、人たび家を出でたまひなば、仮にもこの世をかへりみんとは思しおきてず、後の世には、同じ蓮の座をも分けんと契りかはしきこえたまひて、頼みをかけたまふ御仲なれど……

（御法④四九四頁）

g. すくよかにも思されず、我ながら、ことのほかにほれぼれしく思し知らるると多かる紛らはしに、女方にぞおはします。仏の御前に人しげからずもてなしてのどやかに行ひたまふ。千年をももろともにと思ししかど、限りある別れぞいと口惜しきわざなりける。今は蓮の露も他事に紛るまじく、後の世をと、ひたみちに思し立つことたゆみなし。されど人間きを憚りたまふなん、あぢきなかりける。

（御法④五一八頁）

eは、若菜下巻における表出例である。仮死状態に陥るほどの重病にあった紫の上が小康を得て、光源氏と一緒に蓮の花を観賞するという場面。光源氏は紫の上の回復を喜び、その様子を見て夢のような心地がすると述べる。光源氏はまた、紫の上が意識を失っていた間、自分までもが死んでしまうかと思う折々のあったことを告げる。そこで、紫の上は「露」を喩えとして、自分の命も露のようなはかないものであるとい

う歌を詠む。それを聞いた光源氏は、この世ばかりではなく、あの世においても、「蓮葉」の露のように紫の上と一蓮託生になろうと言う。

ｆは、御法巻における表出例である。紫の上は、重病を患う中で出家の願望を光源氏に伝えてゆく。しかし、二人が別れることになってしまうその提案を光源氏は受け入れられない。そして、「後の世」では二人で一つの「蓮の座」を分け合おうと約束する。

ｇもまた、御法巻における表出例となる。紫の上に死なれた光源氏は、悲嘆の日々を送っている。今や光源氏は気力を失い、この身を置く俗世に執着も無く、ただ、「後の世」で紫の上と一つの「蓮」に生まれ合わせたいという強い願いだけを抱いている[19]。つまり、極楽浄土は光源氏にとって、後の世における紫の上との一蓮託生の場所[20]として機能しているのである。

女人の極楽浄土への往生は可能か否かという問題については[21]、今は措くとして、紫の上が死んだ直後、光源氏が彼女の蘇生に執着せず、速やかに火葬を行うのは、紫の上を一日でも早くあの世へ送り、「蓮の座」に坐らせるためではないか。ちなみに、紫の上の葬送の現場について、物語は「野辺の露も隠れたる隈なく」（御法④五一一頁）と描いている。この条について新編日本古典文学全集の頭注は、「日射しの中で露のはかなく消え失せる景が、源氏の心象風景でもあるが、それが彼に厭世観を導く」[22]と説く。つまり、紫の上の死は、光源氏がいままで経験した他の死とは格段に違い、彼自身の死なのであるとすら言えるものなのである[23]。光源氏は、紫の上の葬送を即日に行うことによって、紫の上を「後の世」に送り出すと同時に、光源氏自身もこの世を厭い離れ、紫の上と共に「後の世」で一蓮託生となることを実現しようと、そう願っているのではないか。また、「後の世」において、一蓮託生となることを願う以上、自分の慕わしく思う紫の上の姿を生前の通りに維持していてほしいという考慮もあったと思われる。それゆえ、光源氏は積極的に紫の上を「後の世」へ送り出し、なおかつそ

---

19 朝顔②四九六頁・頭注七によれば、「極楽浄土では、夫婦は後から来る伴侶のため蓮花の座の半分をあけて待つ」という。

20 「よしのちの世にたにかの花のなかのやとりにへたてなくおもほせとて、一々池中花尽満花々惣是往生人各留半座乗花葉待我五会讃」。（玉上琢彌編『紫明抄・河海抄』五〇七頁、角川書店）

21 塚原明弘、前掲注 15 論文には、女人往生の可能性と確証を論じた。

22 御法④五一一頁・頭注 21 による。

23 永井和子「紫の上における死の様式」（『源氏物語と老い』笠間書房、一九九五年）

れを速やかに実行するのである。速やかに実行することの理由は、紫の上の身体や美貌を生前そのままに維持し、損壊させたくないという心情による。つまり、紫の上の死に関わって行われる即日葬送には、夫婦の宿縁を「後の世」まで続けたいという光源氏の深い愛情が込められていると考えられるのである。

4. 光源氏の女性に対する「一蓮託生」の願望

実は、紫の上のみに限らず、藤壺中宮や女三の宮に対しても、光源氏は「一蓮託生」の思いを抱いている。本節では、その具体的な有様について、やはり「後の世」や「蓮」の表現を手掛かりに見ていきたい。

ｈ．かの御ためにとりたてて何わざをもしたまはむは、人咎めきこえつべし、内裏にも御心の鬼に思すところやあらむ、と思しつつむほどに、阿弥陀仏を心にかけて念じたてまつりたまふ。おなじ蓮にとこそは、

（源氏）なき人をしたふ心にまかせてもかげ見ぬみつの瀬にやまどはむ

（朝顔②四九六頁）

ｉ．（源氏）「かかる方の御営みをも、もろともにいそがんものとは思ひよらざりしことなり。よし、後の世にだに、かの花の中の宿に隔てなくとを思ほせ」とて、うち泣きたまひぬ。

（源氏）はちす葉をおなじ台と契りおきて露のわかるる今日ぞ悲しき

（鈴虫④三七六頁）

ｈは、藤壺中宮が光源氏の夢枕に立って恨み言を述べることに対して、光源氏の心中思惟を描く条である。藤壺は光源氏の母桐壺更衣に似た容貌を持つため、光源氏から思慕され、やがて二人は密通するに至り、罪の子冷泉帝が誕生するに至る。そして、この秘密を抱いたまま、藤壺は光源氏の永遠の理想の女性として死んだのであった。朝顔巻のある雪の夜、光源氏は紫の上との間で今昔の女性の評を交わした際、藤壺中宮にも言及し、抱いていた思念を述べる。その夜、藤壺は光源氏の夢枕に立ち、光源

氏が自分のことを話題にしたと恨み言を言う。この夢を見た光源氏は哀感をそそられ、藤壺に供養を捧げながら、後の世において藤壺と同じ蓮の台に座りたいと願う。

ｉは、光源氏が出家の道を辿った女三の宮に対する嘆きを語る条である。女三の宮は朱雀院の皇女であり、光源氏の正妻となりながらも柏木と密通し、薫を生む。やがて、この密通事件が光源氏に露見して、女三の宮は出家の道を辿ることになったのである。出家した女三の宮に対して光源氏は、この世（現世）では二人は露のこぼれるように別れて暮らさなければならないが、せめて後の世（来世）では同じ蓮の台の上に生まれ変わり、一緒に暮らそうと発言する。

そもそも、「一蓮託生」や「極楽往生」といった言葉は仏教用語であるため、出家した人はこれらの用語を使ってしかるべき立場にあると言えよう。ちなみに藤壺は、桐壺院の一周忌の直後に出家した（賢木巻）。女三の宮は、柏木との間に儲けた不義の子である薫を出産した直後に、父朱雀院によって得度を受け、出家することになった（柏木巻）。このように、光源氏が藤壺と女三の宮に対して「一蓮託生」の言葉を使うのは、二人の女性がともに出家しているという理由によると考えられよう。こういった事例に対して、前節で見てきた紫の上の事例はどうか。紫の上は、物語を通して出家することはない。彼女は、若菜巻以降、出家の願望を抱くようになり、当初は光源氏にもその旨を告げていくが、ついに許されることはなかった。このような紫の上は、それゆえ出家以外の方法を用いて功徳を積みあげてゆく。次に掲げるのは、紫の上が、女三の宮の持仏開眼供養の準備に協力する条（ｊ）と、法華経を供養する条（ｋ）である。

ｊ夏ごろ、蓮の花の盛りに、入道の姫宮の御持仏どもあらはしたまへる供養せさせたまふ。このたびは、大殿の君の御心ざしにて、御念誦堂の具ども、こまかにととのへさせたまへるを、やがてしつらはせたまふ。幡のさまなど、なつかしう心ことなる唐の錦を選び縫はせたまへり。紫の上ぞ、いそぎせさせたまひける。

（鈴虫④三七三頁）

ｋ年ごろ、私の御願にて書かせたてまつりたまひける法華経千部、急ぎて供養じたまふ。わが御殿と思す二条院にてぞしたまひける。七僧の法服など品々賜す。物

の色、縫目よりはじめて、きよらなること限りなし。おほかた、何ごとも、いといかめしきわざどもをせられたり。　（御法④四九五頁）

ｊは、蓮の花が盛んに咲いている夏の頃、出家した女三の宮の持仏が落成し、その開眼の供養をするという条である。供養に必要な道具は微細にわたって用意されている。それらの中でも、幡の様子は優美で、格別にみごとな舶来の錦で縫われている。これは、紫の上によって用意されたものである。

ｋは、紫の上が自分の発願で書き上げた法華経千部を供養するという条である。法会は自分の邸である二条院で催された。七僧の法服などもそれぞれの身分に応じて与えられた。それらの色合い、仕立て方をはじめとして善美で尽くされ、すべて何もかもが立派な法会として営まれた。

ｊとｋの資料からわかることは、紫の上が極楽往生を望んでいて、積極的に仏教的な功徳を積み上げているということである。つまり、紫の上は出家こそしていないが、仏道修行に励む者という側面を持ち合わせているのだ。このような紫の上像について、塚原明弘氏は、「『死後の往生』のための『逆修供養』」であると説いている[24]。これは、紫の上が「往生への必要条件」を充たすかどうかについて客観的な視点から考察するものである。これに対して本稿では、光源氏の在り方に注目しておきたい。すなわち、紫の上に対して「一蓮託生」の願いを告げていくという光源氏の在り方である（前節参照）。これは、本節で確認してきた通り、女三の宮と藤壺という出家した女性たちに対して「一蓮託生」の願いを告げていくのと同じ在り方にほかならない。

光源氏の人生において重要な女性である藤壺、紫の上、女三の宮。この三人の女性は出家したり、仏教修行に励んだりすることによって、極楽往生を達成しようとしている。そして、この三人いずれに対しても「一蓮託生」の願望を抱いてゆく光源氏。この三人のうち、紫の上の葬送だけは光源氏によって営まれることになる。光源氏は、紫の上の極楽浄土を達成させるために、彼女の葬送を「即日葬送」という迅速な形で施行する。これは、極楽浄土においても、紫の上との夫婦の縁が継続されるに違いないという信仰に基づいた在り方であろう。そのような信仰を持つがゆえに、光源氏は、例えば葵の上のように、招魂儀礼を施行したり、復活を願って遺体をこの世に長々と

[24] 塚原明弘、前掲注 **15** 論文。

放置したりする必要はないと判断したのではあるまいか。ちなみに、葵の上に関しては、出家や、仏道修行に励むといった叙述は物語に語られていない。そして、このように仏教的信仰の文脈に置かれることの無い葵の上は、紫の上の美しい死とは違って、醜い死を物語から付与されることになる。果たして、葵の上が招魂儀礼を施された挙句、ついには醜い死をもって物語に描き出されてくる意味とは何か。以下では、この問題について検討を加えていきたい。

5. 葵の上の葬送儀礼に見られる原型

実は、『源氏物語』で、招魂儀礼が行われるのは葵の上のみである。参考までに、物語における女性の葬送の状況を以下の表によって確認してみよう。

【表　『源氏物語』における女性の葬送一覧】

番号	巻名・頁数	対象者	備考（死体に対する措置など）
1	桐壺・24～25	桐壺更衣	愛宕で火葬
2	夕顔・170～178	夕顔	遺骸を東山に送られ、葬られる
3	葵　・47～48	★葵の上	蘇生の秘方を施し、火葬
4	澪標・314～317	六条御息所	―
5	夕霧・439～441	一条御息所	即日葬送
6	御法・510～511	★紫の上	即日火葬
7	総角・329～330	大君	火葬
8	蜻蛉・208～214	浮舟	遺骸のないまま葬儀が行われる

表に示したように、蘇生儀礼が施されるのは葵の上のみである[25]。つまり、物語はあえて葵の上の死に蘇生儀礼を設定し、そして、その蘇生儀礼によって招致された死体

[25] 但し、林田孝和「源氏物語における死後の描写―ともし火をかかげつくして―」（『源氏物語の発想』桜楓社、一九八〇年」）においては、「灯火を挑げ尽くして起きおはします」（桐壺巻①三六頁）の灯火は、亡き桐壺更衣の霊を呼ぶ火、つまり、招魂の迎え火であると説いている。

の崩れる場面を提示する。では、葵の上の醜い死を生み出した物語の論理とは何か。ここで参考になるのが、『古事記』における伊邪那美命の死である。

> 是に、其の妹伊耶那美命を相見むと欲ひて、黄泉国に追ひ往きき。爾くして、殿より戸を縢ぢて出で向へし時に、伊耶那岐命の語りて詔ひしく、「愛しき我がなに妹の命、吾と汝と作れる国、未だ作り竟らず。故、還るべし」とのりたまひき。爾くして、伊耶那岐命の答へて白さく、「悔しきかも、速く来ねば、吾は黄泉戸喫を為つ。然れども、愛しき我がなせの命の入り来る坐せる事、匍匐恐きが故に、還らむと欲ふ。」且く黄泉神と相論はむ。我を視ること莫れ」と、如此白して、其の殿の内に還り入る間、甚久しくして、待つこと難し。故、左の御みづらに刺せる湯津々間櫛の男柱を一箇取り闕きて、一つ火を燭して入り見し時に、うじたかれころろきて、頭には大雷居るり、胸には火雷居り、腹には黒雷居り、陰には析居り、左の手には若雷居り、右の手には土雷居り、左の足には鳴雷居り、右の足には伏雷居り、并せて八くさの雷の神、成り居りき[26]。

夫である伊耶那岐命は、出産で死んだ妻の伊耶那美命に会いたいと思い、黄泉国に赴く。伊耶那岐は、出迎えた伊耶那美に対し、元の世界へ帰ってほしいと語り掛けてゆく。しかし、伊耶那美は、すでに黄泉国のかまどで調理したものを食べてしまったので、帰ることはできないと一度は断ったものの、夫への愛情から翻意し、帰還に同意する。そして、帰還するにあたり、黄泉神と相談しなければならないが、その間は自分の姿を見ないようにと、伊耶那美は伊耶那岐と約束を交わした。相談に長く時間がかかっているため、伊耶那岐は待ちくたびれてしまい、伊耶那美のいる宮殿の中をこっそり覗いた。そうすると、目に入ったのはすっかり腐敗し、蛆にたかられた伊邪那美の身体であった。しかも、頭には多雷がおり、胸には火雷がおり、腹には黒雷がおり、女陰には析雷がおり、左手には若い雷がおり、右手には土雷がおり、左足には鳴雷がおり、右足には伏雷がおるという状態で、恐ろしく醜い姿に変わっていた。

ここで注意しておきたいのは、伊耶那美が死んだ後、伊耶那岐は黄泉国まで追って

---

26 新編日本古典文学全集（小学館）『古事記』上巻・伊耶那岐命と伊耶那美命・四五～九頁

いき、「愛しき我がなに妹の命、吾と汝と作れる国、未だ作り竟らず。故、還るべし」と発言している点である。本稿ではこの行動を、招魂儀礼の一つである「魂呼ばひ」に相当するものとして捉えておきたい。

中国には、死者を呼び返すという風習が古くから存在している。『礼記』や『周礼』とともに「三礼」と呼ばれる『儀礼』には、「士葬礼」の招魂作法について次のように記されている。招魂を行う復者は、「屋根の棟まで昇ったら、北方に向いて（魂を幽暗の方角に求める）そこで声を長く引いて、『あっ、某（死者の名、婦人ならば字。）復れ。』と呼ぶ。これを三度繰り返してから、復衣を簷の前に下す」と[27]。この記述によれば、招魂の作法において重視されているのは、死者の名前を呼ぶことであることがわかる。『日本書紀』にも、招魂の呪術に関すると考えられる場面が記されている。すなわち、大鷦鷯尊が、死んだ弟の太子の魂を呼び返すという条である。

> 太子の曰はく、「我、兄王の志を奪ふべからざることを知れり。豈久しく生きて、天下を煩さむや」とのたまひて、乃ち自ら死りたまひぬ。時に大鷦鷯尊、太子、薨りたまひぬと聞して、驚きて、難波より馳せて、菟道宮に到ります。爰に太子、薨りまして三日に経りぬ。時には大鷦鷯尊、摽擗ち叫び哭きたまひて、所如知らず。乃ち髪を解き屍に跨りて、三たび呼びて曰はく、「我が弟の皇子」とのたまふ。乃ち應時にして活でたまひぬ。[28]

太子が薨去したという報せを聞いた大鷦鷯尊は驚いて難波から駆けつけ、泣き叫びながら、自分の髪を解いて太子の遺骸に跨り、「我が弟の皇子よ」と呼んだ。すると、太子は即座に生き返り、自分で起き上がった。太子が生き返ったのは、大鷦鷯尊がその名を呼んだからであると解されている[29]。

以上のような招魂の作法を踏まえて伊耶那岐の行動を見直してみれば、伊耶那岐は伊耶那美に対して、「愛しき我がなに妹の命、吾と汝と作れる国、未だ作り竟らず。故、還るべし」と発言しており、この名前を呼ぶ作法こそは「魂呼ばひ」という招魂儀礼

---

27 彭林『儀礼』四〇三頁（中華書局、二〇一二年）、藤野岩友『増補巫系文学論』二一一～二頁（大学書房、一九六九年）
28 小学館新編日本古典文学全集『日本書紀』巻十一・仁徳天皇　即位前紀、二七頁
29 林田孝和、前掲注５論文。

にほかならないと言えよう。本稿の第２節において、藤原嬉子の招魂儀礼を紹介したが、そこでもやはり、「主計助守道、おはします対の上に、御衣を持て上りて、よろづを申しつづけ招きたてまつる」と、死者の名前を呼ぶ「魂呼ばひ」が行われていたことを想起しておきたい。また、ここで『源氏物語』に立ち戻れば、葵の上の招魂儀礼について、本文には「いかめしきことどもを、生きや返りたまふとさまざまに残ることなく」（葵②四七頁）とあったことも想起されてくる。すなわち、葵の上に対して招魂の呪術がすべて残すところなく施されたというのである。そういった招魂の呪術の中には嬉子に対して行われた「魂呼ばひ」も含まれていたであろう。伊耶那美の死において観察された「魂呼ばひ」という招魂儀礼は、神話・歴史書・物語といった様々な文献の中に継承され、その継承の中に葵の上の死もまた、含まれてくると言えよう。

更にここで注目したいのが、葵の上の死が、出産の直後に設定されているという点である。実は、先に見てきた伊耶那美の死もまた、やはり出産の直後に設定されているという構造的共通性を指摘することができるのである。『古事記』によれば、伊耶那美の死因は、「この子を生みしに因りて、みほとを炙かえて病み伏して在り」[30]とあり、つまり、伊耶那美は火之迦具土神を出産したため、女陰を焼かれて病み伏し、ついに死んでしまったというのである。葵の上と伊耶那美という二人の女性は、死因を同じくしていると言えよう。出産を契機として死去し、招魂儀礼を施術されるという事例については、第２節において、藤原嬉子、藤原長家の妻の場合を見てきたところであるが、その歴史上の人物の二つの事例はいずれも、生前の姿を維持するために遺体が清浄されるというプロセスを持っている点で、葵の上の場合との違いを見せていた。招魂儀礼の施術後に、生前の姿とはまったく異なる醜い姿へと変貌してしまうという葵の上の事例の先蹤として捉えるべきは、その歴史上の二つの事例ではなく、この神話に記された伊耶那美の事例なのだと言えよう。

ここで、死後に醜く変貌した姿を夫に見られた伊邪那美の、その後の運命はどのようなものとなるのかについて確認しておきたい。それは、葵の上の死を考える上で示唆を与えてくれるものとなるはずである。

最も後に、其の妹伊耶那美命、身自ら追ひ来つ。爾くして、千引の石を其の黄泉

30 新編日本古典文学全集（小学館）『古事記』上巻・伊耶那岐命と伊耶那美命、四一頁

ひら坂に引き塞ぎ、其の石を中に置き、各対き立ちて、事戸を度す時に、伊耶那美命の言ひしく、「愛しき我がなせの命、如此為ば、汝が国の人草を、一日千頭絞り殺さむ」といひき。爾くして、伊耶那岐命の詔ひしく、「愛しき我がなに妹の命、汝然為ば、吾一日に千五百の産屋を立てむ」とのりたまひき。是を以て、一日に必ず千人死に、一日に必ず千五百人生るるぞ。故、其の伊耶那美神命を号けて黄泉津大神と謂ふ。亦云はく、其の追ひしきしを以て、道敷大神と号く。亦、其の黄泉坂を塞げる石は、道反之大神と号く。亦、塞がり坐す黄泉戸大神と謂ふ。故、其の所謂る黄泉ひら坂は、今、出雲国の伊賦夜坂と謂ふ[31]。

伊耶那岐は妻の死体を恐れ、彼女を黄泉国から救い出すのを諦め、元の世界へ逃げ帰ろうとする。夫の逃げる姿に怒った伊耶那美は、直ちに黄泉国の軍団を遣わして、そのあとを追いかけさせた。伊耶那岐はその軍団と戦いながら、逃げ延びて行く。伊耶那美は更に、大勢の黄泉国の軍勢を添えて伊耶那岐を追わせ、最後には、自身までもが追って行った。やがて、伊耶那岐は黄泉国と元の世界との境界、すなわち「黄泉ひら坂」のふもとにたどり着き、大岩を「黄泉ひら坂」の真ん中に置いて道を塞いだ。その岩が、伊耶那美と伊耶那岐とを隔てることになった。

このように、伊耶那岐は黄泉国を訪問し、死んだ伊耶那美を生者の世界に取り戻そうとする。対面した時、伊耶那岐は「愛しい我が妻の命よ」という気持ちを表出した。同様の気持ちは伊耶那美が死んだ直後にも見られ、伊耶那岐の「愛しき我がなに妹の命」という「魂呼ばひ」の作法によって表出されてもいた。伊耶那岐のイメージの中では、死んだ妻は生前と変わらないような美しい姿をしていたのであろう。しかし、黄泉国での生活を送り始めていた伊耶那美は、すでに変貌し、醜い姿になってしまったのである。伊耶那美の醜態を見た後、伊耶那岐は伊耶那美を元の世界に連れ帰ることを諦める。二人の訣別は戦いへと発展し、その戦いは伊耶那岐が「黄泉ひら坂」に大岩を置くことで終焉を迎える。これにより、伊耶那美は永遠に地下の世界である黄泉の国に住むこととなり、その世界に統合されることになる。「黄泉ひら坂」は、いわば生者の世界と死者の世界の境界であり、その境界を画定する指標として大岩が用意されたと理解できよう。ちなみにこの神話は、歴史書である『日本書紀』にも記され

31 新編日本古典文学全集（小学館）『古事記』上巻・伊耶那岐命と伊邪那美命、四九頁

ており、それも顧みておくことにする。

> 然して後に伊弉諾尊、伊弉冉尊を追ひ、黄泉に入りて、及きて共に語りたまふ。時に伊弉冉尊の曰はく、「吾が夫君の尊、何ぞ来ますことの晩きや。吾已に飡泉之竈しつ。然りと雖も吾寝息まむ。請ふ、な視たまひそ」とのたまふ。伊弉諾尊聴きたまはず、陰に湯津爪櫛を取り、その雄柱を牽き折きて秉炬として、見せば、膿沸き虫流れたり。今し世人夜一片之火を忌み、又夜擲櫛を忌むは、此其の縁なり。時に伊弉諾尊大きに驚きて曰はく、「吾意はずも、不須也凶目き汚穢き国に到にけり」とのたまひ、乃ち急く走げ廻帰りたまふ。時に伊弉冉尊恨みて曰はく、「何ぞ要りし言を用ゐず、吾に恥辱みせたまひつる」とのたまひ、乃ち泉津醜女八人を遣し、追ひて留めまつる。故、伊弉諾尊、剣を抜き背に揮きつつ逃げたまふ。因りて黒鬘を投げたまふ。此即ち蒲陶に化成る。醜女見て採瞰む。瞰み了ふれば更追ふ。伊弉諾尊、また湯津爪櫛を投げたまふ。此即ち筍に化成る。醜女亦以ちて抜き瞰む。瞰み了ふれば更追ふ。後に則ち伊弉冉尊も自ら来り追ひたまふ。是の時に伊弉諾尊、已に泉津平坂に到ります。一に云はく、伊弉諾尊乃ち大樹に向ひゆまりしたまふ。此即ち巨川に化成る。泉津日狭女其の水を渡らむとする間に、伊弉諾尊已に泉津平坂に至りたまふといふ。故、便ち千人所引の磐石を以ちて、其の坂路に塞へ、伊弉冉尊と相向きて立ち、遂に絶妻之誓を建したまふ[32]。

『日本書紀』では、伊耶那岐命は「伊弉諾尊」、伊邪那美命は「伊弉冉尊」と表記されることになる。細部には多少の違いがあるが、伊弉冉尊が出産で死去し、黄泉の国の住人となり、夫の伊弉諾尊が迎えに行き、妻の変貌した姿を見て逃げ帰り、その途中で大岩を用いて黄泉の国との間に境界を画定し、妻を黄泉の国に閉鎖するまでの経緯は、『古事記』に記されている話と殆ど同じである。但し、『日本書記』では最後に、「遂に絶妻之誓を建したまふ」という一言が付け加えられている。つまり、伊弉冉（＝伊邪那美）は伊弉諾（＝伊耶那岐）によって黄泉の国に封印された後に、更には、離縁の誓言を言い渡されたことになる[33]。

---

32 新編日本古典文学全集（小学館）『日本書紀』巻第一・神代上〔第五段〕、四五～七頁
33 新編全集の頭注五には、「絶妻之誓」について「離縁の意」とある（四六頁）。

さて、ここで『古事記』や『日本書紀』に見られた伊邪那美の死ぬ前後のプロセスを整理してみたい。

①出産

②死

③招魂儀礼

④遺体損壊

⑤境界設定

この①から⑤までのプロセスのうち、④の遺体損壊と、⑤の境界設定は、この神話に固有のプロセスとも言える。それを踏まえて、再度、『源氏物語』に描かれた葵の上の死を想起してみよう。そこでは、①出産、②死、③招魂儀礼、④遺体損壊といったプロセスが描かれていたことを確認することができる。これらは、伊邪那美の死における①から④までのプロセスと一致している。『源氏物語』が、葵の上の死を描くにあたって、あえて④の遺体損壊というプロセスを組み込んでいることの説明として、この神話のプロセスは有効な示唆を与えてくれると言えよう。そういった仮説に基づいたとき、神話のプロセスの⑤として置かれている境界設定についても、それを葵の上の死を描く文脈の中から見出すことができるのではないか。

そもそも光源氏と葵の上との結婚は、左大臣と桐壺帝の政治的思惑と深く関わるものであるため[34]、光源氏にとって葵の上は、自らの恋愛衝動が求める女性とは言えない。実際に、光源氏は葵の上と対面するとき、葵の上を容貌、姿勢などの「外面的」な点については高く評価するが、一方で「内面的」な点に対しては関心を持たず、何ら言及していないという指摘がある[35]。そればかりではなく、二人の間では、和歌のやり取りもしておらず、情愛の薄い結婚生活を送っていたと言える[36]。葵の上の生前、光源氏が左大臣邸を訪問するのも、彼女の北の方としての立場を崩すわけにはいかないとい

---

34 葵の上を政治性という視点から考察する論としては、室伏信助「葵の上」(『国文学』学燈社、一九九一年・五)、吉井美祢子「葵の上の「政治性」とその意義」(森一郎編著『源氏物語作中人物論集―付・源氏物語作中人物論・主要論文目録―』勉強社、一九九三年)、吉海直人「左大臣の暗躍――『源氏物語』の再検討」(『日本文学』一九九六年第45巻第9号)、和田由紀子「葵上の登場――『源氏物語』構造論の一環として――」(『成蹊国文』第三十五号、二〇〇二年）など。

35 猿渡学「「とはぬはつらきものにやあらむ」―葵上試論―」(『文芸研究』第一三五集、一九九四年一月)

36 葵の上が和歌を一首も詠まないため、「歌詠まぬ女性」と称される。森下幸男「葵の上について―その人物像と運命」(『日本文学研究』一九五七年・五)。

う配慮に基づいているからである。それゆえ、葵の上の死後、光源氏は自然と葵の上が暮らしていた左大臣邸を去っていくことになる。葵の上の四十九日の法会を終え、左大臣邸を退出し、自邸である二条院へ帰ってきた際の光源氏の目に映ったのは、左大臣邸とは異なり、一転して明るい舞台であった。以下に掲げるのは、その時の二条院の風景である。

> 二条院には、方々払ひ磨きて、男、女待ちきこえたり。上臈どもみな参上りて、我も我もと装束き化粧じたるを見るにつけても、かのゐ並み屈じたりつる気色どもぞあはれに思ひ出でられたまふ。御装束奉りかへて西の対に渡りたまへり。更衣の御しつらひ曇りなくあざやかに見えて、よき若人、童べのなり、姿めやすくととのへて、少納言がもてなし心もとなきところなう心にくしと見たまふ。
>
> （葵②六八頁）

二条院では、どの部屋もが拭き清められ、女房たちが互いに競って着飾っていた。紫の上の居住する西の対の部屋は鮮やかに飾り付けられ、女童の姿も見苦しくないように整えられている。このように彩られた自邸を見て、光源氏は、暗い雰囲気に沈んでいた左大臣邸の様子を思い出す。あるいは光源氏の目には、眼前の美しい女房や女童とは対照的な葵の上の損壊した遺体が映っていたかもしれない。しかし、今や光源氏はすでにその損壊した遺体の記憶と共にある左大臣邸から退出し、二条院へと帰って来ているのである。ここは、光源氏の本拠地であり、かれの人生の基点でもある[37]。つまり、光源氏が今回二条院へ帰ってきたことは、彼が自分の本来の世界へと回帰したことを意味するのである。二条院へ回帰した光源氏は、間もなく紫の上と新枕を交すことになる。この新枕により、光源氏と紫の上は夫婦の関係へと移行する。それはまた、葵の上との夫婦関係の終焉をも意味しよう。ここにおいて、光源氏と葵の上との夫婦の縁が完全に断ち切られることになる。神話における⑤の境界設定が、『日本書紀』では、「離縁」の契機として機能していたことをここで想起したい。葵の上の死の描写が神話的プロセスを踏襲していることの意味をここに見出しておくこととする。

---

37 福田将士「源氏物語の〈死〉の儀礼―葵上＝紫上の図式―」（『国際文化研究紀要　第4号』一九九八年）

結論

「絵に描きたる姫君」（若紫三〇〇頁）として造型されている葵の上は、死んだ後、招魂儀礼が行われることになる。しかし、復活再生は成就せず、そのまま葵の上の遺体が損壊していく様子を物語は提示していく。それは物語内や歴史文献などに記された他の女性の死を顧みたとき、かなり特殊な事例であると考えられる。王朝貴族の葬送儀礼においては、遺体の浄化というプロセスが設置されており、つまり、遺体の完全性と清浄性が重視されているのである。それゆえ、葵の上の死を考察するにあたって、歴史上の事例は参考とするうえで限界がある。また、物語が、葵の上の死と対照的に描き出すのは紫の上の死である。紫の上が美しい死を付与されるのは、彼女を極楽浄土へ送り出し、「一蓮託生」を願う光源氏の意図に基づいているからである。光源氏の最愛の女性の葬送には、彼の深い愛情が組み込まれていると読み取れるのに対して、正妻である葵の上の葬送には、招魂儀礼によって招致されてしまう醜い死があり、そこには紫の上の死とは対照的な意味が読み取れると考えられる。この、葵の上における醜い死の意味を考察するにあたって、本稿で参考としたのが、『古事記』に記された伊耶那美命の死である。

伊耶那美は、新しい国を作る使命のもとに伊耶那岐と結婚するが、やがて出産により死んでしまう。その際、夫によって「魂呼ばひ」という蘇生儀礼が施されるが、自分の醜い姿を夫に見られたことで、結局は夫に逃げられ、黄泉の国に封印されることになる。物語の描く葵の上の死は、この伊耶那美の死と同じ構造を持つと考えられる。すなわち、出産を契機として死去してしまった葵の上は、伊耶那美と同じように蘇生儀礼が施され、しかしその甲斐も無く、遺体は損壊していく。そして、葵の上の死後、光源氏は辛い記憶の残る左大臣邸を去り、自分の本拠地である二条院へと帰還し、紫の上との結婚という運びとなる。この結婚をもって、葵の上と光源氏の世界から完全に離脱することになる。この一連のプロセスは、伊耶那岐が元の世界へと帰還する過程で「黄泉ひら坂」に大岩を置き、境界を画定することで伊耶那美を黄泉の国に封印し、「離縁」を誓言するというプロセスと同じ構造にあると言えよう。葬送儀礼に醜い死が挿話として組み込まれていることの意味は生者と死者の間に境界を画定することにあると考えられよう。つまり、醜い姿はもはや当人が別の世界の住人になったこと

を象徴するものとして機能している。一方、その醜い姿を見たことは、生者が死者に元の世界に戻ってこないでほしいという心境を表す契機であると言えよう。

終章

１．人生儀礼の構造に着目する意義

人生儀礼は、人が誕生してから死ぬまでに経験する通過儀礼として、世界中の諸民族に重視されてきた。しかし、時代の変遷に伴い、人生儀礼そのものの由来が忘れられ、あるいは、その本来的な意味が失われてしまったのである。それゆえ、人生儀礼は、ただ形骸化した文化的様式として行われている可能性があると思われる。そう考える時、平安貴族によって挙行される人生儀礼にも、そういった可能性が存在していたと考えられる。

平安貴族の人生儀礼の実相を知るためには、平安期の史実を記録する歴史資料を参照するほかない。無論、『源氏物語』に描かれている諸儀礼の中にも、儀礼の様子が忠実に記録されているものがある。

例えば物語には、光源氏・冷泉・夕霧・今上帝・匂宮・薫という、六人の元服が描かれている。夕霧以外の人物はみな、元服を契機として結婚したり、官職を得たりするなど、社会に出て、一定の位置を得ることになっている。物語に描かれたこれらの元服の様相は、ある程度忠実に当時の貴族社会の実態を反映したものとなっていよう。しかし、歴史資料といえども、そこから人生儀礼の本来的な意味が読み取れる保証はないのである。では、成人儀礼の持つ本来的な意味はどこから求められるのか。それは、本研究が取り上げた民俗学や文化人類学の資料である。

民俗学によって考察された研究成果には、生活や風俗そのものの由来、あるいは、始原的な姿が内包されていると予測されるのである。そして、文化人類学の成果からは、各民族で行われている人生儀礼の本質を見出すことができる。つまり、民俗学は時代や時間を超越したところで人生儀礼の持つ本来的な構造や意味を探求することができるのに対して、文化人類学は、地理や空間を超越したところでその有効性が発揮されるのである。

こういった展望のもとに本研究は進められてきた。その立場の特徴は、儀礼の持つ本来的な構造や意味を探求するにあたって、日本の平安時代の、あるいはそれに近い時代の文献資料に縛られるのではなく、広く東アジア・西欧・その他諸地域の文化全般に目を配り、民俗学や文化人類学などの成果を参照するところにある。そして、民俗学や文化人類学によって報告された個々の事例から帰納されてくる構造が、実際に

物語の文脈にどのようにして組み込まれているのかを考察してきた。更にまた、儀礼の持つ本来的な意味や構造を踏まえたうえで、儀礼を契機として作中人物たちがいかなる変革を遂げるのかについて考察を展開した。

2. 表現によって構造を見出す可能性

前節では、民俗学や文化人類学によって報告された事例から人生儀礼の構造が帰納されることを述べた。これらの構造がどのようにして物語の文脈に組み込まれているのかを考えるにあたって、本研究が注目したのは人生儀礼の場面を描く物語の表現である。そういった表現を通して、物語に描かれている人生儀礼の構造が浮かび上がってくるのである。つまり、表現こそが本研究の考察対象となる人生儀礼の構造を解く鍵となる。表現において、物語が描いている理想的な人生儀礼と現実世界で行われている人生儀礼との違いは提示されているのである。以下に、本研究が表現によって個々の人生儀礼の構造を見出したプロセスを確認しておこう。

第一章「『源氏物語』における夕霧の成人儀礼―籠りの時空としての二条東院―」では、夕霧の大学寮生活が「籠る」という表現によって語られてゆく点に注目した。「籠る」という語には、隔離された時空に一定期間滞留し、聖なる力を獲得するという発想が認められる。これは成人儀礼に通じるものでもある。本研究では、夕霧の元服と大学寮入学という一連の物語展開の中に、諸文化に観察される成人儀礼の本来的な構造が組み込まれていることを明らかにした。

第二章「『源氏物語』における明石姫君の生誕・生育・成人儀礼―裳着による転身と越境―」では、「口惜し」と「裳」という二つの表現に注目した。まず注目したのは、明石姫君の誕生から袴着に至る物語の文脈において、姫君に関係して「口惜し」という表現が頻出する点である。光源氏によって領導される姫君の人生儀礼とは、姫君の身に存在する「口惜し」き要素を段階的に取り除く営みとしてあると捉えた。次に注目したのは、姫君の「裳着」という女子の成人儀礼である。これを考察するにあたって参照したのは、日本の神話である『古事記』に記された倭建命の、「裳」を着用することによる転身の物語である。

第三章「『源氏物語』における女三の宮の結婚儀礼―媒介者としての乳母―」では、

女三の宮の結婚に関わる一連の叙述において、「さるべき人」という表現が頻出する点に注目した。本研究では、この表現について、結婚儀礼の構造という観点から論じた。なかでも、その儀礼的構造上の重要なプロセスとなる婿選びに注目し、そのプロセスに関与してくる女三の宮の乳母に焦点を絞って考察を展開した。本稿では、乳母という媒介者の存在について、その淵源を中国古代における媒神の神話から求めた。

第四章「『源氏物語』における光源氏の祝賀儀礼―儀礼の場による権力の移譲―」では、玉鬘が主催する光源氏の四十の賀宴に登場してくる鬚黒大将を表現する「うけばる」姿に注目した。諸民族の王権交代に関する伝承の構造として〈転倒儀礼〉が認められることを踏まえ、「うけばる」という表現を手掛かりとして、それと同様の構造を光源氏の祝賀儀礼に見出した。

第五章「『源氏物語』における葵の上の葬送儀礼―呪術による境界の設定―」では、葵の上の死が語られる文脈において、遺体の損壊を表現する「損はれたまふ」という表現に注目した。葵の上の醜い死の意味を考察するにあたって、本研究で参考としたのは、記紀神話に記された伊耶那岐命の「黄泉国訪問譚」であった。

３．『源氏物語』の人物造形における人生儀礼の方法

物語の登場人物たちが人生儀礼を経験することの意味を考えるにあたって、本研究が採用したのは、民俗学や文化人類学の方法である。具体的には、儀礼の持つ本来的な構造や象徴的な意味を緒文献に見られる事例から帰納的に導き出し、そういった構造や意味を補助線としつつ、物語の文脈を再検討するという方法となる。そして、人生儀礼が登場人物にとっていかなる契機として機能しているかについて考察を展開してきた。以下に、その考察の結果を改めて確認しておきたい。

第一章では、光源氏の息子である夕霧の成人儀礼（元服）を考察した。夕霧は、元服直後に大学寮へ入学するという進路を光源氏から与えられる。注目すべきは、夕霧の大学寮生活が「籠る」という表現によって語られてゆく点である。本稿では、このような夕霧の元服と大学寮入学という一連の物語展開の中に、成人儀礼の本来的な構造が組み込まれていることを明らかにした。成人儀礼を経験した夕霧は、父光源氏や母方といった血縁者集団から分離されることになり、「師」という血縁外の年長者から

「才」という能力を授与される。加えて、この成人儀礼は夕霧にとって、「まめ」という表現と結びつけられてゆく契機ともなっている。この「才」と「まめ」は相乗的に作用しつつ夕霧の個性となり、それを軸として夕霧の人生は自立的に展開するのである。

第二章では、光源氏の娘である明石姫君の人生儀礼の諸相を考察した。本稿でまず注目したのは、明石姫君の誕生から袴着に至る物語の文脈において、姫君に関係して「口惜し」という表現が頻出する点である。この点を端緒として考察した結果、光源氏によって領導される姫君の人生儀礼とは、姫君の身に存在する「口惜し」き要素を段階的に取り除く営みとしてあるのではないかという見解を提示するに至った。また、本稿では姫君の裳着という儀礼についても取り上げ、特に、裳着において重要な役割を果たす腰結役に注目した。姫君の腰結役を務めるのは秋好中宮であり、この秋好中宮はかつて、伊勢の神に仕える斎宮でもあった。こういった物語の文脈を、本稿では、神話的構造と比較しつつ検討した。その結果、明石姫君は腰結役の秋好中宮から伊勢の神の力を借り受けることで女御へと転身し、宮中への入内という越境を果たすことになるという論理を導き出すことになった。そして、このような論理によって入内を果たした明石姫君は、その延長線上に、秋好と同じく中宮という境地が予定されることにもなるという見解を得るに至った。

第三章では、女三の宮の結婚に関わる一連の叙述を儀礼の構造という観点から論じた。なかでも、その儀礼的構造上の重要なプロセスとなる婿選びに注目し、そのプロセスに関与してくる女三の宮の乳母に焦点を絞って考察を展開した。女三の宮の〈皇女〉という血統に注目してみると、女三の宮の結婚に乳母という媒介者が関与することの意味は、より広範な視点から把握することが可能となる。皇女は神聖な身であり、結婚もその神聖性を損なうものであってはならない。降嫁（＝光源氏との結婚）を選択した女三の宮の神聖性を維持するために、物語は乳母という媒介者を設定していくのではないか。本稿では、媒介者の淵源を探り出すことによって、乳母が女三の宮の結婚の正当性を保証する一方、女三の宮の皇女としての神聖性を保証する役割をも果たしていると論じた。

第四章では、光源氏の長寿を祝う祝賀儀礼を考察した。諸民族の王権交代に関する伝承の構造として〈転倒儀礼〉が認められることを踏まえ、それと同様の構造を光源

氏の祝賀儀礼に見出した。本稿では、「うけばる」や「下形」という表現を手掛りにし、祝賀儀礼の場が、光源氏の引退を促し、更には次代の権力候補者である鬚黒大将の存在が増大化してくる契機となっていることを論じた。

第五章では、光源氏の正妻である葵の上の葬送儀礼を考察した。物語は葵の上の死を語る文脈において、招魂、遺体損壊、葬送、追悼といったプロセスを描出してゆく。本稿では、その中の遺体損壊に注目し、そこに含まれている意味について検討した。検討するにあたり、記紀神話に見られる「黄泉国訪問譚」を参照し、葬送儀礼において醜い死というモチーフが組み込まれていることの意味を、生者と死者の間に境界を画定することにあると論じた。

以上に見てきたように、物語に描かれている人生儀礼とは、単に平安貴族社会の実相を活写したものとしてあるわけではなく、登場人物たちの造形的変革を促し、実現していくための契機として機能していることが明らかとなった。

なお、今後の展望としては、一つには、本研究で扱えなかった人物の人生儀礼に関する考察が残されており、もう一つには、人生儀礼以外の諸儀礼にも本研究で試みてきたような構造や意味を見出すことの可能性について検証し、そういった儀礼が登場人物にとっていかなる契機として機能しているのかを探究する余地が残されていると考えている。このような展望を最後に呈示することで、本研究の綴じ目としたい。

第一章　付録資料　(1)

『源氏物語』における「籠る」の用例調査

番号	巻名　・頁数	人物	時空	特別意味
1	桐壺　・024	桐壺帝	部屋	
2	桐壺　・057	ある箱入娘	部屋	
3	帚木　・058	左馬頭、藤式部丞		忌み籠もる
4	帚木　・091	光源氏	宮中	
5	夕顔　・175	光源氏	部屋	
6	若紫　・201	北山の僧都	北山	山籠る
7	若紫　・203	明石の入道	明石の浦	
8	若紫　・206	雀の子	伏籠	
9	若紫　・210	北山の僧都	北山の寺	山籠る
10	若紫　・211	北山の僧都	北山の寺	山籠る
11	若紫　・212	尼君	北山	山籠る
12	若紫　・232	光源氏	邸	
13	紅葉賀・314	上達部	部屋	
14	葵　　・054	光源氏	左大臣邸	忌み籠もる
15	賢木　・100	光源氏	邸	
16	賢木　・108			塗籠
17	賢木　・113	光源氏	邸	
18	賢木　・113	光源氏	邸	
19	賢木　・116	律師		山籠る
20	賢木　・138	光源氏	邸	
21	賢木　・138	左大臣	家	
22	賢木　・146	光源氏		口籠る
23	須磨　・164	左大臣	家	
24	明石　・248	明石の上	明石の浦	
25	澪標　・283	左大臣	家	
26	薄雲　・442	太政大臣（左大臣）	家	
27	薄雲　・449	僧都	山	山籠る
28	薄雲　・456	光源氏		山籠る
29	薄雲　・461	光源氏	山寺	
30	薄雲　・463	光源氏		思い秘め
31	少女　・027	夕霧	二条東院	
32	少女　・027	夕霧	二条東院	
33	少女　・034	明石の君	大堰	
34	少女　・037	夕霧	二条東院	

35	少女　・047	夕霧	二条東院	
36	少女　・067	夕霧	二条東院	
37	玉鬘　・112	玉鬘一行、右近	お寺	
38	玉鬘　・119	光源氏		寝る
39	玉鬘　・125	光源氏		思い秘め
40	胡蝶　・169			春光を称える
41	常夏　・230			含める
42	常夏　・241	近江の君	家	
43	篝火　・255	近江の君	家	
44	野分　・268	夕霧		忌み籠る
45	行幸　・295	玉鬘	光源氏の家	
46	行幸　・297	光源氏	家	
47	藤袴　・333	夕霧		思い秘め
48	真木柱・349	弁（玉鬘の女房）	部屋	
49	真木柱・352	鬚黒	玉鬘の部屋	
50	真木柱・369	鬚黒	玉鬘の部屋	
51	梅枝　・418	光源氏	家	
52	若菜上・024	光源氏	六条院	
53	若菜上・045	朱雀院	山	山籠る
54	若菜上・112	明石の入道	山	山籠る
55	若菜下・165	光源氏	家	
56	若菜下・210	明石の君		思い秘め
57	若菜下・224	柏木		思い秘め
58	若菜下・276	柏木	家	
59	柏木　・293	修験者		山籠る
60	柏木　・329	夕霧		柏木死後、神事の多かった二月に一条院を訪問しなかった理由
61	横笛　・353			このお琴にも、その（柏木）名残がこもっておりますことでしょう
62	夕霧　・443			忌み籠もる
63	夕霧　・457	夕霧		心秘め
64	御法　・508	僧		忌み籠もる
65	御法　・512	夕霧		忌み籠もる
66	橋姫　・127	阿闍梨		山籠る
67	橋姫　・137	八の宮		山籠る
68	橋姫　・166	薫		心秘め
69	椎本　・192	八の宮の親近者		忌み籠もる

70	椎本　・204	八の宮		山籠る
71	総角　・309	匂宮	宮中	
72	総角　・324	薫	宇治	
73	総角　・330	大宮の親近者		忌み籠もる
74	総角　・331	薫	宇治	
75	宿木　・339	中の宮	宇治	
76	宿木　・438	匂宮	中の宮	
77	宿木　・468	匂宮	二条院	思い秘め
78	宿木　・469	中の宮	宇治	
79	宿木　・472	匂宮	二条院	
80	浮舟　・135	匂宮	浮舟の所	
81	浮舟　・164	浮舟	山	
82	蜻蛉　・211	浮舟の親近者		忌み籠もる
83	蜻蛉　・214	薫	石山	
84	蜻蛉　・214	薫	石山	
85	蜻蛉　・217	匂宮	部屋	
86	蜻蛉　・219	薫		心秘め
87	蜻蛉　・227	匂宮		忌み籠もる
88	手習　・287	僧都たち		忌み籠もる
89	手習　・289	僧都たち		山籠る
90	手習　・293	僧都	山	山籠る
91	手習　・303	浮舟	山里	山籠る
92	手習　・319	母尼	山里	山籠る
93	手習　・344	僧都	山	山籠る
94	夢浮舟・374	僧都	山	山籠る

第一章　付録資料　(2)

『源氏物語』における「才」の用例調査

番号	巻名　・頁数	人物	学問／芸能／仏教	備考
1	桐壷　・040	右大弁		学才すぐれた博士で、高麗人と応対した
2	桐壷　・041	光源氏		臣下として朝廷の御補佐役をつとめるため、諸道の学問をお習わせになる
3	帚木　・085			学問を指す
4	帚木　・086	博士の娘		学問が身につき、公務に役立つような専門的なことを教えてくれる
5	帚木　・086	藤式部丞		無才
6	帚木　・096	小君		学問などもものになりそうで、出仕いたしかねている
7	若紫　・240	親王方、大臣	芸能	舞楽の才能
8	花宴　・353	帝、東宮		
9	賢木　・116	法師	仏教	
10	賢木　・140	光源氏		学才の深さ
11	明石　・275	東宮		
12	蓬生　・337	僧侶	仏教	
13	絵合　・381		芸能	音楽（琴）の才能
14	絵合　・388			学問を指す
15	絵合　・388		学問	学問を修得することを否定
16	絵合　・389		芸能	正式な学問以外の諸方面、すなわち諸々の芸能
17	絵合　・389		芸能	芸能
18	絵合　・390		芸能	芸能
19	絵合　・390			学問を指す
20	絵合　・390		芸能	琴
21	少女　・021	光源氏	学問	否定的用法
22	少女　・022	夕霧		光源氏がそう望んでいる
23	少女　・026	学者たち		
24	少女　・027	師		夕霧の師
25	少女　・029	大内記		
26	少女　・030	有能な人物		大学の栄えている時代に、有能な人物が輩出
27	少女　・030	学者たち		

28	少女　・030		芸能	学問芸道の才能
29	少女　・034	遊びの方の才	芸能	音楽の才能
30	少女　・037			内大臣が才について論じる
31	少女　・071	学生十人		放島の試み
32	胡蝶　・175	玉鬘	才能	母君（夕顔）に欠けていた才気が備わっている
33	常夏　・232	玉鬘	芸能	芸能
34	野分　・272	内大臣		光源氏の激賞（学問も無類）
35	真木柱・367	鬚黒大将		大将は漢学の才などのすぐれた方なのだ
36	藤裏葉・437	夕霧		内大臣の感嘆
37	若菜上・026	夕霧		朝廷に仕える政治上の学才（朱雀帝の考え）
38	若菜上・036	柏木		学問など難がなく備わっている
39	若菜上・073	朱雀院		院の帝は、男らしくしっかりした御学問などの面では頼りなくいらせられる
40	若菜下・168	明石の入道		ほんの走り書きふうの筆跡ながら、学才が察せられてその趣意も明確であり
41	若菜下・196		芸能	芸事
42	若菜下・197		芸能	芸道
43	若菜下・203	光源氏	芸能	芸能
44	鈴虫　・377	僧	仏教	
45	御法　・498		芸能	琴、笛などの芸能
46	橋姫　・124	八の宮	学問	否定的用法
47	橋姫　・127	阿闍梨	仏教	仏教の学問
48	橋姫　・128	阿闍梨	仏教	仏教の学問
49	橋姫　・134	一般の法師	仏教	仏教の学問
50	東屋　・020	左少将		
51	浮舟　・148	薫		学問なども、また政治向のことについても、誰に後れをおとりになることもあるまい

第二章　付録資料

『源氏物語』における「口惜し」の用例調査（桐壺巻～藤裏葉巻）

番号	巻名　・頁数	主体	対象	備考
1	桐壺　・025	世間	桐壺更衣	更衣の位について
2	桐壺　・030	桐壺の父	桐壺更衣	更衣の入内
3	帚木　・057	光源氏	とりえもない女性	そういう女性がつまらない
4	帚木　・059	世間	非参議の四位の人々	非参議の四位の人々の世間の評判もまんざらではない
5	帚木　・064	左馬頭	鈍感な女性	夫の気持ちに鈍感な妻に対して、いまいましく思う
6	帚木　・065	左馬頭	型のできていない女	
7	帚木　・065	左馬頭	ひれくれ者	
8	帚木　・072	指喰い女	左馬頭	だめな女だと見られたくない
9	帚木　・086	式部丞	博士の娘	つまらない、いまいましい
10	帚木　・102	光源氏	空蝉	空蝉と契ることがなかったとしたら、心残りだと思う
11	夕顔　・136	光源氏	夕顔	光源氏が夕顔の花についての嘆き
12	夕顔　・137	光源氏の乳母	光源氏	光源氏に会えないことを残念だと思う
13	夕顔　・138	光源氏	乳母	世を捨てることについて
14	夕顔　・144	惟光	夕顔の女房	惟光が夕顔の女房について、まんざらではないと評価する
15	夕顔　・144	頭中将	下の下の女	下の下の女の中で、思いがけなく相当の音を見つけられる
16	夕顔　・149	地の文	世間の女性	まんざらではない
17	夕顔　・182	光源氏	右近（夕顔の侍女）	ずっと世話をしてあげられないことについての嘆き
18	夕顔　・188	右近	夕顔	夕顔の急逝について
19	若紫　・206	若紫	雀の子	雀の子を犬君が逃してしまった
20	若紫　・224	北山の人たち	光源氏	光源氏の姿に感動された
21	若紫　・229	光源氏	僧都の返事	
22	若紫　・252	光源氏	若紫	光源氏は若紫が兵部卿宮に引き取られることを残念だと思う
23	若紫　・252	光源氏	若紫	光源氏が若紫を引き取る機会をやり過ぎたら、不本意だと思う
24	若紫　・260	兵部卿の宮	若紫	兵部卿の宮が若紫の行方不明についての嘆き

25	末摘花・268	命婦	末摘花	末摘花の琴の音をゆるりと聞かなかったので、残念
26	末摘花・291	光源氏	末摘花	風流気がなく、見栄えのしない人
27	末摘花・291	光源氏	末摘花	光源氏が末摘花の無風流さについての残念な気持ち
28	末摘花・297	光源氏	空蝉	空蝉を捨てられない気持ち
29	末摘花・301	光源氏	末摘花	和歌の作りについての嘆き
30	紅葉賀・311	女御や更衣		朱雀院への行幸の見物になれない
31	紅葉賀・328	世間	光源氏	立坊されないことについて、残念と思われる
32	花宴　・357	光源氏	朧月夜	そのまま彼女を放してしまった残念
33	花宴　・360	光源氏	朧月夜	素姓を探りたい
34	花宴　・361	若紫	光源氏	光源氏の夜の出かけについて、恨めしい
35	花宴　・363	光源氏	朧月夜	彼女に会えなかったら、残念
36	葵　　・039	葵の上	ご両親と光源氏	死別に名残惜しと思う
37	葵　　・056	光源氏	葵上	葵上に死去に対して
38	葵　　・075	右大臣	葵上	葵上に死去に対して
39	葵　　・076	光源氏	朧月夜	二人の関係について
40	葵　　・079	大宮	光源氏	葵上が死後、三条邸に伺わなかったら
41	賢木　・083	光源氏	六条御息所	伊勢下向
42	賢木　・090	光源氏	六条御息所	伊勢下向
43	賢木　・104	光源氏	朝顔	斎
44	賢木　・111	藤壺		光源氏との契り
45	賢木　・147	弘徽殿后	朧月夜	光源氏との関係で、女御などとも呼ばせられない
46	須磨　・178	朧月夜		光源氏と対面かなわぬ、分かれる
47	須磨　・181	光源氏	桐壺院	桐壺院を思う
48	須磨　・193	光源氏	紫の上	紫の上の面影が瞼に浮かんできた
49	須磨　・204	光源氏	五節の君	彼女と素通りしてしまう
50	須磨　・211	明石の君		自分の身に嘆く
51	明石　・238	明石の入道		夢の実現が気後れについて
52	明石　・245	明石の入道		山賤に落ちぶれたについて
53	明石　・253	明石の君		自分が田舎者について
54	明石　・264	光源氏		明石の君との別れを惜しむ
55	澪標　・281	朱雀院	朧月夜	朧月夜が自分の子を産まないこと

56	澪標　・281	朱雀院		朧月夜が光源氏に対しての恋心
57	澪標　・285	光源氏	明石の姫君	都で生まれなかったこと
58	澪標　・291	光源氏	明石の姫君	明石の姫君の意外な生まれについて
59	澪標　・294	光源氏	明石の姫君	五十に、（京で誕生したのだったら、万事、どのようにかお世話しがいのあるように取り計らって、うれしいことだろうに、残念なこと。所もあろうにああした田舎で、おいたわしい有様で生まれてきたものよ）
60	澪標　・303	明石の君		明石の君の思考に特徴的な身分意識
61	澪標　・303	明石の君		明石の君の思考に特徴的な身分意識
62	澪標　・308	明石の君		明石の君の思考に特徴的な身分意識
63	澪標　・310	光源氏	六条御息所	六条御息所は出家を決心したことを聞いて、以後、もう今までどおりの交際はできない
64	澪標　・310	光源氏	六条御息所	変わらぬ自分の気持ちを理解してもらえぬまま終わる
65	澪標　・319	光源氏	前斎宮（秋好中宮）	朱雀院の所望に背けず、前斎宮の人柄が愛らしく、このまま手はなしてしまうと残念
66	蓬生　・326	末摘花の女房たち	末摘花	急変した末摘花の現実を見つめ、やはり宿運だったのだと感じとる気持ち
67	絵合　・369	朱雀院	前斎宮	前斎宮の入内に残念な気持ち
68	松風　・401	光源氏	明石の君	光源氏は明石の君を東院に迎え入れようと考えていたものの、内心、彼女の生い立ちや身分のため、今後の生活に不安もあったので、明石の君のみずから一歩退いた慎重な態度に感服したのである
69	松風　・405	明石の入道	明石の君	明石のような田舎に娘を隠すのは残念
70	松風　・414	光源氏	明石の姫君	ここで日陰の身として育つのでは、いじらしくもあり、残念なこと
71	松風　・418	頭中将や兵衛督	光源氏	（昨夜の月に、お供を遅れてしまいましたのが残念に存ぜられました）光源氏にお詫びする言葉

72	薄雲　・435	光源氏	紫の上	紫の上が子を産まないことに残念
73	薄雲　・442	光源氏	太政大臣（左大臣）	薨去
74	薄雲　・442	冷泉帝	太政大臣（左大臣）	薨去
75	薄雲　・444	藤壺		思いまかせず心の晴れぬまま過ごしてきてしまいました。
76	薄雲　・446	藤壺	光源氏	光源氏の厚意に対して、藤壺の感謝の念
77	薄雲　・446	冷泉帝	光源氏	光源氏に譲位を断れた
78	薄雲　・459	光源氏	斎宮の女御	光源氏は女御の容姿を直接見たことがない
79	薄雲　・461	光源氏	明石の姫君	姫君の入内
80	朝顔　・469	光源氏	朝顔	朝顔の御返事も気をゆるしてはお申しあげにならない
81	朝顔　・471	光源氏	女五の宮	もしも私が須磨で死んでいて、今日の御立派なお姿を見届けられなかったら
82	朝顔　・477	光源氏		朝顔との関係
83	朝顔　・488	光源氏		朝顔との仲について、紫の上に弁明
84	朝顔　・491	光源氏	藤壺の中宮	藤壺が亡くなったから
85	朝顔　・495	光源氏	藤壺の中宮	藤壺の夢を見た
86	少女　・023	夕霧		六位授与されたこと
87	少女　・040	内大臣		夕霧と雲居雁の関係
88	少女　・042	内大臣		夕霧と雲居雁の関係
89	少女　・043	大宮		夕霧と雲居雁の関係
90	少女　・044	内大臣		夕霧と雲居雁の関係について、女房たちも陰では悪く言ってあざ笑っているらしい
91	少女　・050	夕霧		夕霧と雲居雁の仲を裂かれること
92	少女　・052	大宮	内大臣	内大臣が雲居雁を引き取る
93	少女　・055	夕霧の乳母		雲居雁が移されること
94	少女　・062	夕霧	五節の君	近づけないこと
95	少女　・064	夕霧	惟光の娘	娘が典侍の欠員になること
96	少女　・069	大宮	夕霧	男というのあ、どんなに身分の低い者でも気位は高く持つものでしょう
97	少女　・074	光源氏		弘徽殿太后の長寿に、逆に藤壺の早逝を無念と嘆く

98	玉鬘　・087	光源氏	夕顔	夕顔の柔和で従順な性格は、光源氏によって、これ以後幾度も懐かしく回想される
99	玉鬘　・098	肥後の土豪大夫監		自分は立派な官吏だと自慢する
100	玉鬘　・121	光源氏	玉鬘	玉鬘の行方の分からなくなってしまったこと
101	玉鬘　・123	光源氏	玉鬘	夕顔のことを思い出す様子となる人
102	玉鬘　・125	光源氏	玉鬘	光源氏は玉鬘が田舎育ちで心配していたが、返歌にソツがなくてひと安心する
103	玉鬘　・127	地の文	玉鬘の女房	筑紫では、そう見苦しからぬ女房なども
104	玉鬘　・139	光源氏	女性	どんなことでもまったく無調法というのも感心しないでしょう
105	初音　・159	地の文		思いをそそる声々は、絵にも描き残すことのできないのが残念である
106	胡蝶　・179	光源氏	玉鬘	玉鬘を他人の妻にする
107	蛍　　・195	玉鬘	母の夕顔	母君が亡くなっておしまいになったのが残念なこと
108	蛍　　・197	地の文		母君の御おじであった宰相ぐらいの身分だった人の娘で、たしなみなどもさほどわるくないのが…
109	蛍　　・218	内大臣	雲居雁	内大臣は、雲居雁を東宮に入内させようと欲したのに、夕霧と恋仲になった
110	蛍　　・219	内大臣	玉鬘	こうして何人といない娘の一人を失くしたのが残念なことで
111	常夏　・237	内大臣	雲居雁	雲居雁入内を今なお諦めきれない
112	野分　・285	内大臣	雲居雁	雲居雁が夕霧を忘れかねて悩んでいることにおわす
113	行幸　・291	玉鬘		光源氏や夕霧に見慣れたので、同じ目鼻をもった人間とも見えぬくらい、情けなくも圧倒されていること
114	行幸　・310	内大臣		内大臣、光源氏と玉鬘との仲を忖度する
115	藤袴　・334	夕霧	玉鬘	なまじ打ち明けたのを悔いる気持ち

116	藤袴　・337	光源氏		玉鬘との交情関係が人に知られ、万が一の窮地に陥ることを苦慮
117	真木柱・350	光源氏	玉鬘	光源氏の玉鬘との関係の断たれた口惜しさをいう
118	真木柱・352	帝	玉鬘	玉鬘を自分以外の男と結ばれる運命にある人
119	真木柱・352	兵部卿の宮	玉鬘	鬚黒との結婚
120	真木柱・353	玉鬘		自分が鬚黒との結婚
121	真木柱・354	光源氏	玉鬘	他人のものとして手放してしまう
122	真木柱・387	冷泉帝	玉鬘	鬚黒に後れをとられた悔恨
123	真木柱・395	光源氏	玉鬘	玉鬘と会えない
124	梅枝　・418	地の文		和歌に関する識見を備えていて、十分に光源氏の相談相手になりうる女房たち
125	藤裏葉・435	夕霧		柏木を介して、自分の気持ちを伝えて、ほしいと依頼するとともに、内大臣の意向を探ろうともする
126	藤裏葉・445	内大臣	夕霧	内大臣の負けん気

第四章　付録資料

『源氏物語』における「うけばる」の用例調査

番号	巻名　・頁数	人物	要素	備考
1	桐壺　・043 頁	●藤壺中宮	身分	藤壺は身分が高いので、彼女は弘徽殿女御らに気がねする必要もない
2	賢木　・089 頁	六条御息所	庭	（六条御息所の庭の風情）「うけばる」は、足らぬところなく完璧に満たされている様子
3	賢木　・147 頁	女御	位	右大臣は朧月夜が女御になる意、中宮になる可能性も含めているか
4	絵合　・372 頁	光源氏	行動	他にはばかることなくわがもの顔にふるまうこと。院をはばかって自分は表立つまいとする
5	初音　・155 頁	空蟬	行動	こちらの女君は、我こそはと主人顔をするではなく……
6	胡蝶　・170 頁	兵部卿宮	独身	独身であるため、玉鬘に求婚の意を示す
7	行幸　・310 頁	光源氏	行動	（玉鬘をはっきり愛人としては扱わす）他にはばからずふるまう意
8	藤袴　・328 頁	内大臣	行動	人にはばからず自信をもってふるまう意
9	若菜上・045 頁	●光源氏	身分	本当の太政天皇の格式のようには威儀をお張りにならず……
10	若菜上・058 頁	●鬚黒	身分	光源氏と鬚黒は舅と婿の関係
11	若菜上・105 頁	●明石姫君	身分	自分は大きな顔をして高い地位にいられるような身分でありえなかったのに……
12	若菜下・154 頁	舎人たち	行動	射取に自信を持つ
13	宿木　・484 頁	●薫	身分	（語り手の評言）。誰はばからぬところが憎い、とする
14	東屋　・024 頁	●源少納言、讃岐守	身分	常陸介の婿としての身分

第五章　付録資料　(1)

『源氏物語』における「後の世」の用例調査

番号	巻名（頁数）	主体	意味	備考
1	若紫　・203	良清	来世	明石の入道が法師となって、後世を祈る
2	若紫　・211	僧都	来世	僧都は光源氏に御世のことを聞かせる
3	若紫　・211	光源氏	来世	来世の苦患
4	賢木　・117	光源氏	来世	仏道で来世を頼む
5	賢木　・135	大宮	来世	来世のことを思う
6	明石　・223	光源氏	将来	後の世まで浮名を残す
7	明石　・234	語り手	来世	入道の後世を念ずるにふさわしい御堂
8	明石　・240	明石の入道	来世	光源氏の琴の音によって、極楽の妙音を連想した
9	明石　・244	明石の入道	来世	後世のための修行
10	絵合　・392	光源氏	来世	わが栄華の極みを恐れ、後生を思う
11	松風　・400	光源氏	後々	後々
12	薄雲　・452	冷泉帝	来世	来世にも及んで罪障となる（出生秘密）
13	薄雲　・461	光源氏	来世	往生極楽の勤行
14	蛍　・212	光源氏	将来	次の世代（物語論）
15	常夏　・226	光源氏	将来	次の世代（夕霧の評判）
16	真木柱・372	式部卿宮	来世	死ぬこと
17	梅枝　・412	光源氏	将来	次の世代
18	若菜上・018	朱雀院	将来	女三の宮の将来を心配する
19	若菜上・020	朱雀院	将来	女三の宮の将来を心配する
20	若菜上・033	朱雀院	将来	宿世にて、後の世に衰へある時も…
21	若菜上・034	朱雀院	将来	女三の宮の将来を心配する
22	若菜上・038	東宮	将来	女三の宮の将来について、朱雀院に助言する
23	若菜上・048	光源氏	将来	女三の宮の将来
24	若菜上・115	明石の入道	来世	
25	若菜上・119	尼君	来世	同じ蓮にすむべき後の世の頼み…（明石の入道）
26	若菜上・133	尼君	来世	来世に思いを馳せては物思いに沈んでいらっしゃる
27	若菜上・144	柏木	将来	芸事の伝承
28	若菜下・270	光源氏	来世	来世での苦患を言う（女三の宮を訓戒）
29	柏木　・289	柏木	来世	出家の意思がある
30	柏木　・299	光源氏	来世	後の世の罪もすこし軽みなんや…
31	柏木　・316	柏木	来世	今世に思ひ残す事なれば、勿論後世のさはりともなるべしと也
32	鈴虫　・376	光源氏	来世	後の世にだに、かの花の中の宿に隔てなくとを思ほせ（女三宮）

33	夕霧　・444	一条御息所	来世	御息所は落葉の宮のことが心配で臨終にも死にきれない思いをしたことが、成仏の防げにまでもなっているのだろうと
34	夕霧　・460	朱雀院	来世	現世でも幸福は得られず、来生でも極楽往生できないで（落葉の宮の出家の望みを止める）
35	御法　・493	光源氏	来世	御生の功徳のためになるような仏事を行うのが、紫の上の昨今である
36	御法　・494	光源氏	来世	後の世には、同じ蓮の座をも分けんと契かはしきこえたまひて…（紫の上）
37	御法　・518	光源氏	来世	極楽往生して紫の上と一つ蓮台に座れるようになるべく専念（紫の上）
38	匂兵部卿・24	薫	来世	自分（薫）も出家して
39	匂兵部卿・26	光源氏	来世	時期を誤らないで出家し、嵯峨院で仏道修行に専念したこと
40	橋姫　・131	八の宮	来世	来世までを観ずる思慮の奇特さ
41	総角　・226	薫	来世	後生への願い
42	総角　・266	大君	将来	
43	総角　・312	大君	来世	この世の事でこれほど心痛されるうえに、後生の事までも
44	宿木　・408	匂宮	来世	現世ではもちろん、死後もまた一蓮託生をと誓う（中の君）
45	宿木　・456	阿闍梨	来世	
46	東屋　・047	中の君	来世	八の宮の追善
47	東屋　・056	中将の君	来世	浮舟のことを心配する
48	蜻蛉　・230	薫	来世	仏のお導きによって後の世のことばかりを誓っていた。
49	手習　・336	浮舟	来世	この世で幸福を得ることはもはや望みがないが、せめて来世の清福を願う
50	手習　・344	中宮	来世	僧都を感謝する
51	手習　・377	浮舟	来世	後世の往生を願って修行をしたい

第五章　付録資料　(2)

『源氏物語』における「蓮」の用例調査

番号	巻名　・頁数	主体	対象	意味
1	明石　・245	明石入道	自分	蓮の台
2	朝顔　・496	光源氏	藤壺中宮	蓮の台
3	初音　・152	語り手	花散里・明石の君など	花
4	若菜上・113	明石入道	自分	蓮の台
5	若菜上・115	明石入道	自分	蓮の台
6	若菜上・119	尼君	明石入道	蓮の台
7	若菜下・245	語り手		花
8	若菜下・245	紫の上		花
9	若菜下・245	光源氏	紫の上	蓮の台
10	鈴虫　・373	語り手		花
11	鈴虫　・374	語り手		花
12	鈴虫　・376	光源氏	女三宮	蓮の台
13	鈴虫　・376	女三宮	光源氏（否定用法）	蓮の台
14	御法　・494	光源氏	紫の上	蓮の台
15	御法　・518	光源氏	紫の上	蓮の台
16	幻　　・542	語り手		花
17	匂兵部卿・24	薫	女三宮	蓮の露
18	橋姫　・127	八の宮	阿闍梨	蓮華
19	蜻蛉　・247	語り手		花
20	手習　・306	語り手		蓮の実

参考文献一覧

序章

＊青木保・黒田悦子『儀礼―文化と形式的行動』（東京大学出版会、一九八八年）
＊坪井洋文「ムラ社会と通過儀礼」日本民俗文化大系８『村と村人＝共同体の生活と儀礼＝』小学館、一九八四年）
＊井之口章次編『講座　日本の民俗３　人生儀礼』（有精堂、一九七八年）
＊中村義雄『王朝の風俗と文学』（塙書房、一九六二年）
＊山中裕・鈴木一雄編『平安時代の儀礼と歳事』（至文堂、一九九一年）
＊武者小路辰子「若菜の賀宴」（『国文学解釈と鑑賞』至文堂、二〇〇〇年）
＊山中裕『歴史物語成立序説』（東京大学出版会、一九六二年）
＊小林正明「五月五日の源氏物語」（『中古文学』五三、一九九四年五月）
＊服藤早苗「平安王朝社会の着袴」（『平安王朝の子どもたち―王権と家・童―』吉川弘文館、二〇〇四年）
＊小嶋菜温子編『王朝文学と通過儀礼』（竹林舎、二〇〇七年）
＊小嶋菜温子・長谷川範彰編『源氏物語と儀礼』（武蔵野書院、二〇一二年）
＊折口信夫全集第三巻（中央公論社、一九六六年）
＊林田孝和「源氏物語の民俗学的研究」（『源氏物語の精神史研究』桜楓社、一九九三年）
＊クロード・レヴィ＝ストロース著、早水洋太郎訳『神話論理』（みすず書房、二〇〇六年）
＊エドマンド・リーチ著、青木保・宮坂敬造訳『文化とコミュニケーション』紀伊國屋書店、一九八一年

第一章

＊小嶋菜温子編『平安時代と隣接諸学３　王朝文学と通過儀礼』（竹林舎、二〇〇七年）
＊小嶋菜温子・長谷川範彰編『源氏物語と儀礼』（武蔵野書院、二〇一二年）
＊青木慎一「夕霧の通過儀礼―雲居雁との結婚を中心に―」（『源氏物語と儀礼』）
＊池田節子「物語史における元服と裳着―『源氏物語』『狭衣物語』を中心に―」（服藤早苗・小嶋菜温子編『生育儀礼の歴史と文化』森話社、二〇〇三年）
＊島田とよ子「夕霧の官位について―四位と六位―」（『園田語文』一九九一年十一月）
＊菊地真「『源氏物語』「少女巻」における夕霧の初任叙位」（『国文学研究』一九九六年十月）
＊高田信敬「夕霧元服―少女巻箋注―」（『むらさき』一九九八年十二月）
＊秋澤亙「源氏物語の世人」（『源氏物語の准拠と諸相』おうふう、二〇〇七年）
＊山岸徳平「源氏物語の教育観」（『源氏物語講座』五、有精堂、一九七五年）
＊野口元大「夕霧元服と光源氏の教育観」（『講座源氏物語の世界』五、有斐閣、一九八一年）

＊鈴木一雄「『源氏物語』に描かれた大学寮」（『平安貴族の環境』至文堂、一九九一年）
＊塚原明弘「冷泉政権論―光源氏の摂政辞退と夕霧の大学入学―」（『源氏物語ことばの連環』おうふう、二〇〇四年）
＊松岡智之「冷泉朝の光源氏―秋好立后と夕霧大学寮入学―」（『むらさき』一九九七年十二月）
＊植田恭代「元服・裳着―源氏物語にみる成人儀礼―」（『源氏物語研究集成・第十一巻・源氏物語の行事と風俗』風間書房、二〇〇二年）
＊増田繁夫「大学寮」（『講座源氏物語の世界』第五集、有斐閣、一九七五年）
＊小嶋菜温子「ぬりごめの落葉宮」『源氏物語の性と生誕―王朝文化史論』有斐閣、二〇〇四年）
＊秋山虔編『王朝語辞典』（東京大学出版、二〇〇〇年）
＊ファン･ヘネップ『通過儀礼』一〇一～二頁（岩波文庫、二〇一二年）
＊民俗学研究所編『民俗学辞典』三一二頁（東京堂出版、一九五一年）
＊戴庞海『先秦冠礼研究』（中州古籍出版社、二〇〇六年）
＊Ｍ・エリアーデ著・堀一郎訳『生と再生――イニシェーションの実証的意義』二〇～一頁（東京大学出版会ＵＰ選書、一九七一年）
＊小林茂美「玉鬘物語論―物語展開の原動質から―」（『源氏物語論序説―王朝の文学と伝承構造―』桜楓社、一九七八年）
＊池田節子「物語史における元服と裳着／『源氏物語』『狭衣物語』を中心に」（『生育儀礼の歴史と文化―子供とジェンダー―』森話社、二〇〇三年）
＊秋山虔「好色人と生活者―光源氏の『癖』」（『王朝の文学空間』東京大学出版会、一九八四年）
＊秋山虔・室伏信助編『源氏物語大辞典』（角川学芸出版、二〇一一年）
＊笹川勲「『源氏物語』の「才」と〈漢才〉」（『国学院大学大学院紀要―文学研究科―』四〇、二〇〇九年三月）
＊吉村研一・上原作和編『人物で読む源氏物語・第十六巻―内大臣・柏木・夕霧』勉誠出版、二〇〇六年）
＊佐貫新造「夕霧―誕生から乙女巻まで―」（『帝塚山学院大学・日本文学研究』三〇、一九九九年二月）
＊長谷守紘「『源氏物語』における「まめ人」の乱れ―夕霧の「下の心」に焦点を当てて―」（『愛知大学国文学』四六、二〇〇六年十一月）
＊佐藤瞳「『まめ』と夕霧―『源氏物語』・「少女」巻という始発―」（『湘南文学』四八、二〇一四年三月）

第二章

＊小嶋菜温子「産養をめぐる史劇―明石姫君の立后まで」（後藤祥子他編『平安文学の想像力―論集平安文学　第五号』、勉誠出版、二〇〇〇年）
＊小嶋菜温子「光源氏と明石姫君――産養をめぐる史劇」（『国文学』一九九九年四月）
＊小嶋菜温子「語られない産養（三）」（小嶋菜温子『源氏物語の性と生誕』立教大学出版社、二〇〇四年）
＊小林正明「五月五日の源氏物語」（『中古文学』五三、一九九四年五月）
＊胡潔「明石の姫君の五十日について」（鈴木一雄監修『源氏物語の鑑賞と基礎知識』至文堂、二〇〇二年）
＊秋澤亙「『蛭の子が齢』をめぐって」（小嶋菜温子、長谷川範彰編『源氏物語と儀礼』武蔵野書院、二〇一二年）
＊小嶋菜温子「源氏物語の産養と人生儀礼―〈家〉と〈血〉の幻影」（小嶋菜温子『源氏物語の性と生誕』立教大学出版社、二〇〇四年）
＊中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編『角川古語大辞典』第二巻（角川書店、一九八四年）
『日本国語大辞典（第二版）』第四巻（小学館、二〇〇一年）
＊林田孝和他編『源氏物語事典』（大和書房、二〇〇二年）
＊山中裕・鈴木一雄編集『平安時代の儀礼と歳事』（至文堂、一九九一年）
＊『国史大辞典』第二巻（吉川弘文館、一九八〇年）
＊飯沼清子「誕生・産養・裳着」（山中裕『源氏物語を読む』吉川弘文館、一九九三年）
＊服藤早苗「通過儀礼から見た子どもの帰属―平安中期を中心にして」（田中真砂子他編『縁組と女性―家と家のはざまで』早稲田大学出版社、一九九四年）
＊吉海直人「明石姫君の乳母」（『平安朝の乳母達―源氏物語への階梯』、世界思想社、一九九五年）
＊中村義雄「幼年期の行事―五十日」（『王朝の風俗と文学』塙書房、一九六二年）
＊服藤早苗は「平安王朝社会の着袴」（『平安王朝の子どもたち―王権と家・童―』吉川弘文館、二〇〇四年）
＊倉田実「平安朝の移動する子どもたち―『源氏物語』の養子縁組」（服藤早苗編『女と子どもの王朝史――後宮・儀礼・縁』森話社、二〇〇〇年）
＊村田郁恵「『源氏物語』の「養い親・養い子」」（『古代中世文学論考』第七集、新典社、二〇〇二年）
＊倉田実『王朝摂関期の養女たち』（翰林書房、二〇〇四年）
＊植田恭代「元服・裳着―源氏物語にみる成人儀礼」（増田繁夫他編『源氏物語研究集成・第十一巻・源氏物語の行事と風俗』風間書房、二〇〇二年）
＊秋澤亙「『夜光る玉』考――『源氏物語』潜在王権論の視座における明石姫君の位置――」（『中古文学』、一九九二年十一月）
＊古賀侊夫「源氏物語における王統思想―明石中宮の位相―」（『平安時代の歴史と文学　文学編』吉川弘文館、一九八一年十一月）

＊福長進「源氏「立后」の物語」（日向一雅編『源氏物語重層する歴史の諸相』竹林舎、二〇〇六年）
＊畠山篤「ヤマトタケルの女装―歴史のなかの女装」（礫川全次他著『女装の民俗学』批評社、一九九四年）
＊折口信夫「ほうとする話」（『折口信夫全集』第二巻、中央公論社、一九八七年）
＊松井健児「『源氏物語』の贈与と饗宴―玉鬘十帖の物語機構」（『源氏物語の生活世界』翰林書房、二〇〇〇年）

第三章

＊今井源衛「女三の宮物語の発端」（『完訳日本の古典、第十九巻、源氏物語（六）』小学館、一九八六年）
＊今井久代「皇女の結婚―女三宮降嫁の呼びさますもの―」（『源氏物語構造論』風間書房、二〇〇一年）
＊後藤祥子「皇女の結婚―落葉宮の場合」（『源氏物語の史的空間』東京大学出版会、一九八六年）
＊今井源衛「女三の宮の降嫁」（『源氏物語研究』未来社、一九六二年）
＊石田穣二「若菜の巻について」（『源氏物語論集』桜楓社、一九七一年）
＊今井久代「皇女の結婚―女三宮降嫁の呼びさますもの―」（『源氏物語構造論』風間書房、二〇〇一年）
＊浅尾広良「昼渡る光源氏―女三宮との結婚儀礼に見る天皇準拠の構造(『源氏物語の準拠と系譜』、翰林書房、二〇〇四年）
＊土居奈生子「〈准太上天皇〉の結婚『女三の宮の降嫁』再検討―」（『名古屋大学国語国文学』八三、一九九八年十二月）
＊吉海直人『源氏物語の乳母学―乳母のいる風景を読む―』世界思想社、二〇〇八年
＊工藤重矩「婚姻制度と恋愛物語の型―母親の立場による物語構想の制約」（『源氏物語の結婚』中公新書版・中央公論社、二〇一二年）
＊「滕文公下」（全釈漢文大系　第二巻　宇野精一著『孟子』、集英社、一九七三年）
＊「形勢第二」（全釈漢文大系　第四十二巻 遠藤哲夫著『管子上』明治書院、一九八九年）
藤本勝義「女三宮の乳母と兄・左中弁」（『源氏物語の想像力―史実と虚構―』笠間書院、一九九四年）
＊西郷信綱『源氏物語を読むために』平凡社、一九八三年
＊「継嗣令第十三」（日本思想大系『律令』岩波書店、一九七六年）
＊梅山秀幸「上代の結婚について」（『創造の世界』46、一九八三年）
＊『風俗通義校注』（王利器校注『風俗通義校注』中華書局出版、一九八一年）
＊「月令」（全釈漢文大系　第十二巻　市原亨吉他著『礼記上』集英社、一九七六年）
＊荆雲波「士昏礼における神話思惟」（『文化記憶と儀式叙事』、南方日報出版社、二〇一〇年 ）

第四章

＊中村義雄（『王朝の風俗と文学』塙書房、一九六二年）
＊山中裕・鈴木一雄編集『平安時代の儀礼と歳事』（至文堂、一九九一年）
＊鈴木日出男「天地・鬼神を動かす力」（『源氏物語虚構論』東京大学出版社、二〇〇三年）
＊小嶋菜温子「六条院と音楽―喩としての音楽」（『源氏物語批評』有精堂出版、一九九五年）
＊小嶋菜温子「光源氏の〈家〉と〈血〉の閉塞―横笛・鈴虫巻の月と音楽」（『源氏物語の性と生誕―王朝文学史論』立教大学出版社、二〇〇四年）
＊竹田誠子「若菜下巻女楽における“場”の設定と主題性」（王朝物語研究会編『研究講座　源氏物語の視界 4―六条院の内と外―』新典社、一九九七年）
＊金孝珍「准太上天皇光源氏の四十賀―上皇・天皇の算賀儀礼内容を通して―」（日向一雅編『源氏物語の礎』青簡社、二〇一二年）
＊浅尾広良「光源氏の算賀―四十賀の典礼と准拠―」（『源氏研究』第七号、翰林書房、二〇〇二年）
＊中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編『角川古語大辞典』第二巻（角川書店、一九八四年）
＊秋山虔、室伏信助編『源氏物語大辞典』（角川学芸出版、二〇一一年）
＊『日本国語大辞典（第二版）』第四巻（小学館、二〇〇一年）
＊斎藤紗代「『源氏物語』鬚黒についての一考察」（『成蹊国文』第三十五号、成蹊大学文学部）
＊『日本国語大辞典（第二版）』第四巻（小学館、二〇〇一年）
＊Ａ・ファン･ヘネップ『通過儀礼』（岩波文庫、二〇一二年）
＊王貴民著 『中国礼俗史』文津出版社 民国八十二年）
＊竹沢尚一郎『象徴と権力――儀礼の一般理論』勁草書房、一九八七年
＊山内昶「王権と転倒儀礼」甲南大学紀要文学編 67、一九八七年
＊青木保『儀礼の象徴性』岩波書店、一九八四年
＊竹沢尚一郎『象徴と権力――儀礼の一般理論』勁草書房、一九八七年
＊武者小路辰子「若菜巻の賀宴」（鈴木一雄監修『源氏物語の鑑賞と基礎知識』至文堂、二〇〇〇年）
＊今井源衛「兵部卿宮のこと」（『源氏物語の研究』未来社、一九六二）
＊三田村雅子「懐妊と算賀の時間」（『源氏物語―物語空間を読む』筑摩書房、一九九七年）
＊川名淳子「若菜巻　光源氏四十賀について（一）―紫の上主催の賀を中心に―」（『立教大学日本文学』第五十二号、一九八四年七月）
＊池田節子「光源氏四十賀と朱雀院五十賀の相違を中心に」（小嶋菜温子・長谷川範彰編『源氏物語と儀礼』武蔵野書院、二〇一二年）
＊池田尚隆「『栄花』と『源氏』と『小右記』―藤原娍子記事を中心に―」（『山梨大学教育学部研究報告』一九八九・二）
＊松井健児「宮廷文化と遊びわざ」（『源氏物語の生活世界』翰林書房、二〇〇〇年）
＊袴田光康「『源氏物語』の算賀―宮廷算賀と直系皇統の視点から―」（小嶋菜温子編『王朝文学と通過儀礼』竹林舎、二〇〇七年））

＊高田信敬「朱雀院の行幸―紅葉賀臆説―」（森一郎・岩佐美代子・坂本共展編『源氏物語の展望』第十輯、三弥井書店、二〇一一）
＊三谷邦明「源典侍物語の構造」（『物語文学の方法Ⅱ』有精堂、一九八九年）
＊松井健児「朱雀院行幸と青海波」『源氏物語の生活世界』翰林書房、二〇〇〇年）
＊三田村雅子「花宴」（秋山虔編『新・源氏物語必携』學燈社、一九九七年）
＊村井利彦「輔翼の思想―頭中将と光源氏、柏木と夕霧の友情―」（『人物で読む「源氏物語」第十六巻――内大臣・柏木・夕霧』勉誠出版、二〇〇六年）
＊池田節子「光源氏四十賀と朱雀院五十賀の相違を中心に」（小嶋菜温子・長谷川範彰編『源氏物語と儀礼』武蔵野書院、二〇一二年）

第五章

＊青木慎一・長谷川範彰・馬場淳子「『源氏物語』通過儀礼一覧」
＊頼富本宏「源氏物語の葬送―とくに仏教儀礼の立場から―」（小嶋菜温子編『王朝文学と通過儀礼』竹林舎、二〇〇七年）
＊林田孝和「源氏物語の葬列―「車より落ちぬべう惑ひ給へば」を焦点に―」（『源氏物語の精神史研究』桜楓社、一九九三年）
＊松本真菜美「葬送儀礼関係歌の流れから見る『源氏物語』」（小嶋菜温子・長谷川典彰編『源氏物語と儀礼』武蔵野書院、二〇一二年）
＊中西紀子「光源氏の哀しみの形姿―葵上葬送における追悼表現を中心に―」（『王朝文学研究誌』大阪教育大学大学院王朝文学研究会、一九九九年）
＊林田孝和「源氏物語の葬列」（『源氏物語の精神史研究』桜楓社、一九九三年）
＊中村義雄『王朝の風俗と文学』（塙書房、一九六二年）
＊山中裕・鈴木一雄編集『平安時代の儀礼と歳事』、至文堂、一九九一年
＊鬼束隆昭「源氏物語における死・葬送・服喪の表現」（源氏物語探求会編『源氏物語の探求第七輯』一九八二年八月）
＊河添房江「源氏物語の内なる竹取物語――御法・幻を起点として――」（『源氏物語の喩と王権』一九九二年）
＊塚原明弘「紫の上の死と葬送の表現」（『中古文学』第五十三号）
＊永井和子「紫の上における死の様式」（『源氏物語と老い』笠間書房、一九九五年）
＊林田孝和「源氏物語における死後の描写―ともし火をかかげつくして―」（『源氏物語の発想』桜楓社、一九八〇年」）
＊彭林『儀礼』四〇三頁（中華書局、二〇一二年）
＊藤野岩友『増補巫系文学論』二一一～二頁（大学書房、一九六九年）
＊室伏信助「葵の上」（『国文学』学燈社、一九九一年・五）
＊吉井美祢子「葵の上の「政治性」とその意義」（森一郎編著『源氏物語作中人物論集―付・源氏物語作中人物論・主要論文目録―』勉強社、一九九三年）
＊吉海直人「左大臣の暗躍――『源氏物語』の再検討」（『日本文学』一九九六年第 45 巻第 9

号）
＊和田由紀子「葵上の登場――『源氏物語』構造論の一環として――」（『成蹊国文』第三十五号、二〇〇二年）
＊猿渡学「「とはぬはつらきものにやあらむ」―葵上試論―」（『文芸研究』第一三五集、一九九四年一月）
＊森下幸男「葵の上について―その人物像と運命」（『日本文学研究』一九五七年・五）。
＊福田将士「源氏物語の〈死〉の儀礼―葵上＝紫上の図式―」（『国際文化研究紀要 第 4 号』一九九八年）